
約束の先にあるもの

新田春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

約束の先にあるもの

【Nコード】

N2264X

【作者名】

新田春

【あらすじ】

『結婚する——』

初恋の人から届いた手紙に衝撃を受けたエレンは、二度と来ないと決めていた王都に来てしまった。

そこで金髪の美女と出会い——彼女が初恋相手だと知る。

男に戻すため、呪薬を求めた騎士と魔法薬剤師は、王都の隠された真実を知ることになる。 *細かい修正はサイトのみになります。

ストーリーは同じです。

金色の女神 1

騎士団長になるのが、おれの夢

宮廷魔術師になるのが、わたしの夢。

絶対になれよ、約束だぞ。

うん、絶対になる。やくそくする。

おれが騎士団長になったら――。

ってね、十二歳で王都に行った彼は、ちゃーんと騎士団長になりましたとき、おしまい。

……………。

…………… おおおお、おしまいじゃない！

誰か来てえええええ！

朝から準備して待っているの！ 薬の配達も、お茶の準備も万全なの！ あとは、ドア鈴が鳴るだけなの！

動けー、動けー。この思い届けー。

くそう、ピクリとも動かない。

明日からのご飯が一品、減ってしまう危機に直面しているのに、誰も来ない。

風邪薬でも、胃腸薬でも、毒薬でもいいから誰か薬を買ってよー。こつ見えても魔法薬剤師なんだから、風邪下痢発熱腹痛なんてものは、ちよちよいのちよいで治しますよー。

田舎の村に魔法薬剤師の店なんて、めったにないんだから。

ひまひまひまー。

ふて寝だ、ふて寝。テーブルの上でごろんしやる。ごろーん。
……はあ……ものすごくヒマ。

ヒマでヒマで、時間がありすぎると昔のことを思い出すからイヤ。
忘れたいのに、忘れられない初恋がキツイ。

初恋は咲かない、実らない、しばむだけ。それなのに、しぶとく
枝にぶら下がったまま新しい実りが無い。

もう、二十六になるのに……いやいやいや、二十六だから実りが
ないんだよ！

……よけいにへこんだ……しくしく。

亡くなったお祖母ちゃんの跡を継いで、実家の薬屋を営んでいる
けど懐がブリザードです。先月のお財布さんは砂を食べました。

肉が食べたーい！ 干し肉じゃなくて、厚みのある柔らかい、ほ
つぺが落ちちゃうような肉が食べたい！

豆あきた。草汁しんどい。動物性脂肪が食いたい。脂肪食べない
と胸の脂肪が消えちゃう。

子供の頃の洋服が今でも着られるから、いーやーだー。
はあ……。

去年、実家^{じけい}に帰ってきた。お祖母ちゃんが亡くなったから。

赤ん坊の頃に両親を失った私の、たった一人の家族。

私のお母さんでもあり、お師匠様。

最後に会ったのは、五年前になる。

いろいろと落ち込んでいた私に、いつもと変わらない大好きな笑
顔を見せてくれたのが、最後の思い出。ずっと前から病気にがかっ
ていたなんて知らなかった。

何も言ってくれなかったから。

お祖母ちゃんほどの天才魔法薬剤師でも治せなかった不治の病。

何の病気だったのか、今でもわからない。

急激に痩せているわけでもなく、太ってもない。

いつものお祖母ちゃんが、白い棺桶で眠っていた。

大切な花に囲まれて、ふとした瞬間に「お帰り」って笑ってくれ
そうで……うー……思い出したら、じんわり出てきた。

葬儀の日、村の人全員が泣いてくれた。

泣きながら、私を完全包囲。

「村で唯一の薬屋がなくなってしまった。医者がないのに、薬屋
までがなくなってしまったら、どうすればいいんだい？ この村は
どうなるのかな？ ねえねえねえねえ」

村長さんがそんなことを言うの。顔は涙で濡らして、目は獲物を
見る野獣のごとく光らせて、後ろでロープ握りしめて。

こっちは悲しさいっぱい泣いていたのに、一瞬で恐怖いっぱい
に泣いたわよ！

拒否も許さないってか。てめえの血は何色で作られているのか調
べたいわよ、あの悪魔め。

まったく、思い出の場所を簡単に手放したりしないわよ。亡くなる
一年前から、店を継ぐって決めていたし。

おかげで湿っぽい葬儀が一瞬にして、お祭りごちそう葬儀に早変
わり。子牛の丸焼きとか、いつから準備してたのかな？ 湿っぽい
お別れよりは、賑やかな方がいいと思うけどね。私個人としては、
ちょー納得がいかねえ。嘘泣きで包囲したのかよ、あんちくしょー
ども。

小さな田舎村には、医者や魔法薬剤師がほとんどいないと言って
もいい。店にいる閑古鳥を見ればわかるじゃない。いる方が珍しい
もの。魔法薬剤師の目から見れば私の方が変わり者扱いだわ。

村長さんの不安は十分わかる。

私、この村大好きよ。

だけどね、何とかは風邪を引かないっていうアレな人ばかりで懷が毎日、寒いよーって凍えてる。

たまーに食事にお呼ばれしちゃったりするけど、毎日はね……私にも意地つてもものがあるわよ。

葬儀が終わって、ようやく時間が取れたから店の経営状況を調べたわけ。

綺麗にプラスとマイナスがつぶし合って、見事にゼロかい！

何もねえのかよ！ こっちの顔も綺麗に引きつるわ！

薬屋以外の財産は、ほとんどゼロ。借金がないだけマシなんだけどさ、何を食べて生活していたの？ そこらへんの雑草？

はっ、今の私と同じ状況か！

豆豆草豆豆水豆。

そりゃー病気になるわ。歳を考えて欲しいよ……。

はぁ……今日、十五回目のため息。

実家に帰ろうか悩んでいたときに、突然の訃報。

村のみんなは、あわただしく帰ってきたって思っているけど、本当は逃げてきた。

何もかもぜーんぶ放りだしてきた！

諦めたの！

だって、魔術の才能が何一つなかったんだから仕方がないじゃない！

はぁ……十六回目のため息。

なりたいものに向いてるものは、全くの別物って気づくのに十三年もかった。

十三年だよ、十三年！ 屋根裏に引きこもって、変な占いとか、当たらない天気予報とか、透視とか、何も使わずマツチの火を出すとか……冷静になって気づくまで十三年もかったなんて。私のほか、とんま、おたんこなす。どんな笑い話なのよ。

魔法薬は問題ない。それなりに自信はある。

それなりに！ であって天才じゃない。

ただ、それだけしか取り柄がなかった。おかげで、どれだけ恥をかいた事やら。

いやいやいや。考えようによつては、マトモな人間に戻って良かったのかも。だってねえ……普通の人から見たら、かなりイツチャ……それ以上は思わない思わない。私の十三年がもつと酷くなる。でもねー。同期にはバカにされまくったし、後輩にはすぐ追い越されたし……くそう。

情けなくて。惨めすぎて。約束を破って。逃げてきて。んで、今に至るわけです。

あの約束がねー。十歳の時だったかなあ。彼は二歳上だから、約束をした直後に王都に行ったの。

その二年後に追いかけてやった。子供ながらすごい恋パワーを持っていたもんだ。今は絶対ムリムリムリムリムリ。

あとで、お祖母ちゃんが話をしてくれたんだけど……私ってば、すぐく泣きまくって、王都に行かしてたまるもんかー！ って服を掴んで破った——らしいの。

うわー、全然覚えてない。どれだけ好き好きオーラを放ってたのよ。

子供のやることでも恥ずかしいわ……。

んで、彼はめでたく騎士団長になり。

私は、こうしてふて腐れていると言うわけです。

一年ほど知り合いのところまで働いていたから、そこそこの蓄えがあったんだけどね……魔法薬剤師ってさ、お金がかかるわけですよ。客はいないのに材料費がバンバン出ちゃう。おかげで赤字道まっしぐら。

ギリギリ借金はまだしてないけどねー、もうそろそろかなー。

おまけに男の影も形もないから、周りの言葉に耳が痛くて引きつった笑顔になっちゃうぞー。

行き遅れの相手は近所のスケベジジイだけですか？ 他にもいるだろー！ 乙女扱いしてくれようー！

ほんとにもう、ほんとにもう、ほんとにもう！
何がいけなかったのよー！

——宮廷魔術師になるのが、わたしの夢。

——うん、絶対になる。やくそくする。

これとこれ。

最近、ただ流れに身を任せている日々を過ごして……流れ早すぎ。肌がやつばーい。新しい保湿剤を作らねば。

後悔したって時間は戻らないのに、二十六の今でも初恋の実はしぶとくて図太くて、余計な根性でしがみつく。みつともなーい。

会いたいよーな、会いたくないよーな。

王都に行ってから一度も会っていない。

あれから十六年。忘れるのに、ちょうどいい長さ。私も忙しかっ

たしね。手紙一つもないもん。

幸せのため息が口からもれていく……。

幸せって何かしら？

今すぐ、ドア鈴が鳴ったら幸せになっちゃう！

ちりんちりん。

うつそっ！ 幸せが――。

「エレンちゃん、郵便でーす」

なんだ、てめえか……はぁ……がっかりだ。

この際、幸せが配達されて欲しい。

ねえ、それって幸せの手紙？ ただで肉をあげるとか、そんな幸せが書かれてる？

「サインしてから死んでねー」

「サインするから、なんか買って。リリアーナ嬢をさくつとイチコ口にさせるのがあるわよ」

「んー。まあ、そういうのも良いけど、僕はじわじわ追いつめる方が好きだから、いらなーい」

そーですか、変態郵便めっ。

さっさと帰れ帰れ。

ぱぱっと、サインして変態を追い払った。

さてと、差出人の名前はない。

怪しいね、十分怪しい。

くんくんくん……残念ながら、幸せの香りはしない。そりゃそーか。

うーん、腕を組んで手紙とにらめっこ。

なんだろう……。

ごく一般的な普通の手紙なのに、嫌いな食べ物むりやり食べさせられるような、そんな気持ちだわ。

なんか嫌。
とにかく嫌。

燃やしたり、無視したりすると、二度と幸せが来ないような気もする。

嫌だなー。めんどくさいことだったら、どうしよう。

とりあえず、内容だけは見てみるか。不幸の手紙だったら、変態郵便に押しつけちゃお。リリアーナも変態に困っているみたいだし、もしかしたら薬が必要になるかもしれないし、一石二鳥じゃない。

「えーっと、結婚する……」

誰が？

差出人は……。

「くくくくく……クライン・フォード・カッセル!？」

なんだってええええええええええ！

ぼとん——萎びた初恋の実が地面に落ちた。

しかも、鴉につつかれてる。いたつ、痛いっ。つかないでっ。

ケコーン……衝撃すぎて、うまく発音が出来ねえぞ。

だだだだだ、だつてヤツが十歳の時！

「クライン様は、本当にお父様にそっくりですねえ」

「父上の腹から産まれたのだ！ そっくりなのは当然だ！」

周囲がものすつごくドン引きしていたのを、ガキンちよだった私はしっかり覚えてるんだから。

なんてアホな子、十歳でそれはねーだろ。

そんなアホな子に恋した私もアホだが、こんなアホな子が騎士団長になって、しかも結婚っ！ だとおおおっ。

あいつ幾つだっけ？ ……二十八っ！ うおお、私の中のヤツは十二歳で止まってるから、二十八なんて想像出来ーん！

ずっと会っていないのに私のこと覚えてたとか、忘れてなかったとか！

嬉しいのに全然、嬉しくない！ ナンダヨーバカヤローコノヤロ
ー！

これは呪いの手紙だ。悪霊退散っ！ 燃やして、お払いしなくては！

うつ、うつ……視界が濡れてよく見えない。

続きの文面には、『是非とも来て欲しい。久しぶりに会いたい』と書かれて……。

来て欲しい……会いたい、会いたい、会いたい。

ぶわわ、顔が滝になるー。

「会えるわけないでしょー！」

叫んだものの、結局は来てしまいました——王都に。
私のアホ……。

金色の女神 2

抜き足、差し足、忍び足。

悪事はしていないのに、フードをかぶって日陰者として歩く。

賑やかな王都は、私にとって夢が消えた場所。

しっぽ巻いて逃げたのを知っている人がいるから、絶対に会いたくない。何を言われるか、わかったもんじゃない。

いやだなー。どうか、知り合いに会いませんように。

はあ……二度と王都には来ないって決めていたのに来ちゃったよ。来てしまいましたよ。ええ、アホですよ。

『是非とも来て欲しい。久しぶりに会いたい』

十二歳のクラインが笑って言うんだもん。しょうがないじゃん！
脳内のクラインはいつ見ても……か、可愛いけど、ものすごく目つき悪いな……。

会いたい、来て欲しいって待っているんだから、行くっきゃない！

……二十八歳のクラインに会いに……おツレさんと一緒に彼に……
ぶわわっ、油断すると顔面滝になる。

会ったら、まず最初に。

「おめでとう……よね、やっぱり」

笑って、祝福して。

足に鉄球がついている。だって……おおおお、重い！ 地面にめり込んでない！？ 動かないぞ、こんなにやるー！

ここまで来て今更なんだけど、クラインに会っていいのか、ずっと迷ってる。

彼が会いたいと望んだから——違う。

ここに立っているのは私の意志、彼は関係ない。

約束を守った彼に会う資格を、私は持っていない。

会ったって、情けなくて惨めになるだけだから、会わない方がいい。

それに、騎士になったクラインと会うのは初めてだもの……怖い。怖くて怖くて、足が動かない。

何を言われるんだろう。何を思っんだろう。

約束を破ったことを怒るかな。もしかしたら、約束を忘れているのかもしれない。

とにかくクラインの言葉が怖い。

後ろには下がれる。けど、前に進めない。動かない足をじっと見て。

「帰ろ」

どんな顔して会えばいいのか、わからないよ。

お店もあるし、私がいないと困るヤツがいるだろうし……困るヤツいんのか？

思考が暗闇の奥底へ沈んでいく。

「触るなっと言っている！」

「ぎゃっ！」

男の悲鳴が聞こえた。

なにになに？ なにごと？

広場に大勢の人が集まっている。「いいぞー」とか「やっちまえっ」ってヤジが飛んで、誰かが喧嘩しているんだ。

ねえ、ちよつと。少し隙間ぐらいあけてよ。見ーえーなーいー。どいてえ……無理矢理、間に押し入って、ようやく見えた。

広場の真ん中、大勢の人に囲まれても気にもせず、堂々と立っている女の人がいた。

ものすごい美人。レベルの高さにびっくりする。王都って美女揃いで有名だけど、あの人は美女なんてもんじゃない。スケベジジイの夢が、目の前に降臨している。

『僕の未来の女房はお、胸がばーんのぱふぱふ。腰が波うつてくねつくねっ。尻がふわふわぷりんぷりん。色白金髪ロングの女神様じゃ！ お主は可哀想なくらい逆っへぶしっ！』

みなぎる力でぶん殴ってやった。思い出したら腹立ってきた！

しかし、まさかスケベジジイの夢を見事に具現化した女神様がいるなんて、さっすが王都。ジジイが見たら喜び過ぎて、鼻から出血多量で死んじゃうよ。あんなジジイは死んだ方がいい。くそ……なにが逆だ。逆で悪いか、ばかやろー！

ところで、あの女神様の足下に倒れている男の人、ぴくりとも動かないんだけど……もも、もしかして死んで、る？

さっきの悲鳴って女神様がやっちゃったの！？

まっさか……でも、あの二人しかないし、みんな遠巻きに見ちゃってるし。

とにかく女神様が目立ちすぎだよ。美しすぎてキラキラ光ってる

もん。まぶしー！

半分はいらなから、少しだけ女神様の美をください。そしたら、クラインに会う勇気が出てくるかもしれないし！……って目あった！

あわわわっ、逃げよ。

王都に来てから妙に逃げる癖がついちゃったな。

急いで人通りの少ない路地裏を通る。

懐かしいなあ。この辺りの路地裏は配達地区だったから、よく覚えてる。こつちを曲がれば近道に――。

「どこに行く？」

「家に帰る――って、うわぁ！？」

先ほどの女神様！ いつのまに瞬間移動したの！？ 待ち伏せするみたいに隠れて、びっくりするじゃないですか！ もうっ。

女神様は容姿も完璧なら、背丈も完璧。でけえ……そこらへんの男よりも高い。

腕を組む姿も眩しすぎて、目が開けられません。

「待っていたのに帰るのか？」

「はい？」

最近、耳のお掃除してなくて。

待っていたって何が？

初対面ですよ、私たち。

「行くぞ」

「えっ、ちよっとっ！」

腕を掴まれ、すごい力で女神様は引つ張っていく。
ていうかていうかていうか、意味わかんねー！

「待ってください！ どこに行くんですかっ！ 家に帰るんだから
離して！」

女神様は急に立ち止まって振り向いた。

あ、すてき……じゃなくてっ！

「手紙を読んだな？」

「て、手紙？」

クラインの手紙のこと？

「だから来たんだろう」

結婚する——その言葉が頭に浮かぶ。
息が苦しい。

「クラインのこと……知っているんですか？」

「それは、知っているが……」

不安が確信になった。

分かった、結婚相手はこの人なんだ。

目をそらして、顔を赤くして。

綺麗な顔が突然、花が咲いたように可愛らしい顔になってるもの。

「ここに来たのは薬の材料を買いに来ただけです。クラインに会い
に来たんじゃありませんし、会いたくありません」

乱暴に女神様の手をふりほどいた。

女神様は傷ついた顔をして……どうして、そんな顔をするの？
嫌だ、早く帰りたい。

帰って、忘れて、いつものように暇なお店でお茶を飲みたい。

「何故？」

小さく呟いた声が聞こえた。

私は何も言わない。言いたくない！

煙のように消えちやいたいよ。

女神様にそんな顔をさせたいなんて、一つも思っていないのに……
じわじわと滝が押し上がってくる。

形のいい唇が動く。

後ろからの大声が綺麗な声を潰した。

「見つけたぜ、女ア！」

振り向いたら男が三人、木棒を持ってこっちを見ていた。……ん
ー、嫌な感じにヤバイ。

真ん中の男って、さっき倒れていた人だよね？ ボロぞうきんの
服が同じだもん。うわー、顔が腫れて痛々しい。

つか、私、関係なくねー！？

ニヤニヤ笑って気持ち悪い！

「さっきはやってくれたな、姉さん。代わりに俺ら全員、可愛がつ
てもらおうか、ん？ そうそう、できたら大人しくしてもらえねえ
か？ そしたら優しく姉さんを楽しませてやるからよお」

下品でいやらしい声。

手のひらで木棒を叩いて、大人しくしろ？　大人しくさせるんでしょうが、この卑怯者めっ！

「ちよつとっ！　女相手に男三人っ、武器を持って恥ずかしくないわけ！　あんたたちなんか、誰も相手になんかしないわよ！　今すぐ警備兵呼ぶわよ！」

「だまれ、並下！　てめーは、おまけ程度に可愛がつてやるよ！」

なななな、並いいい！？　しかも下あああ！？　可もなく不可もなくつてのが、いちばん無難でいいんだぞ！

この野郎どもめ。魔法薬剤師の怖さを教えてやる。痴漢撃退特殊調査トウガラシダマの威力にひれ伏すがいい——って、軽く肩を叩かれた。

見上げると……ひいいいいい！　女神様のお美しい眉間に、くつきり三本のたて線が出るーっ！

ぎゃー、もったいなーい！　って、急に女神様は微笑んだ。憑きものが落ちたみたいにな、にっこりと笑って。

「潰れてろ」

風のように走り、スカートから長い美脚が顔を出した。男の顔に蹴りが炸裂。心地よい音が響いちゃった。

二回もやっちゃいましたよ、女神様。

残りの二人も瞬殺で片づけました。お美しいだけじゃなく、化けものなんですね、女神様。無敵素敵女神様。

クラインがもし、もしはないと思うけど、浮気をしたら一瞬で死ぬ。顔面が潰れちゃうっ！

あわわわっ、怖い。

女神様はにこりと笑いもせず、ずんずんと私に近づいて、

「行くぞ」

問答無用で引っ張られた。

いやーっ、誘拐ー！ 誰かー！

行かねーって言うてんだろー、女神様アアアアア！

金色の女神 3

ずるずる、ずるずる。

女神様に引ーきーずーらーれーるー。

「まっ、待つてください！ 止まって！」

止まれえ、ゴルアっ！ などと恐れ多くて口に出せねえよ！ うわーん！

か細い腕にどんな筋肉があるの？ 赤筋肉？ 白筋肉？ 女神筋肉？ 蹴り一発で男は逝つちゃうし……生きていると思うけど。

あーっ！ あの人たちに薬売れば良かったっ。トホホ、せつかく儲けがでたのに、もったいない。

ズンズンと女神様は歩く。長い足の歩幅は大きく速いから、さつきから横腹が痛い。

運動と無縁の自堕落生活で培った体は悲鳴をあげている。こんな事なら近所のおばちゃんサークル『歩き歩き美容健康部』に参加しとけばよかった。くそー、暇そうだからって理由で誘われていたのに！

好きで暇じゃねえんだぞ！ 仕事くれよー！ 今は休みたいよー！

「お願いですから、少しだけ休ませてくださいー！」

私を見ることなく女神様は無言で止まって……くれないみたいね、くすん。

女神様アアア、S属性もほどほどにお願いしますうう。顔面

が滝になっちゃうよー。

なんで、こんなことになったの？ 誰か教えて。

「お、おいつ」

「ねえ、あれ……」

前から聞こえる声は、女神様の行く手を邪魔しないように道をあけている。

王様並のオーラだ。道をあげたくなる気持ちも分かりますけどね、誰か助けてくんね。

頬を染めて、男も女も、じいちゃんもばあちゃんも、子供も動物も、女神様に一点集中。さっきの男たちは、ある意味勇者だったか……。

綺麗だけどね。正直、女神様と関わりたくない。クラインの奥さんになる人なら、よけい関わりたくないっつーの！

なのに奥さん自ら私に関わるって、どーゆーこと？ ク、クラインめえええ、ヤツは女神様に何を言ったあああ！

私の初恋のことを知っているとしても？ クラインは知っていたの？ うそ……。

それじゃ、あの約束も女神様は知って――。

あれ？

周囲の様子が、かなり変わっている。通りは広いのに、店らしき店が全然見あたらない。似たようなレンガ造りの建物が並んで、昼間なのに人がぼつんぼつん。見かけるのは清掃員ぐらい。

全体的な雰囲気は薄暗く、なんだろう……寝静まっているような……。

「ここだ」

緑の蔦に覆われた、かなり年代物の小さな屋敷に案内された。お化けでも出そうな外観とは裏腹に、屋敷の中は白の内装と緑の観葉植物で清楚感溢れていて、女神様のご自宅かな？ てっきりクラインの所に連れて行かれると思ったのに。

「どこに行っていたっ!？」

二階から聞こえた男の声。手すりから身を乗り出して、こつちを見ている。

綺麗な金色の髪——忘れもしない太陽の色。

視界が揺れて、零れないように必死で頭を振った。

なんで、ここにいるの？

足が震えて、力を抜くと絶対に倒れる。

彼を見る勇気がないから、じつと白い床を見つめた。

急いで駆け下りてくる音が聞こえる。

「勝手に外に出るなっ。暴漢に出会ったらどうするんだ！ 俺の身にもなってみろ！」

綺麗な人だもんね、心配するよね。

暴漢に襲われるどころか、逆に襲いかかったんだけど……心配する必要なくね？

ま、まあ、クラインには関係なく心配なんだから、しょうがないよ、うん。

安堵のため息が聞こえるし、私の存在なんか完全にスルーだし。

帰りたい。

この場所から、王都から離れたいのに、女神様が手を離してくれない。

「いくらお前でもそんな姿で外に出るなんて、どうかしている。遊んでないで静かに部屋に籠もってろ」

……なんだろね。沈んでいた気持ちが荒ぶってきた。

部屋に籠もってるだなんて、クライン………どんだけ独占欲の塊なの、おのれは！ 女は黙って家にいるとでも言うのか！ 女をなめるなよー！

そりゃーこんなにも美人だし、好きな人だし、奥さんになる人だから心配なんだろうけど。それじゃあ、女神様が可哀想よ！ 彼女はお人形さんじゃないっ。

自由に外で遊んでもいいじゃないかーっ！ 横暴ー！ 嫉妬男ー！ そんな心狭い男になったのかよー！ 見損なったぞーっ！ 文句の一つや二つ、十個、二十個言おうとして、

「俺にすべて任せろ、な」

キラキラと白い歯を浮かばせた爽やかな微笑みに、勢いがぶしゅんと潰れた。

うわーん、卑怯じゃー！。

くそう……十六年ぶりに見たクラインの笑顔は素敵に格好いい。可愛いアホな子だったのに立派な大人になっちまって。

逞しい体、切れ長の目。精悍な顔つきのくせに、笑顔はなんて爽やかなんでしょう。モテるっ、絶対にモテるな、このやろっ。

アホな発言連発していた割に、あんまり笑わなかったけど、たまーに見せる笑顔が一番好き。

だつてさ、だつてさ、嬉しそうな笑顔に胸がキュンってしちゃうんだもん。

あの頃の面影といたら金色の髪だけ。雰囲気が別人になって、どことなく軽そう。すっかり王都の人になっちゃったんだなあ。

私も、ずいぶん変わったから……とはいってもね、私も王都には長いこと住んでいたんだよね。それなのに田舎の地味っばさは最後の最後まで抜けることはなく……だから気にもならないってか、少しぐらい目に入れたっていいじゃん、バカっ。しょんぼりだよ。

「おい、聞いているのか、く——っあ！」

突然、クラインが床に蹲った。左膝を抱えて悶絶してる。

未来の旦那様に膝蹴りはひでえと思います、女神様。

声にならない悲鳴をあげて、ごろごろと床を転がる姿はダンゴムシにそっくり。いつそ気を失った方が楽だったのに……騎士団長のクラインを蹴り一つでダンゴムシにする女神様って何者なの？

あんなに痛がって、クライン大丈夫かな……歩けるといいけど。

「少し静かにしてくれないかしら」

これまた女神様に負けず劣らずの、美しい貴婦人が二階から下りてきた。

落ち着いた深緑のドレスは胸元ギリギリいっぱいあけて、私でも視線がいつちゃうぞ！ くうつ、本物がどうか触りたい！

貴婦人は優雅な足取りで近づいてくる。見た目から三十前後……だけど実年齢はズレているとみた！ 真実はいくつなんだろう？ 知りたいけど、怖いな。

黒い髪が肌の白さをはっきりと強調させて眩しい。唇は美味しそうなチェリー色。

とにかく色気がハンパない。私を見るなり完璧過ぎる弧を描いた。私、完全に場違いだね？ シミっていうか、汚れていうか。私の気持ちに気づいて、光の女神様と夜の女神様。

「二階の左奥にお行きなさい、部屋が空いているから。余りうるさくしちゃ駄目よ。声や物音で起きるわ。みんな疲れているんだから、休ませないと夜が大変なの」
「分かった」

ちつとも分かりません。
頷く女神様に引きずられて二階へ行く。

「待つて、彼が」

ダンゴムシに慈悲の手を――叶わぬ願いだった。
ごめん、クライン。ごめんね。

私の力じゃ、女神様の手をふりほどけないの。後で来るから。薬、二割引にしてあげるから。
久しぶりに会って胸もときめいたのに、気分が少しさっぱりして
る。不思議ねー。

「あの、ここは一体……？」

奥のドアを目指す女神様に聞いた。

「娼館」

いやあああああああ、自宅じゃねーのかよつ。

金色の女神 4

ばたん——ドアが閉じられた。

……閉じられちゃったよっ、逃げ場ないよ！ 窓はあるけど黒い鉄格子が見える。

ふわん、口から魂が出た。まだ死にたくないっ。

えーっと、えーと、武器武器武器っ。羽ペン発見！ って、羽ペンでどうすんの？ くすぐり攻撃？ 無理でしょっ、相手は一蹴り必殺の女神様だよ！

とりあえず、ソファアの後ろに緊急避難だ。

「ふう」

女神様がため息つくとき艶めかしいというか、背徳な感じだ……エロ、い。

天蓋付ベッドに腰を下ろして、足を組む。

私に、がつり敗北感を与える女神様なんですが、あの……なぜに、そんな色っぽい眼差しで見てくるんでしょうか？
顔をほんのり赤らめて。

……………。

え”っ！？ もしかして、女神様……そっちもOK？

ひいひいひいひい！ 鳥肌がっ！ 腕がチキンになる！ どうしよう、どうしよう！

この歳で夢見るにもいい加減にしろよ、って言われるかもしれないけどっ！ 初めはクラインがいつて必死で守ってきたのに、

やっぱーい。

クラインどころか男でもなく、女！ や、でも、女神様だし……
って違うだろ、私！

「エレン」

「うはいっ！」

混乱と緊張でうわずった。

よくよく見れば女神様も緊張していたようで、深呼吸を繰り返している。

これは、ますますヤバいんじゃない……。

「いや、その……来ないのかと、心配していた」

弱々しく安堵した表情は、男たちをげしげし蹴り倒した女神様とは別人だ。

何だろう？ 怖がってる？ 私に？ どうして？

「来てくれて、正直ほっとした」

急にそんな嬉しそうに輝かなくても、ああ、心臓に悪い。

間に合うってクラインのことかな、やっぱり。知っていたのかなあ、クライン……私の気持ち。

誰だって後腐れなく結婚したいよね。なんだかんだで邪魔になると思うし。後々問題が出てくるだろうし……邪魔にも問題にもならねーけどな！ だって、私だもん！

直接、言いたかったんだ。

「安心してください。もう王都に来るつもりはありませんから」

来なければよかった。

会いたいななんて言葉に惑わされて、思った通りの展開じゃない。
私のおんぼんたん。

忘れる、忘れる、忘れるのよ！ クライン・フォード・カッセル
なんて男は最初からいなかった！

この気持ちは私の脳内妄想が引き起こした幻なんだから！

逃げるようにドアに向かうと、乱暴に腕を掴まれた。

「何を勘違いしているのか、分からないんだが」

「勘違いしてませんから！ 離してくださいっ」

腕を乱暴に振り回しているのに、女神様は離してくれない。

このままでは顔が滝になってしまう。

嫌だ、こんな気持ち知らない。

どろどろして、気持ち悪い感情の渦が心を飲み込んでいく。

頭が痛い。

酷い。

酷い。

酷い。

この人も、クラインも。

泣きたくなかない。

なのに、細い指先が優しく拭ってくれる。

「すまない」

悲しそうな顔も綺麗で、透き通る瞳の青は海のように静かに揺らめいていた。

「あの、私の名前……その、クラインから？」

名乗ってもないのに、私の名前を呼んだ。

女神様は目をそらして躊躇っている。

ゆつくりと私を見て、そして――。

「おいっ、クライン！ お前、どういうつもりだ！ 痛いってレベ
ルじゃないぞ、ばか、や……ろ……」

勢いよく現れたのはダンゴムシ……じゃなくて、クライン――な
んだけど、あれ？ 今、クラインって言わなかった？

呆然としている私たちに、彼は指をさす。指が震えてるぞ。

「そんな姿でも構わないっていうのか。クライン……お前、変態だ
な」

スパーンっ、彼の右膝に蹴りが入った。たたみかけるように腰に
一発、とどめに顔一発。

どんだけ足癖悪いのよ。死んじゃったらどーすんのよ。

……死んだんじゃないの？ 動かないんだけど。

「静かにしてって言ったでしょう、クラインさん」

夜の女神様の登場。たぶん、この女主人だと思う。美の裏側に
怪しげなオーラをひしひしと感ずる。

つか、さっきから聞き捨てならない単語が連発されてる。

クラインってさあ、種族人間の性別は男だよ。オスだよ。記号表
記は♂だよ。

妖精か女神様なのか分からない種族じゃないし、性別も女性じゃ

ない。

「クラインさん。ちゃんと話してあげないと彼女、頭が風船みたいに破裂してしまいますよ」

夜の女神様の言う通りです。今、ぱんぱんに限界状態です。
女神様は頭をかき、私に近づく。

「信じられないかもしれないが、俺がクラインなんだ」

「……はあ!？」

信じるも、信じないも、惚れた男が女神様ってどーゆーこと？
ねえ、どこまでが神様の悪戯で済むレベルなわけ!？

「ホントにホントに、ほんとうくに！ クラインなの?」

「ああ、本当だ」

「信じられないかもしれないけど、彼女……いえ、彼は王都騎士団・第四師団長のクライン・フォード・カッセル様よ」

夜の女神様が、そことなくフォローする。
それが本当なら。

「許せーん!」

「どうした急に!？」

「あらあら」

怒り大爆発だ。

「クラインっ。あんた結婚するんじゃないの、その死体と！ 私

の心と涙を返せ、バカア！」

「こいつと結婚！？ そんな変態な真似が出来るかつ！」

「どっから見ても立派な変態じゃないつ。そのけしからん胸は一体なんなの！？ 腰なんてエロさ爆発じゃない！」

「エレンの方が変態だぞ！ それに胸なんてものは、まがい物と思わないと、俺の方が狂ってしまっ！」

コイツ、私にケンカでも売ってるの！？ なら買ってやろうじゃないの！

「まがい物がそんな立派に、けしからん大きさと形なんてあり得ないでしょ！ 私より立派なものを持って、酷い！ 許せない！」
「立派だろうが、俺には関係のないことだ！ あつ、いや、俺は別に形や大きさは気にしない……別に小さくても……」

ああん？ 最後、なんつつった？

「とにかく俺は男だ！ その証拠に男としての誇りも、最後の砦も、ちゃんと存在している！」

「ほー、どこに男の誇りや砦があるんでしょーかね？」

とたん、クラインは押し黙った。恥ずかしそうに、もじもじと顔を赤らめている。

「お——」

「分かったから、何も言うな」

聞きたくない。女神様の口から禁断の言葉が出てくるのは耐えられない。中身がクラインだとしても、だ。

つか砦とか言うな、あんぼんたん。恥ずいわ。

それにしても、

「本当にクラインなんだね」

しみじみと呟くと、クラインは頷いた。
今ので分かった。見た目が女神様でも、

『父上の腹から産まれたのだ！ そっくりなのは当然だ！』

このアホの子っぷりが変わっていない。嬉しいような、いい加減にせえよってツッコミたいような。

「頼む、助けてくれ」

いい加減にせえよってツッコミは、私にも必要ですね。
すぎるような目つきで言われ、胸がトキめいている。女になって
も（本人は否定してるけど）、相手がクラインだから興奮する。
くそう、そんな心配そうな顔で見ないでよ。

「とりあえず、話だけは聞こうじゃないの」

偉そうにふんぞり返っているけどね、心の中はピンクの花嵐で落ち着かせるのが大変。

それなのにアホの子は嬉しそうに笑うから……ぱんっと、また初恋の花が咲いてしまった。

どうしてくれんだよ、このやろつばかやろつ。

金色の女神 5

あの後、眉なしお姉さんのクレームが入ったため、場所を夜の女神様の私室に移動した。完全防音設備ばっちりなんだって。

……余計怖いよ。防音って、なんだろうね。なにげに見てしまった赤い蠟燭と黒い鞭、紫の蝶仮面がすごく気になる。

部屋には私と、女神様〃クラインと、床に死んだままの金髪の人夜の女神様は用事があるとかでいないし、さっきの威勢が落ち着いたから気まずいのなんの。

椅子に腰掛けた私に、クラインは慣れた手つきでお茶を出してくれる。

私と同じことをしても様にならないなあど軽い嫉妬を通り越して、その優雅な手つきに見惚れてしまい……クラインに睨まれた。

「あの手紙、ハインズ様が勝手に出したのね」
「そうだ」

遠い目になっちゃうよ……とほほ。

よくよく考えれば、結婚しますって律儀に知らせるようなタイプには思えない。

なんていうか、

「いつ結婚したの？」
「一昨年」

とか、さらっと言っちゃうタイプだ。相手から聞かれないかぎり、

ずーっと黙ってる。

それにしても、ハインズ様。私の気持ちを知って、やってくれやがりましたね。あのニヤついた糸目で書いたのかと思うと、カップにヒビが入っちゃうぞ、おっさんよ。

そっかー。手紙を見た時に感じたイヤなものって、ハインズ様の気配か……嫌いじゃないんだけど、昔からあの人はニヤニヤニヤニヤニヤ笑うから苦手なのよ。何考えているのか分からないし、不気味だし。

「手紙にはなんと書かれていた？ 父からは出したと連絡はあったが、どこまで伝えたのか分からない」

「結婚する、是非とも来て欲しい、久しぶりに会いたい」

女神様の口からお茶が吹き出た！

「誰が!？」

「クラインが、でしょ？」

「違う！ それ以外に書かれたことはないのか!？」

ありません、と首を振った。

ちよつとちよつと、また眉間に三本のたて皺が出てきたよ。せつかく綺麗な顔なのに、皺が残ったらどうするの。

「肝心なこと何一つ知らせてないのか……あの狸め」

どちらかという狐な感じ——じゃなくて、クラインってばハインズ様のこと、そんな風に思ってたの？ お父さん大好きっ子だったから意外。

クラインは息を整えて、まっすぐ私を見る。

嫌・な・予・感。

「頼みがある、解呪薬を作ってくれ」

ハイ？

カイジユヤクって仰いました？

そんなもの作ったら、一発で魔法薬剤師の免許剥奪かつ牢屋生活ですよ。わかってんの、アホ子。

「頼む」

頭を下げられても困る。

惚れた貴方のためだもんねっ、私張り切って作っちゃうわ　　な
んて暴走する年齢は、とつくの昔に過ぎた。

解呪薬に関わったら、今後の人生どーなると思ってたんのよ。

村長さんに怒られて、ロープでぐるぐる巻きにされるのよ！　あ
の人は本気なんだから！

「薄々はそうなのかなって気もしたけど、その姿……呪薬なんだ」
「ああ……」

クラインは顔を歪ませた。

呪薬——そのまんま呪いの薬のこと。捻りねーな、とか言うてはいけない。

毒薬よりもやっかいなシロモノで調合がバカみたいに複雑怪奇。
魔法薬を扱う者にとって自身の調合センスが、そのまま薬に出る。
あんなものを作るのはバカだけ。

バカと天才は紙一重って言うけどね、バカにしか作れない。だつて、作ったら即牢屋行きだもの。

呪薬の効果は様々あって、その一例が目の前にいる。

五体満足に生きているだけでも良かったのよ、うん……見た目は大きく変わったけどね。

でも、先代の国王様が理由あるなしに関係なく呪薬・解呪薬の使用製造禁止にしちゃったから、呪薬の存在が大分薄れていたんだけどなあ……うわー、呪薬なあ。

「帰らせて頂きます」

問答無用でドアに向かう。

いやいやいや、初恋の人でも無理無理無ー理だから、手え離してくれないかなあ！

「頼む、俺にはエレンだけなんだ！」

トキメク言葉なのに、一ミリも心がトキメかない！
危なすぎるわー！

「解呪薬なんてもの作ったら私の首が離れるわよ！　なんで私なのよ！　宮廷魔術師にお願いすればいいじゃない！　騎士団長なんだから、何人か知っているでしょ！　腕もいいし、あの人たちなら国王様のお許しが出るかもしれないし！　魔法薬剤師の免許剥奪されたら、この先どうやってご飯食べていくわけ！？　ていうか、牢屋行きになっちゃうわよ！　死にたくない！　絶対に無理ー！」

「宮廷魔術師でも駄目だから、君にお願いしているんだよ」

ようやく復活した死人（名前知らない）は、震えながら椅子に座る。

ゼーハーゼーハーと息も絶え絶えになって起きるぐらいなら、まだ倒れていた方がいいのに。

「あいつらは使いものにならん」

言っちゃったー！ コイツ、言いよったー！ 私の夢が使い物にならないって、言い切りやがった。

あの血と汗と寝不足の十三年間は何だったのか。花盛りの乙女人生をドブに捨てたとも言うのか、ああん？

「最初はこんな美女じゃなかったんだ」

美女って言葉に、クラインの機嫌メーターが急速に負の方向へいった。だから眉間の三本皺はヤメレ。

「ほんのりと丸みを帯びた程度で、ごまかせば誰も気づかなかったんだ。呪いの効果は遅く、完全な女になるまで時間はたくさんあった。その間に解呪薬を手に入ればいいと考えていたんだ……俺個人は」

話している内に復活した死人の顔がだんだんと引きつって、クラインの機嫌メーターが……なんか振り切ったみたい。こめかみに血管が浮かんてる。

「こいつが……アーバックが解呪薬を作れる宮廷魔術師を捜し、作ってもらった……しかし」

「飲んだら、こうなった」

へー……アホの子が増殖したよ。

呆れて何もいえんわ。

「戻るどころか、呪いを早めてこれだ。早く解呪薬を手に入れない

と、永遠にこの姿のままだ」

そいつは困った。

でもね……問題が色々とありすぎて、まずはそのすぐるような目つきで私を見るのを止めてくれ。復活死人お前もな！　つか、お前は死罪なつてもおかしくないよ。超ヤバイ賭けにもならない賭けをしたんだよ。

「一応、まともと言われてるヤツにお願いしたんだけどね」

笑ってごまかすな。まともな宮廷魔術師は呪薬に手をださんぞ。そもそも宮廷魔術師に、まともなヤツなんていないよ。急にクラインが真剣な顔で、私を見つめてくる。

「エレンなら俺を治せる」

どきーん

「ルディアナさんの孫だから」

えー、そっち……。お祖母ちゃんの技術と知識は神懸かりだけど生まれ持った天性の問題であって、私がそんなもの持っていると思ってるの、このばったもん女神様。そもそも、

「呪薬がないと解呪薬作れないよ」

「なに！？」

「そっなのか！？」

目を丸くして、初めて知りましたって顔の二人。

「材料や成分が分からないのに作れるわけないよ。下手すると死んじゃうのよ」

聞いて、クラインの顔が真っ青になった。壊れた人形みたいに復活死人、もといアーバックさんに振り向く。

殺気を察知したのか、アーバックさんは席を立ち、じりじりと後ずさ……るまえにダンゴムシに戻った。

クライン、その足癖の悪さ直した方がよいよ。

記録のない魔術師 1

帰る帰るとわめき暴れても、静かに分かったと頷くだけで力を緩めない。目が逃がさねえぞと光っていたので、すごすご諦めてテールに着くことにした。

「どうして呪薬なんて飲んじやったの？」

「飲んだ記憶はない。盛られたんだ。犯人の目星はついていないが――
――」

クラインの眉間にざっくり、たて皺三本が入った。いやいやいや、私を睨んでも困るんだけど。

「二週間ほど前、妙な宮廷魔術師らしき奴に会った」

「らしき奴？」

「可能な限り調べてみたが、奴を知っている者が一人もない。ただ、警備兵はともかく宮廷魔術師は変人だからな。連中の言葉は信用出来ん」

へー、クラインってば、そんなこと思っていたんだ。

私も変人だから、これから自分優先で考えてやるからな！

「信用するつもりはないが、奴の記録が登録名簿にはなかった。奴は宮廷魔術師であって、宮廷魔術師ではないことになる」

「意味が分からない。それってどっちなの？」

「奴に会った場所が緑の宮だ。エレンも話ぐらいは聞いているだろ

う？」

そついうことなら、クラインが混乱しちゃうのも仕方がないね。
緑の宮——宮廷魔術師専用研究所。すごい警備が厳重で、入れるのは宮廷魔術師と限られた僅かの関係者のみ。許可なく入ったら、問答無用で牢屋行きだったはず。

「宮廷魔術師に関しては陛下自ら特別保護を宣言している。嫌な連中だが、彼らの研究が国の礎になっているのも事実だ。他国との外交取引や牽制にもなり、軍事開発もおこなっているからな。余程じゃない限りは目をつむっている」

魔法薬の研究だけじゃなく、そんなことしてんだ緑の宮。宮廷魔術師つて、そつちがメインなんじゃ……当たらない占いとく、千里眼とか、風を呼べー嵐よ起これーと叫んでいた十三年は一体何だったのさ。

詐欺にあつてたの、私？

「だからといって我々も馬鹿ではない。連中のわがままに好き放題させることも、付き合うこともない。奴らの素性は乳飲み子の時、何を口にしていたのかさえ徹底的に調べあげる」

弱みでも握っているんだろうね。

緑の宮かあ、一度でもいいから行ってみたい。魔法薬剤師は入れないから余計に憧れる。宮廷魔術師だけしか手に入ることができない材料だってあるし、色々と優遇されているから無理無茶無謀な犯罪一歩手前もギリギリ許される。場合によってはアウトかもしれないけど、やっぱりいいなあ、宮廷魔術師。

「隣国の宮廷魔術師が、お忍びで来てるとか？」

「緑の宮の警備はレオナード卿の管轄になる。味方は敵と想っている方だ。うまく潜り込めたとしても、無事で生きられるか疑問だな」

噂には聞いてたけど毎日毎日火事やら、爆発やら、妙な笑い声やら、絶叫やらで、そこに配属された警備兵は辞めるか、殺意を持つかの選択を迫られるのかなんとか。

王都一鉄物……じゃない堅物の鉄將軍様じゃないと無理かもね。犯罪集団の溜まり場だもん。味方も危ないんじゃないかね？

「宮廷魔術師って個性的な人が多いんでしょ？ 変装してたんじゃないの？」

「個性的過ぎて関わりたくない種族だが、変装しても無駄だろうな」
今、種族って言った？ 人として認めてないのか、オマエ。

「個人の趣味趣向も記録されているし、あそこの日常は毎日が仮装大会だ。連中にとっては変装という意識はないのだろう。警備兵の目をごまかすのも難しいはずだ。彼らも十分理解している」

毎日がハロウィンなのか、緑の宮！ ちょー楽しそう！

「あれが、彼らの私服、だ、と……俺は聞いた、ぞ」

顔をぼこぼこに腫らしたアーバックさんが息を吹き返した。

最初は知らなかったからクラインと間違えたけど、少しクラインの雰囲気似てる。髪の色が金色だから、そう思うのも仕方がないよね。不覚にも心トキメいちゃったし、体格もしっかりして格好いい……はずなのに——おかしい、残念感でいっぱいだ。

ああ、本当に残念でならない。元の顔は格好いいのに。あだ名は残念さんでいいかしら。

「宮廷魔術師は総じて気味が悪いな」

女神様は長いため息をつかれました。私は、その気味の悪い仮装人を目指していたんですけどね。もういいよ。好きなだけ、愚痴っ
てくれ。

ふて腐れて、勝手にお茶をお代わりした。

「奴もそうだ。ピンクの髪をして、ピンクの服を着て、ピンクのミニスカートを着て、ピンクのタイツにピンクの靴に、ピンクの傘――

――」

「ちょっと待って」

止めないと延々とピンクピンク言い続ける。口紅やら、眉やらもピンクと口走ってるから。

私は目頭を押さえた。こみ上げてくるものを、ぎゅっと押さえる。冷静になれ、私。

さっき聞いたでしょ。宮廷魔術師なんだから、なんでもありなのよ。だって毎日がハロウィンだもん。

でもね、でもね、オールピンク祭りな宮廷魔術師がいたら、さすがにみんな気づくでしょ。知ってるでしょ。おかしいでしょ、そこ。もしかして、そんなピンク祭りでも地味部類に入っちゃう？ さ
らに上いっちゃうの、宮廷魔術師。

怖えー！ 宮廷魔術師、怖えー！

「俺が思ったこと、エレンさんも思っているな」

残念さんと同じなのは嫌だけど、誰が聞いても思っちゃうでしょ。

「宮廷魔術師ってさあ、隙あらば実験しちゃうような連中だよね、ん？ 甘いものに釣られたのかな、ん？」

言葉強く、子供に諭すように、ゆっくりと言った。

ちゃんと笑顔で言えたかなあ。頬が引きつってる感じがするけど。

「緑の宮に行くときは絶対に気を抜かん。あそこは戦場だ」

いつも完全武装で緑の宮に行くの？

「保護下にあるとはいえ、人体実験は陛下の許可がないと絶対に出来ん。破れば宮廷魔術師の免許を剥奪され、死ぬまで地下で過ごす奴らもいる」

うわー、うわー。やっぱりいるよね、突き抜けちゃったヤツの一人や二人や三人ぐらい。

「緑の宮について俺は管轄外だ。これ以上は知らない。レオナード卿ならより深いことをご存じなのだろうが、好んで魔の巣窟に近づくたくもない」

さつきから本音だもれなんだけど、コイツ！

「今回はたまたま必要に応じて行っただけだ」

「たまたま行つて油断して、ピンクの毒牙にやられちゃったんだね。元氣の出る栄養剤とか言われたの？」

「気味の悪い言い方をするな。それなら問答無用で警備兵につきだしている。肋骨五、六本折ってな」

最後のところは聞かなかったことにしよう。

「証拠も記録もないから、手の出しようがない。しかし、俺は奴が犯人だと思っっているっ。絶対にそうだ——何故なら、くっ……」

拳を作つて、すっごく怒りたいのを必死で我慢しているけどね、女神様を通り越してメドゥーサになってるよ。風がないのに、うねうね金の髪が動いて、すっごく怖い。

何があつたんだろう……気になるけど、絶対ろくな事じゃない。断言できる。

聞きたくないなあ。

「そいつ、クラインに『君が欲しい、僕のものになつて。一生可愛がつてやる』って言ったそうだ」

代わりに残念さんが答えた。笑いを堪えてい……ない、もれまくってます。でも、その気持ちすっごく分かる。

私も笑いたいの、目の前のメドゥーサ様が怖くて飲み込んだじやった。

だんつ。

クラインは強くテーブルを叩いた。ヒビ入っちゃったけど、それ夜の女神様の私物つてこと忘れてないか。

あの人を怒らしたら、満足に生きていけない体になっちゃうぞ。イメージだけどね！

「俺は騎士の誇りをかけて全身全霊で拒否した」

ねえ、さつきから一人喜劇、二人いるからお笑い劇団になるのか？困っているのか、笑わせたいのか、呆れさせたいのか、さっぱりわからん。

本人はものすごく真剣なんだけど、私の中では「めんどくせーな」とか思い始めてるのに気づいてる？　メドゥーサ様。

「奴は――」

『君は必ず僕のものになる。頭を下げて進んで、僕のものなるんだよ。楽しみだ、君がどんな風に頭を下げるのか。僕のものになったら、うんと可愛がってあげる』

どう思う？　と訪ねられても、変態だねってことしか言えないぞ。

「俺は正直、殺してもいいよなと思った。むしろ退治しておけば良かったと、激しく後悔している。一人の変態が消えても緑の宮は変わることはない」

いやいやいやいやいや、殺すとか退治するとか騎士団長が何言っちゃってんの！？

もし本当に、ほんっとーに「実は隠れ宮廷魔術師だったんです」とか言われたらどーすんの！？
そんなことしたらアンタの首が飛んじゃうってばっ。

宮廷魔術師にかぎらず、魔法薬を扱う人間の大半はものすごく根に持つ人が多いから気を付ける、と忠告した。

こいつは本音がただもれすぎて心配になる。だからじゃね、呪薬盛られたの。逆恨みとか多そう。

一応頷いてくれたけど、分かってくれたかなあ。

ああ、頭をぱかってあけて直接『駄目』って書きたい。誰か、医者呼んできてくれね？　外科手術が必要だと思っの。

気分を切り替えるために、お茶を一口。うまいなあ。
ちよつと気になったことが一つあったので聞いてみた。

「その人、男なの？」

僕のものとか連発した変態さん。僕ってさー、女性はあるーんまり使わないよね。

ピンク、マン？ ウーマン？ どっち？

「男だろうな。男にしては声は高いが、女という雰囲気は感じなかった。それに胸はエレンほどもなかった」
「ぶつとばすぞ」

てめえ、三途の川を見せたるか。

こちらら毎日、部分発育薬を手にとつては戻して、手にとつては戻してを続けてるんだぞ。

初恋相手だからって許せると思うなよ。心が洪水だ、このやろうばかりやろう。

「気にするほどでもない俺は思うけどな。あればあるだけ良いが、なければないで困るようなものじゃない。それに今後の事を考えれば垂れるよりはいいじゃないか、はははっ」

残念よ、てめえは私を怒らせた。

魔法薬剤師に喧嘩売ったらどうなるのか、これからとくと思いい知るがいい。

そしてクラインよ……頷くな！ お前、助けてつてお願いしてるくせに、私のハートをどれだけ削ったか、分かってるの！？ ハートの形してないよ！ そくら辺の砂利と変わらない形になってんのよ！

「その人を探して、解呪薬を貰いなさい」

私はやさぐれた。

「その人が犯人なら材料も成分も分かるからお願いして作ってもらえばいいじゃない。あとはクラインが男の体をとるか、男の誇りをとるかの覚悟を決めてもらえば――」

「断る」

一刀両断にされた。

「そっちの方が何の問題なく元の姿に戻れるんだよ。死んじやう心配とかないんだよ」

「潔く死んだ方が良い」

「ごめんなさい、私が悪かったです。だから、そんな肉食獣みたいな目で見るとやめて」

頼むとか言ってるくせに、目で脅し始めたよ。

是が非でも私に作らすつもりだ。

人生の破滅の音が聞こえてくる。

でもまあ、

「呪薬が手元になれば何も出来ませんね」

それがなければ、はじめの一步もない。

しょぼーんと、二人のアホの子は肩を落とした。

ざまあみろ。

記録のない魔術師 2

「まいったな。まさか呪薬が必要だなんて……やつは、そんなこと一言も言わなかったぞ」

残念さんは頭を抱えた。

しょうがないよ。最初から作る気がなかったんだから、その宮廷魔術師。

いい暇つぶし程度に、からかわれちゃったね。

「食堂、訓練所、王城内外、要人の警護中。あげればキリがない。犯人がその変態だと断言は出来ないしな。クラインの思いこみってことも」

「絶対に奴だ」

ピンクマンを見かけたら、すつとんで蹴り殺す勢いだわ、こりゃ。

「仮に犯人がその変態だとしても、実行犯は別かもしれない。呪薬とは知らずに混入した——と、可能な限り調べたんだが、いつ盛られたのか分からないから、正直お手上げだ。少しずつクラインの体に変化して、気づいたときにはコレだ」

「コレは、お前のせいだろう」

殺人的眼力をあつさり受け流し、素知らぬ顔して残念さんはお茶を飲んだ。さすがに慣れているわね。

「飲んだ翌日に、こうなるなんて予想外だったんだ。仕方がないだろ。全部が全部、俺のせいじゃない」

あらら、拗ねちゃった。

私も初恋の人が、女神様になるなんて予想しなかったよ。つかね、予想しないよね、普通。

重要参考人（クラインの中では容疑者決定）は分かっても、手がかりがないんじゃないでしょうか。

「宫廷魔術師じゃなかったら、魔法薬剤師はどう？ 宫廷魔術師になれる素質を持っても、魔法薬剤師のままで過ごす人もいるよ」

「そうなる範囲が広い。宫廷魔術師は王都の外に出ないことが条件だからな。出るときはレオナード卿の許可が必要だ。魔法薬剤師となると、俺の限界を超える」

「緊急事態だもの。レオナード様が詳しいなら、お願いして探してもらえば……どうしたの？」

二人の表情が硬くなった。

クラインは苦虫を噛みしめるように目を閉じ、残念さんは唇を引きつらせる。

「あの方はなあ……正直、俺は苦手で……人類というか、鉄類だし……」

最後なんつつつた、残念。

「レオナード卿は先代の国王陛下から仕えている忠臣だ。その忠義は絶対に折れ曲がることはない。逆に折ってくる方だ」

融通が利かない頑固者って言いたいよね。

逆に折ってくる……ああ、味方は敵ってことか。

「五日後、王城で舞踏会がある。呪薬の存在が公になれば混乱するのは目に見えている。内密に事を運びたい」

「内密について犯人が見つからなくて、呪薬が手に入らなかったらどうなるの？　ずっと、そのままの姿になるんだよ」

呪薬が手に入ったとしても、すぐに解呪薬を作れるとは限らない。解呪薬の製造は難解な古文書を解き明かすようなものだもの。膨大な知識と極限までの集中、ミスも許されない繊細さ、そして何よりも時間がかかる。一月、二月以上、一年二年かかることだってあるんだよ。下手すると永久に――。

クラインは私を信じてくれているけど、それに応える自信を私は持っていない。

だって、私のミスでクラインの命を奪ってしまった……。

死ぬかもしれない可能性、そのままの姿になる可能性、別の何かになる可能性。考えれば考えるほど、ぞっとして体が冷えていく。

エレンなら俺を治せると思った――ルディアナさんの孫だから――。

そんな確実性のない理由で、私を信じても困るよ。

「エレンには申し訳ないと思っている。俺のせいでエレンが危険な立場になることも分かっている。だが、俺にはエレンが必要だ。俺が全ての責任を持つ」

まっすぐ。

ただ、まっすぐに青い目が私を見る。

「俺の騎士生命を賭けて誓う——エレンは絶対に俺が守る」

エレンエレンと真面目な顔で連呼しないでください。一瞬で天国に逝っちゃったよ。くはあ……なんだ、この空気。恥ずかしくて居たたまれない。

残念よ、ニヤニヤせんでくれ。その腫れた顔、もつと腫らすぞ。もうクラインの顔が見れないよ。

「犯人、探す手伝いはしてあげる」

騎士生命を賭けるとか言われたら、私もそれなりに応えるしかないじゃない。

「でも解呪薬は無理だから……何とか作ってくれそうな人も探すことにする」

それが限界。

ちらりとクラインを見れば、眉を八の字にして微笑んでいた。

「分かった」

ごめんね、クライン。

ごめんなさい。

私は、貴方の願いに応えることは出来ません——。

「そろそろ俺は行くよ。呪薬が必要とわかったなら、これ以上は時間の無駄だからな。エレンさんはどうする？」

「呪薬となると、それに使われる材料は特殊なものが多いから。私なりに調べてくる」

正規のルートでは手に入らないものあるし、クラインたちも調べていると思うけど、口の堅い人たちが多いからなあ。

今日は疲れちゃったし、明日パナツツエさんとこに行ってみよう。会っの一年ぶりだなあ、元気にしてるかなー。ついでにアップルパイ作ってもらおうかなー、うふふー。

「そうか。それじゃ、クラインは——大人しく茶でも飲んで寝てろ」

「なぜだ？」

「目立つ」

うんうん。

「しばらくは王都にいるから宿探さなきゃ。安い宿あるかなあ、所持金そんなにないんだよねー」

「ここに泊まればいい」

真顔で何言っちゃってんの、コイツ！

ここ娼館だよ！ 意味分かってんの？ あっちこっちから、ウフフ、アハハ、アンアンとか聞こえちゃうんだよ！

オマエの背後にある黒い三種の神器を、その目でとくと見る！ 赤い蠟燭と黒い鞭と紫の蝶が、どれだけ怖いかわかってんの！？

「絶対に嫌」

「泊まっていけば。ここは他と違って、それなりの身分がある御仁しか来ない場所だし、間違ってエレンさんに手を出すような人はいないさ」

それは安心していいの？ 私に殺されたいの？ どっち？ 今すぐ決める。

「私はともかく、クラインがすつごくヤバいんじゃないの？ 見た目通りの女神様だよ。一目で突撃ダイブされるよ」

「ああ、こいつは心配ない。問答無用で叩き落とすから。いや、蹴り落とすか」

だよ。凶暴すぎるもん。

「この通りは王都の裏側だ。王都の中も、外も、ここで知ることが出来る」

「なんだかんだで口の軽いヤツはいるもんでね」

そだね。

なんだかんだで、一言多いヤツが二名いるもんね。覚えてろよ。

残念さんが出て行ったのと入れ替わりに、夜の女神様が帰ってきた。

にこにこ顔で、ヒビの入ったテーブルを見るなり、クラインに近づき

「これ気に入っておりますたのよ」

部屋の空気が冷たくなりました。

女神様の姿とはいえ、目の前で好きな人が美女に迫られる光景を見たら、嫉妬の炎がめらめら燃えて面白くない、普通はね。

でも……クライン、逃げてー！ 逃げて、クライイイイン！ 人としての大事な何かを失っちゃうよー！

一応、クラインが弁償すると言ったけど、夜の女神様は気にしないで良いと、あっさり解放しました。

心の底では、ウソツケ、コワイ、孫の代まで何とか、など思っ
てしまい目があった瞬間やられるかと思った！

夜の女神様の前では無心になろう。

仕事の準備があるとかで、ぱたぱたと廊下を忙しく走り回る音が
聞こえた。時たま気合いとか奇声が聞こえたりするんだけど、人間
以外の何かでも来るの？

クラインは図々しく、夜の女神様に部屋を貸してくれとか頼んで
るし、夜の女神様は女神様で、

「キングサイズのある部屋がいいかしら」

いらんわ！ 一人でキングはものすごく寂しすぎる！

泊まってもいいよーってオーラを感じたので、金もないし私の望
む部屋を貸してくれるなら、ここが娼館だろうが気にしないで泊ま
れる。

「なんで屋根裏部屋なんだ？」

不思議そうに、クラインはベッドメイクする私をじっと見つめた。

「王都にいた頃は、ずっと屋根裏部屋で過ごしてたの。家賃安いし。
そしたら、こっちの方に慣れちゃって安心できるのよ」

キングなんて寝れるか。

同じ屋根裏部屋でも格差を感じる。枕がふかふかだー。うふふ、
早く寝たいなー。

「って、うわっ！」

いつの間にか、クラインが真後ろに立っていた。
じっと見下ろし、顔を近づけてくる。

「くくく、クラインンンっ!？」

なななな、ナンデスカ!？ 女神様のお姿でも、そんなに近づい
ちやうと恥ずかしいのよ。

「すまない、ルディアナさんの葬儀に行けなくて」

「あ、ああ、そのコト。気にしてないよ、お祖母ちゃんも気にし
てないと思うし。クラインは騎士団長だから忙しかったでしょ、う
ん、しょうがないって」

わかったから、離れてくれー。

「……におうな」

「匂う？」

「臭い」

「離れろ！」

「っっ！」

思いつきり足を踏んだ。

人をからかって楽しいか、このやろっ。

「部屋に戻れっ、ばか！」

ふかふかの枕を、女神様の美しい顔に投げつけた。

「おのれ……」

女に対して臭いとは何事か。胸の次に気にしてることを、はつきり言いやがったよ、あのバカちゃん。

薬品の二オイ染みついちやってるのかなあ。くんくん……わかんない。嗅覚が慣れちゃった。

はあ……最悪だ。よりもよってクラインに『臭い女』のレッテルを貼られてしまった。ひー、臭いから近づくなとか言われたらどうしよう！

香水なんて使えないよ。薬品のおいと区別できなくなるし、スーパーフローラルな石けんを作るしかないの？ でも、匂いが強すぎると薬品の区別が……虫とか寄ってきたらどうしよう。受粉なんて出来ねえぞ。

綺麗なお姉さんが声をかけてこなかったら、ブツブツと朝までノンストップだったに違いない。

お姉さん、すいません。わざわざ屋根裏まで来てくれたのに、顔を引きつらせちゃって。椅子に座ったまま、じっと床を睨んでいる様子が怖かったみたい。ホントにごめんなさい。

それにしても、お姉さんすごく綺麗ですねー。なぬ？ お姉さんじゃない？

……じゅ、十七、歳……。

十七歳で、その、ぼ、母音、じゃねえ……とても素敵な胸をしますね。柔らかそうで、ははっ……。

……はあ、神様はイジワルだ。

夜の女神様に言われ、私に女神様の私室に来るようと言われたそうだ。

わざわざありがとうね、お嬢さん。今度、スーパーフローラルな石けんをあげるよ。

とぼとぼ、夜の女神様の部屋に行く足取りが重い。ショックだ。色気云々じゃなく、女とは何かを見せつけられたような気がする。

女神様はいいのよ、別次元の存在だから。クラインは腹立つが……しかし、十七歳とは……女って幾つになっても怖いな。私も女だけど、あんな寄せて、上げて、ぷりっと強調できる脂肪がないもん。ああ、部分発育薬を手取るべきか、うーんうーん。

悩みながら部屋のドアを開けると、鉄物様……もとい鉄將軍様がおられました。

女神様と二人きり。異様過ぎる光景に蓋を閉めたいというか……ドア閉めちゃってもいい？ 入る部屋、間違えた感いっぱいなんだけど。

大きな黒い熊さんが、器用に椅子に腰掛けていますよ。

黒ーい。とにかく黒い。髪も黒ければ肌も黒い、服も黒い。厳ついおっさん。顔、飢えた熊。

めっちゃ睨まれてる！ 杖代わりに使ってる風な黒い剣は何なの？ ねえ、ここって武器持ち込みOKなの？

「エレン、ここへ」

正直、行きたくない。躊躇してたらばっさり斬られそうなので、震える足でクラインの隣に腰を下ろす。

唯一の救いは鉄將軍様が真正面にいないことか。まともに顔見れないもん、怖くて。

「レオナード卿、彼女はルディアナ・ラックロウの孫娘エレン・ラックロウです」

「ルディアナか、懐かしい名だな」

懐かしがっているような顔に見えないんだけど。なんかこう、舌打ちしたときの表情っぽい。

「忌々しい女め」

うつわー！ お祖母ちゃああああんんー！
なんか知っているみたいだし、何をしたのおおお！？

「クライン、失態だな」

「申し開きの言葉ありません」

ごくり。

鉄將軍様を見て眉一つ取り乱さないクラインもすごいけど、女神様になっちゃったクラインに動じない鉄物様、いやいや鉄將軍様もすごい。

緊張で死ぬ！ 音もないのに、ゴゴゴゴッって二人から聞こえちゃう！

「解呪薬なんて代物を緑の宮の連中に作らせば、やつかいの火種だ。カレンの奴が先走ったが、結果まともに相手されなかったようだな」

「カレン？」

「影の名も知らんのか、娘」

つい、クラインを見上げた。

「カレン・ルーディー・アーバック。名前で呼ぶな、機嫌が悪くなる」

吹き出すのを堪えろ、私っ！

……。

……。

……。

よし、良く堪えた、私！

カレンでカレンで、残念！ お前はカレンちゃんだったのか！

これからは残念ではなく、カレンちゃんと呼ぼう。

小馬鹿にしたように、鉄將軍様が鼻で笑った。顔はちっとも笑ってないけど。

「いつそ、その姿ままでいたらどうだ。部下の士気も上がるぞ」

「ご冗談を」

確かに。女神様が騎士団長だったら、常にやる気十分ハイテンションだよな。

「俺の庭を勝手に動き、許可なく記録を調べたな。貴様にそこまで権限はない。越権行為と思われるでも致し方ないな。貴様が師団長でなければ、この場で首を斬り捨てるところだ」

だんつと、鉄將軍様は剣を床に打ち付けた。

振動が足の下まで響いちゃって、気を抜くと顔が滝になりそう。

「フン、呪薬か。禁止された呪いを使うとは、よほど俺に殺された奴がいるらしいな。命知らずめが」

はわわ、早くピンクマン見つけないと確実に殺される！

「クライン、貴様はこの件から手を引け」

黒い剣の先がクラインに向けられた。

「五日後の婚約発表に問題が起こっては、同盟国の間に不信を生む」
「婚約発表って……でも舞踏会って、クラインが言って……」

「表向きはそうだ。シーヴの第一皇子が来る手筈になっている。シーヴはガガン王国と冷戦中だから、第五師団のベアトリクスを護衛に向かわせたが……ヤツからの連絡が滞ったままだ」

来ないかもしれないってこと？

「シーヴは同盟国だが、近年水面下で焦臭い動きがあると報告を受けている。昔のような軍事力はなくなったものの、その武力は我らと同規模と見ても良い。もし、呪薬の存在が公になればシーヴだけでなく他の同盟国との間に傷が付く。王都に付け入るような餌があつては面倒だ」

内密に事を運ぶって、そういうことだったの、クライン。

呪薬が公になれば、もしかしたら戦争が起こるかもしれないから……吐き気がしてきた。

他国でも呪薬の存在は忌み嫌われている。

でも、表面では反対しているにもかかわらず、密かに呪薬を欲し

がつている国があるという噂は聞いた。

最初に呪薬の存在を禁止したのは、先代の国王様。他国にもそのことを宣言して、同盟国の輪を広げていったみたい。

昔、シーヴとは戦争一步手前まで行きそうになったらしいけど、先代の国王様が同盟国にまでしたって、お祖母ちゃんが教えてくれた。

大切な花を見ながら話すお祖母ちゃんの顔は、少し悲しい顔をしていたから、よく覚えてる。

「カレンは、どこにいる？」

「あれは影ですので、レオナード卿はご存じかと」
「ちっ」

重苦しい空気なのに、鉄將軍は氣にもしないで立ち上がる。

「俺の権限で第四師団は俺が預かる。貴様は婚約発表が終わるまで動くな。終わりしだい、陛下が貴様の処分を決める。呪薬に手を出した者の末路は決まっている。今の内にハインズにでも会うがいい」

「待つてください！」

こっちは言いたいことが、いっぱいあるんだから！

「クラインは望んで呪薬に手を出したわけではありませんっ、被害者です！ それなのに処分などと仰っては、あまりにも酷すぎます！」

「娘、貴様は勘違いしていないか？ 理由に関係なく呪薬・解呪薬の使用製造は禁止されている。仕込まれたとはいえ、クラインは使用した。処分を受ける義務と責任がある。そいつが、その姿になっ

たのは己の油断よ。運が悪かったとも言つべきかもしれんが、それを認めてしまえば国の基盤が緩む」

折れない。

この古い忠臣は絶対的な忠誠と信念という剣を、国王様と王都に突き立てている。

揺らがない信念、折れ曲がることはない忠義。王都一の頑固者は逆に、私の心を折ろうとしてくる。

頭の堅い鉄物ジジイめ。

「分かったなら、家に帰れ。でなければこの先、酷い人生を歩むことになる。俺は忠告したぞ」

振り返ることなく、鉄物ジジイは部屋を出て行った。

沈黙。クラインは何も言わない。

何も言わず、じっと前を見据えている。

もうね、限界。

「むうううつかあああつく……むかつくわーっ、鉄物めー！」

この重苦しい鉄の空気も、鉄物ジジイの言葉も全部っ、今すぐっ、投げ捨てて燃やしたい！

味方は敵つてより、自分以外全員敵じゃねえかよ！ 友達いない、敵は多いタイプだ。嫌いだ。

「久しぶりに話をしたが、相変わらずの方だ」

うんうんと頷くな！

「クラインも黙ってないで、一言ぐらい言ったらどうなの！？」

「無理だな」

「無理とか言うな!」

「言っても無意味だ。レオナード卿の言葉に非はない」

「なによ、大人しくカレンさんの言葉を守って閉じこもるの?」

鉄物ジジイに言われたからなんて、言わせないからな。

「じつと待つのは苦手だ」

あ——うん……そうか、そうだったね。

気づいたら動いていた、だもんね。

あの時も、我慢できなかった。そうでしょ?

私が一人で薬草を取りに行ったとき、ぬかるんだ地面に足を滑らせて、足首ひねって帰れなくなった。

怖くて怖くて、いっぱい泣いた。泣きすぎて声も枯れて、助けてって言えなかった。

それなのに……。

大人が探しに来るよりも先に、クラインが見つけてくれた。

全身汗だくの姿で、顔や腕に切り傷をつけて。涙が止まらない私を抱きしめてくれた。

戻ったら「危ないから、お前までなにかあったらどうするんだ!」って、すごく怒られて。

うん覚えている。

だって、この時から私の恋が始まったもの。

エレンは絶対に俺が守る——そういわれて、どれほど嬉しかったか。

鉄物ジジイの信念は折れない。
けど、クラインの信念も折れない。

「クライン」

青い目が私を見る。

力強く拳作って——覚悟を決めた。

「私の魔法薬剤師の生命全てを賭けて、クラインを元の姿に戻すわ」

クラインの願いを逃げずに受け止めることが、私の信念。
これだけは鉄物ジジイだろうが、ピンクマンだろうが、誰にも折らせるものか。

「礼を言う、ありがとう」

女神様の破顔は心臓を止めるレベルだったこと、今知った。

息も絶え絶えに、どうにか死なずにすんだけど、ヤバかった。
どうした？ と、クラインが顔を覗いてくる。ヤメテっ！ 今の
お前の顔は危険物なんじゃー！
は、早く部屋に戻ろう。

「あら、ゲーニツツ様。もう、お帰りですか？」
「すまぬな、フィーネ」

ぴたりと、ドアノブの手が止まる。

鉄物ジジイと夜の女神様の声が聞こえた。クラインと二人して、ドアに耳を付ける。

「ふふつ、貴方様に付けた傷、もう消えてしまいましたね」

「また新しくつけられよう」

「あまり虐めないでくださいませ、私気に入っておりますのよ」

「虐めておらんぞ」

「あらあら、ホントに？ 泣かしたら酷くしますわよ」

ナニコレ？

鉄が、ぐにやりと折れ曲がってるよ。

「夜の方も堅物ではなかったのだな、俺はそっちも堅物だと思っていた……レオナード卿は見た目よりも早そうだな。年齢もあるだろうから」

たしかに……早そうって何が——って、オ・マ・エ！

スパーン。

遠慮無く、クラインの頭を叩いた。なんて事を口走るんだ！

がちゃ。

「うはい！」

突然ドアが開いたから、ぴょんって飛んだ。びっくりした！。夜の女神様は目をまん丸にして驚いたけど、にこやかに微笑んでくれた。

「お話はもう済んだのね」

「ハイ……」

優雅に夜の女神様は部屋に入る。

私はまだ動けない。自然と目は夜の女神様を追いかけて、

「堅いお方だね」

吟いて、赤い蠟燭を撫で……。

「彼ね、ベッドの上では可愛らしく酷く鳴くのよ」

目が怪しく、私たちを見た。

「……し、失礼しましたーっ！」

クラインを蹴り出して部屋を急ぎ出た。

[illegible]

「パナ——ッゲエ！」

口から内蔵が飛び出る！

「なんだいつ、一年で名前を忘れたのかい！？ パナッゲエじゃなくて、パナツツエだよ。久しぶりだねっ、エレン！」

私を見るなり、一段と恰幅良い体になったヤヤモネ店のボスは、店の客を跳ね飛ばして抱きついてきた。

全身柔らかいお肉さんで昔は気持ちいい腕や、弾む腹を触って楽しんでいただけ。体全体で包まれると、こんなにも凶器になるなんて思わなかった。

すんごい馬鹿力。ヤバイ……意識が遠のいていく……。

「また働きに来たのかい！？ こっちは大歓迎さっ。あんたが辞めたら、ろくなヤツが入ってこなくてね！ 調合に時間かかるわ、材料の無駄遣いだわ、毒草の見分けがつかないわ、配達先の道を間違えるわで大変だったんだから、ちょうど良かったよ！ さー、あなたの仕事場は残ったままだから、きりきり働いておくれ！」

違う、そうじゃない……話を……ぐふっ……誰か、この暴走おばさんを止めてくれる……。

「すまないが」

クラインツ、さつそく騎士生命に賭けて私を助けてくれるのねっ。
早くっ、早く止めて！ 朝食がもうすぐリバースしそうなのっ。
食道まで来ちゃってるのっ。

柔らかい腕の肉が「マシユマロみたいでおいしそー」と言っていた私のバカ！ おいしそーどころか窒息死だよ。
はやああああく、クライイイイイン！

「ここ最近、怪しげなピンクを見てないだろうか？」
「悪いけど見てないねえ」

私の意識はここまでだった。
さよなら、アホの子を信じた私。
そしてこんにちは、アホの子に制裁を加える私。

真っ暗な意識から目をあけると、テーブルの上に突っ伏しているのが分かった。

懐かしく、甘い匂いに釣られて顔を上げる――目の前で、のんびりアップルパイを食べているクラインがいた。

美しい女神様が、もぎゅもぎゅアップルパイを頬張って食べている。食事中のリスか、オマエは。

私はこの上なく上品な笑顔で、

「ねえ、なにしてんのかな？」

女神様のこめかみを拳ぐりぐり攻撃だ、このやろっ。

「エレン、痛い」

「痛くしてんのよ、ばかやろっ。さつきはよくも見捨てたなあ」

魔法薬剤師を怒らすと恐ろしいんだぞ。

「仲良く抱き合っていたんじゃないのか？」

「仲良くツブし、ツブされそうになってたの」

「そうか、うまいぞ」

華麗にスルーされ、クラインは一口サイズのアップルパイを私の唇に押しつける。無意識に口が開いて、ぱくつと食べた。

うまいんだけど……この歳になって、まさか「はい、あ〜ん」をやるとは思ってもみなかった。

くそう、クラインめー！　すでに私の扱い方を心得ているとでもいうのかー！

「はいはい。仲良いね、あんたたち」

どすどす、擬音じゃないところがこの人の恐ろしいところ。

また新しい材料を入荷したもんだから、店の通路ギリギリ通れる幅しかない。お客さん的には問題ないからいいけど。

路地裏のさらに奥、蟻の巣のように複雑で細い道の中。いかにも隠れてますって場所に、何故かオープンしている魔法薬材料専門店ヤヤモネ。

細い蟻の巣道は、通行人の姿を滅多に見かけることはない。

店そのものは建物と建物の間、せまい隙間に挟まれ、陰気臭さがぶんぶんにおう。店の雰囲気と正反対のボスが何でこんな所にいるんだらうと、働き始めたころは毎日思っていた。本人陰気くさいどころか、みなぎる太陽の人って感じたもん。

瓶詰めにしたキノコや爬虫類その他もろもろの乾物、ぶら下がっている動物の骨や薬草、木箱に無造作に置かれた薬味野菜とキーキーうるさい生き物の鳴き声。薄暗くてかび臭い店に立っているよりも、真っ昼間のパレードを陽気に踊る方がボスには似合っている。

実際、店を放置して踊りに行ったもんなあ。店を開けたまま誰もいないから誘拐だと思って、警備兵の人呼んじやった。そしたら踊り子衣装で連行……ゲフンゲフン。戻ってきたときは、青白い顔をした警備の兄ちゃんに何度も頭を下げた。インパクトありすぎだよ、ボス。

鳥の尻尾のような大きな羽を背負って、隠すところだけ隠した衣装。あれは衣装と言ふべきか、勝負下着と言ふべきか、すごく悩む。

本来は魔法薬剤師なんだけど、今では魔法薬材料調達その道専門の人。一部の宮廷魔術師も店に来るし、その方面では顔が広いみたい。

柔らかい巨体にツブされそうになったけど悪い人じゃない。だって――。

「はいよ、エレン。ちょうど出来たところだよ」

「わーいつ、焼きたてだー」

死ぬほどアップルパイがうまい。

熱いつ、うまいつ。でも熱い！ でもうまい！

かび臭い店の中は落ち着いてゆっくりする場所がないので、おやつ時間は店の外に設置した憩いの場で過ごす。

暑い日でも建物の影だから涼しく、寒い日は焚き火を起こして暖をとる。

ボスは一日の半分以上を憩いの場で過ごし、私はかび臭い店と配達で一日を過ごした。懐かしいなあ。

「なんだい、ここで働くんじゃないのかい？」

どっせーい、とボス専用ベンチに腰を下ろした。

「違いますよ」

「ふーん、まあいいさ。自分の店をやっているんだってね。いいのかい、放っておいて」

「少しの間だけです。まあ、みんな元気なので、店を開けても閑古鳥ですけどね」

「ないよりはマシだよ。田舎なんて儲けがないって魔法薬剤師は嫌がるからね。何かあった場合、助かる命もあるってもんさ。」

私も田舎の出でね、医者や魔法薬剤師がいなかったから母親が病気で亡くなってね。それが悔しくて魔法薬剤師になっただけど、こっちが本業になってしまっただろ」

言って、自分の店に指を向ける。

「その代わり、弟が田舎で頑張っているから良かったんだけどさ」

知らなかった……弟さんいたんだ。

やっぱりボスに似ているのかな、その弟さん。美味しいものを食べて、にんまりする系の……西のボス、東のボスみたいな姉弟かしら。

見たことのない弟さんを想像するのに気を取られて、油断した。

一年ぶりに会ったボスとの再会。田舎のゆつくりとした時間に身も心も置きすぎて、肝心なことをすっかり忘れてた。

ボスは……オバサンだってことを！

「この前、弟から手紙届いてね！ あたしの所ど田舎だから全員自給自足は当たり前！ 足腰、胃腸もヘビーに強いジジイババアばかり！ 暗い時間に寝て、暗い時間に起きる規則正しい生活をしてる

から、客なんて閑古鳥クワクワ泣きっぱなし。ただでさえガリ骨男のくせに体重が十キロ減ったって言うんだよ！ あたしに対する当てつけだねっ、あの馬鹿弟は！ それで金がなく食べるものがない、店のものに手を付けるわけにもいかないだろ。日々の主食が雑草粥や雑草スープで命を繋げてるって、ほんと男のくせに情けない！ 他のレシピも考えればいいのに、飽きるのは当然じゃないのさ。雑草パイでも作ったらいいじゃないか。まったく、昔からものすごく要領の悪い子でね、子供の時からひ弱で魚も満足に釣ったこともなくて、逆に魚に釣られて、おぼれて、意識不明で、本当に馬鹿なんだよ。笑えるだろ、あつはつはつ！ とにかく、このままでは死ぬと書かれていてね、なにを思ったのか一人農業を始めたんだよ。うまくいくわけないと思ったんだけどね。隣町に野菜を販売しに行ってみたら主婦層に人気が出たっていうんだよ。今度酪農にも手を出そうかって考えてさ！ ガリ骨男のくせに、死んじやったらどうすんのさ。誰が牛の世話をみるのさ。あたし！？ あたしは無理だよ。まあ、牛をさばくのは得意だから、牛だけは貰ってやってもいいけどね。でも自慢じゃないけど、あたしの田舎はタフな連中が多くて、基本しぶとさが売りの田舎なんだよ。死にそんな顔をして死なないんだから、はた迷惑この上ない弟だよ。母親は他から嫁いできたもんだから、なんだかんだで蓄積していったんだろうね、父親の行動に。病気よりもストレスで亡くなったのさ。もう、あんときの父親に対する一族フルボッコは見せてあげたかったよ！ アンチヨビツの坊やが、ああ、アンチヨビツは父親の兄の嫁さんの弟の嫁の息子の甥っ子で、兄の嫁さんっていうのがヴィクトリアって言うんだとさ、ヴィクトリアってご大層な名前に負けちゃってる人で、これがまた……で……それで……なんだよ……」

止めて。

誰でも良いから、このペラペラオバサンの息を止めて。

息してるの、コレ？ ワンブレスで話してるオバサンを誰か止め

てえええ！

「それでさあ、パイの中身をミートにするか、アップルにするかで揉めてさ。アップルパイはやめろって言うんだよ。あたしじゃなく旦那が！仕方なくアップルタルトを作ったら、ブチぎれて離婚。そっちがアップルパイやめろって言ったくせに、人をなんだと思ってるのさ。そう思うだろう。アップルって言えば去年マリアーナが……」

「最近羽振りの良い客、または目立つ服装の客か、見慣れない客は来なかっただろうか？」

ありがとう、クライン。出来たら、もう少し早めに言って欲しかった。

「うちは半分以上が魔法薬を買い求める客、その残りは緑の宮の連中。連中は目立つのが当たり前だから気にもしないね。ここに来る客は紹介で来る奴らばかりさ。羽振りが良いのは全員同じだね」

言って、ボスのアップルパイが三皿目に突入。

……ボスっ、少しは自重せよ！一切れ、二切れの感覚じゃねえんだぞ、ボス！

「ねえ、ボ……パナツツエさん。弟さんの手紙には、川の様子は書かれていなかったの？ほら、村の近くに二つの川があるって前、言っていたでしょう。洪水があって大変だったって。今はどうなったのかなあと思って」

個人の魔法薬材料専門店には、それぞれ独自のルートを持っている。王城もそれなりに確立していると思うけど、個人で宮廷魔術師

が来るような店はここ以外、たぶんないと思う。

わざわざ宮廷魔術師が買いに来るほど、どれだけ特殊でヤバい人たちとお友達なのか、あんまり聞きたくない。

滅多に人が通らない場所でも、誰かに聞き耳立てられたら怖いもんね。

呪薬が作られたなら、その世界の人たちにも大きな動きがあったはず。

ボスは、その手の話を知っている。

だって……オバサンだから。隣の隣の家の二件目の隣の家の誰々はとか、ものすごく詳しい。

「書かれていたよ。大きな川は、いつもと変わらず緩やからしいね。洪水は起こってないってさ」

ボスは嫌な顔をせず、アップルパイをつつきながら話してくれた。話してくれるのはありがたいんだけど、三皿目のアップルパイはいつの間にか三分の一にまで減っている。一瞬でどこに消えたの？ ま、まさか飲んで、る？ ……アップルパイティー？ ボオオオス、いったん小休止を求む！

「小さい川はでかい洪水があつたみたいだね、隣村を襲ったそうだよ。理由もわからないまま、突然大雨が降ったって」

「隣村は大丈夫なの？」

「大丈夫かは分からないね。とても酷いらしいよ。村のほとんどがやられたそうだ」

ほとんどって……裏ルートから流れてくるものは正規の数倍の値段で取引される。

入手困難なものほど裏ルートで流れるから、仕方がないかもしれ

ないけど。

仮に町一つ潰すような、莫大な値段の取引があったってこと？
……それって個人で買えるようなレベルじゃない。

「隣村と言ったが、どこの村なのか。貴女はご存じなのか？」

「ああ、東村だよ」

東——って、あっ！

とっさにクラインを見てしまった。

だって、東の方向って言ったら……。

——シーヴは同盟国だが、近年水面下で焦臭い動きがあると報告を受けている。

もしかして、鉄物ジジイも気づいている？ 緑の宮管轄なら、その手の話は知っていて当然だね。

ちよつと待って、これって本気で危ないんじゃない？……。

シーヴって国だよ、それも王都と並ぶ大きな国。その国の財政を圧迫するような裏取引があったってこと！？ 何を買ったの、シーヴさん！？

それが呪薬に使われた材料の一部だとして、一国の財政を混乱させるようなもの、どうやって手に入れるわけ！？

解呪薬を作るには、どうしても全ての材料が必要になる。だけど、クラインを助けるには鉄物ジジイの……うっん、国王様の手を借りなければ絶対に無理だ。

たとえ国王様にお願ひしても結果は見えてる。

クラインの表情は変わらず真っ直ぐ、静かにボスの話を聞いているた。

元はといえば、あのピンクマンめえええ！ 僕のものとか言いやがって、クラインはものじゃねえぞ！ クラインはなあ、私のものでもねえけどよおおお！

ちくしょう、こっちの心も洪水になってきた。

ん？ ……——あつ！ ってことは、ピンクマンはシーヴの人間ってことか！

テ〜ツ〜ブ〜ツ〜ジジイ〜イイ、思いっきり侵入されてるじゃないっ。熊の置き土産じゃないんだぞ！ あんだけ散々人をビビらせで、大したことないじゃないかー！ ヤツか、ヤツのせいなのか、クラインが女神様になったのは鉄物ジジイのせいなのかー！

ふつふつと鉄物ジジイに怒りの念波を送っている横で、クラインは話を続ける。

「東の村以外、被害はなかっただろうか？」

「ないんじゃないかね。襲ったのは東村だけって書かれていたし。そのうち他の村が心配するなり、様子を見に行っているんじゃないか？ あたしん所の村からも、様子を見に行ったらしいし。それ以上は知らないね」

「そうか……貴女の家族も怖かったのだろう。隣村が洪水にあって」

ボスの顔が大きく揺れて、笑った。

「心配ないない。言っただろ、しぶとさが売りって」

ですね、ボス。

ボスの心配事は、時間が経っちゃって食べるのに勇気があるけど、食べれないことはないよね、食べちゃう？ ってぐらいだもんね。それで一度たりともお腹を壊さないから、もはや人間じゃない。

オバサンという種族だ。

「会えて楽しかった。行こうか、エレン」

立ち上がるクラインを、ボスが引き留めた。

すんごい怖い顔でクラインを見てる。ヤバイ、ばれて――。

「あんた……すんごい美人だね！ どうだい？ いい人紹介するよっ、向こうの突き当たりを右に曲がった三番目の建物の三階に住んでいるホワンって若者がいるんだがね、この人が……なんたら……かんたらで……それで……」

……ない、時間の無駄だ。

「じゃあ、パナツツエさん。楽しい話、ありがとうございました。アップルパイもごちそうになってしまって。美味しいから残りのもの持って帰りますねー」

ボスのスキルに対抗するには無視が一番いい。どうせ聞いてなくても勝手にしゃべる。

ありがとう、ボス。

どうか、アップルパイのお代わりは二皿で勘弁してください。見てるだけで胸焼けして、全然食べれなかった……うんぷ。

記録のない魔術師 5

長く喋ってくれた割に半分以上、記憶にない。おつかしーな？
話の九割半は、ボスの身の上話に使われたのにね。不憫な弟さんがいたってことしか、記憶に残っていないよ。

太陽が真上をほんの少し通り過ぎている。昼食の時間だけど、胸一杯で喉が通らない。

クラインは結構食べていたからお昼いらないよね。こいつもボスほどじゃないけど、かなりの甘党だった。二皿完食しやがった！
その体型でアップルパイ二皿は、嫉妬を通り越して軽く殺意がわいてくるよ、女神様。

……はっ！ 甘いもので胸を作っているの、もしかして！？
でも、場合によっては違う場所が出てくる可能性が大きすぎる。
ダメだ……。

それに今は胃が萎縮しているから、何も食べれない。二人の、主にボスの飲みっぷり……いや、食いつぷりに胃が震え上がって、アップルパイまるまる残しちゃった。食べる気も起こらんわい。

とにかく胃が重い、気が重い、足が重い。

周囲に店があつたら、少しぐらい気分が紛れて楽になったのになあ……何も無い。誰も通らない。薄暗い道を歩くたび、気分は直角に下降する。

自然と目線が下に落ちてしまう。ボスと別れてから、ずっと自分の足ばかり見てる。

突然の手紙から始まったものは、私が思っていた以上のことを容赦なくぶつけてくる。

クラインが女になりかけていること。

呪薬と解呪薬のこと。

鉄物ジジイのこと。

そして、シーヴのこと。

クラインが元に戻るなら、免許でも下着でも好きなだけもってけー！

脱いだらすごいんだぞ、私！ 胸とかクラインが認めちまうほど、絶壁ですごいんだから！

腰なんてあまりの丸太っぷりに泣いてしまっぞ、このやろっ！
ウッフ、アハハ……ふう……駄目だ、頭が考えるのを拒否している。

ねえ、お祖母ちゃん……どうしたらいい？

解呪薬を作るには呪薬と、それに使われた材料が一つでも欠けては駄目だと教えられた。

呪薬には呪いの源となる中心がある。一つの方法を基にして、別の材料が細かく複雑に絡み合い、一本の太い縄のようなものになる。複雑に編み込まれた呪いの糸を一本一本剥がすように調べ、使われた材料を探すために絶対に呪薬は必要なんだ。

全ての材料を知り、手に入れても、解呪薬は簡単に作れない。本当の難関は材料を手に入れた瞬間から始まる。

基となる材料を探し当て、それを打ち消す薬を作らないと呪いは消えない。

腹立つことに呪薬をいくら調べても、どれが呪いの基なのかまでは知ることが出来ない。作ったヤツしか知らない秘密の鍵みたいな

もの。

そんな鍵、心の底からいらねーよ！

数ある材料全ての解呪薬を作る——これが、どれだけ時間がかか
ると思ってるの？ 一つ一つの材料に合わせて、解呪薬を作るんだ
よ。

金と時間と体力勝負のガチバトル。

数ヶ月は引きこもりを余儀なくされるし、返って呪いを深刻化する
場合も。死んでしまうことだって……。

才能ある人なら、組み合わせた基をつくることも可能になる。そ
うなると、お手上げ。

ただでさえクラインには時間がない。

でも、私は彼と約束したから諦めたくはない。絶対に逃げたくな
い。

だけど、手元には呪薬も、材料もない。

ピンクマンを捕まえれば呪薬は手に入るけど、そのピンクマンが
どこにいるのか分からない。

仮に呪薬が手に入ったとしても、材料はどうやって手に入れるの？

——小さい川はでかい洪水があつたみたいでね、隣村を襲つたそ
うだよ。

——大丈夫かは、わからないね。とても酷いらしいよ。村のほと
んどがやられたそうさ。

ボスの言葉が、頭の中でぐるぐる回る。

シーヴが裏で動いているのは分かった。クラインは、たぶんそれ
に巻き込まれて呪薬を飲まされた。どこで、どうやって飲まされた
んだろう？

今、嫌な方向へ進んじやっているから、この先も、すごく嫌な予

感じが感じない。

呪薬を手に入れても、材料は手に入らず。

材料を手に入れると、王都に住む人たちを苦しめる。

呪いの薬とはよく言ったもんだ。この上なくやつかしい呪い。先代の国王様が禁止にしたのも頷けるよ。

クラインの呪いは、それで死ぬようなものじゃない。

でも男として生まれ、男として生きて、騎士団長になったのに突然、女に変わったら——今まで生きた彼が死んでしまったことになる。

クラインは女の姿をしているけど、まだ死んでいない。しぶとく生きようとしている。

ほんの少し先を歩く、クラインの姿。

下がらない両肩、真っ直ぐに伸びた背筋。俯かず、ひたすら前を見て歩いている姿勢。

もしかしたらという不安も、恐怖も感じさせない背中。

クラインが昔の約束を守り通せた理由を、彼の背中で分かった気がした。

マジで、これからどうしよう。正直、ボス以外の店は知らないの。

突然、ボスに拉致られて、初日に容赦なく店番させられて、気づいたら普通に働いていたから、よその店とは面識が薄い。

警戒心すつごいしなあ……きつと門前払いされる。

……やべえ……。

材料が駄目なら、ピンクマンに全ての望みをかけるしかない！

どこにいんの、ピンクマン。お前なんて、ピンク野郎で十分だ！
出てこい、出てこい、ピンク——って、

「ぎゃああああー！」

曲がり角にさしかかったとき、何かに襲われた。突然すぎて何かなにやら、相手の姿が一切わからない。

頭を蹴られ、手を噛みつかれ、おんどりゃー！ ピンク野郎の襲撃かつ。やってやんぞ、このやろう！ どこだ、ピンク野郎はー！
どこにいるー！

袖をまくり上げて、周辺を見渡す。誰もいねえ。

「エレン、落ち着け。サルみたいだぞ」

このみなぎる力の拳を、ピンク野郎のために置いておくべきか。
今すぐアホの子の頭に使うべきか。すつこく悩む。

「あれを見る」

「……子犬？」

壁際に、白いシッポがくるくる回転した可愛い尻がある。すごい回転、今にもどつか飛んでいきそう。

なぜに、この子犬はこんなにも喜んで——……うっわああああ、ちよつと待てーい！ 何を猛烈な勢いで食べてるのー！

急ぎ子犬を抱き上げると、そこにあったのは……。

「あ、ああ……終わった……」

アップルパイの残骸すらない。子犬の胃袋によって天へ帰られてしまった……うわーん！ まだ、二口しか食べてなかったのにー！

「げぶっ」

「げぶじゃないよ、もふもふ。アンタ、なんてことしてくれたの…」

シッポが全力で回転しちゃうわけだ。

口の周り、パイ生地にくずだらけだよ。満足顔でナメとるな。こっちはトドメ刺されたんだぞ、もふもふ。

ちくしょう、つぶらな瞳で首をかしげて反省の色無しか。なんて、大物だ！

「ごめんなさい！」

男の子があわてて走ってきた。

「この子、君のお友達？」

ずずい、と彼の目の前に、もふもふを突きつける。

上機嫌にしつぽ振っちゃって、なんてやつだ。くそう、アップルパイよ……お前の仇、とれないかもしれない……。相手が手強すぎる。

男の子は何度も頭を下げて、謝った。

「こいつ、ものすごく甘いものが大好きなんだ」

お前はボスか、もふもふ。このぽっこりお腹とか、そっくりだぞ。うんうん、ボスのアップルパイは死ぬほど美味かったな。そんなつぶらな目で強請っても、もうねえぞ、こんちくしょう。

ほいと、もふもふを男の子に渡す。

こんな人っ子ひとり通らない路地裏に男の子とは珍しい。少し気弱そうな子に見えるけど、この辺りの子かな？

大事そうに抱えちゃって、大好きオーラが見えて駄目だ。微笑ましくて可愛いくて、怒るに怒れない。

ごめんね、アップルパイ。すさんだ気持ちだが、和んじやった。

陰鬱な気分もどつかいっっちゃったし、アップルパイは許してやろう、勇者もふもふよ。

「家はこの辺りではないな、迷子か？」

クラインの言葉に男の子は首を横に振る。

この辺はちよい危ないからね。私はバックにボスがいたから、手を出す愚か者がいなかったけど。この近辺の子でもなく、迷子でもないなら……。

「家出か？」

だよ。でも、違うと首を横に振った。

男の子の様子が泣くのを堪えるような、そんな雰囲気になってきた。じつと、もふもふを見る。

「追い出されたのか？」

男の子は何も言わない。

「犬が追い出されたんだな」

こくんと頷いた。

そうか……人の大切なアップルパイだけではなく、家のものもシツポ全力回転で食い尽くしたのか。お前ってもふもふはよく。そん

な可愛いぬくぬく玉で悪魔のようなヤツだ。
くそう、私だったら白旗上げてるぞ。

「母さんが、元いた場所に連れて行きなさいって。おれのこと全然信じてもらえなくて、こいつ小さいし……」

小さいから、欲望のままに動くんだよね。

このまま、もふもふを放っておいたら、もし万が一、仮に万が一。奇跡的に万が一にも、もふもふがボスの所へ行ったら……。

——牛をさばくのは得意だから。

ダメ。危ない。ここは危険地帯だわ、とにかく広い通りに出ないと。

この黒い、つぶらな瞳の奥にきつとある。見えない目の奥に、甘いものに執念を賭けているボスと同じ目を、このもふもふは絶対持っていると思うの。

「と、とにかく、ここを離れよう、ねっ」

クラインも同じ気持ちで頷いてくれた。単に場所が危ないからだと思っけど。場所うんぬんというか、奥にひそんでいる魔物は場所以上に危険過ぎる。

私たちは足早に路地裏を出た。

店や人通りが増えたところで、男の子は少し安心してきたみたい。強張って上がっていた肩が、いつの間にか落ちていた。

もふもふは鼻を引くつかせて、頼むから予告無しの襲撃はやめてね。心配なので、こっそりクラインに耳打ちする。何かあればクラインが素早く、もふもふをがっちり掴む手筈になっている。

ふっふっふっ、もふもふよ、クラインの握力をなめんじゃねえぞ。

「こいつ、箱の中に閉じこめられていたんだ」

ぼつりと、男の子が話し出した。

「家の近くに、大人が入れない狭い道があつて、その奥にこいつがいたんだ。木箱に閉じこめられて、出られないよう重い石が置かれてた。酷いことするやつがいるなって思つて……こいつ、こんなに可愛いのに」

もふもふの罪状はわかっているが、やりすぎにもほどがある。誰の仕業だ、まったく。

「家に連れて帰りたいけど、母さん動物が嫌いだから許してくれなくて。だから、見つからないように隠していたんだけど……」
「ばれちゃったと」

力無く頷いた。

「母さんが楽しみにしてたケーキ、こいつが食べたから」

……もふもふよ、それは叩き出されても文句言えないよ！

これがボスだったら、お前つ、下手するとボスの腹の中にいちやつたりすんのよ！

「橋の下に連れて行つたけど、こいつついてくるし。急に走り出したと思つたら、お姉さんのものを食べて……」

最後は申し訳なさそうに、声が小さくなる。

いやいや、男の子よ。君は悪くない。悪いのは反省もなく、つぶ

らな瞳で事を済まし、なおかつ今現在も甘いものを探している、もふもふなのだ。

この反省の色が全くないずずうしさは、本当にボス並の精神を持っているな。

中央道ほどじゃないけど、だいぶ人通りが多い道に出てきた。

この辺りは住宅地区だね。造りかけ途中の家の前で、休憩している大工さんたちもいるし——って、おい！ もふもふー！？ なに全力疾走しちゃってんのー！

「なんで捕まえなかったの！」

真っ先にクラインに噛みついた。何かあつたら、こっちの責任になつちやうんだぞ。

「予想外の素早さに見とれていた。良い犬だ」

おまえはアホか。

ああ、もふもふのしっぽが全力回転してる。猛ダッシュで、大工さんたちを襲撃しにいつてしまった。

こつしちやおられん、もふもふの襲撃を防がねば。

「おつ、アガサんとこの犬ところじゃねえか」

一番敵つい、動物や子供には残念顔の大工さんに、もふもふは突撃した。頭撫でられて、しっぽが喜んで。人は見た目じゃないよね。まあ、見た目通りの人もいるけど、鉄物ジジイとか。

「よお、アガサ。母ちゃん、探してんぞ」

知り合いなら、もふもふが懐くのも納得。アガサ君も平気みたいだし、私たちは少し離れて様子見。

「母さん、探してたの!？」

「目を釣りあげて、怒ってたぞ。なにをやらかしたんだ？」

アガサ君はもふもふを見た。

厳つい大工さんは分かったようで、もふもふを撫でる。

「おせえぞ、どこで道草食ってた？」

「悪い悪い。おまけの肉団子もう一個もらおうと思ってよ、粘った」

若い大工さんが、溢れるほどの皿を乗せたトレイを落とさないよう、器用に持ってきた。両手いっぱい皿にはスープと肉肉肉、主に肉系料理がてんこ盛り……がつつり男のご飯だわ。まったく縁が見あたらない。

「お！ 可愛いな、お前。なんだ、腹へってんのか？」

もふもふの愛らしさに騙された若い大工さんは、もふもふを撫でまくる。ダメダメダメ、そいつ見てくれは可愛いけどボスなんだから。

大人しくよい子にして座っているけど、こいつ絶対狙っているのよ。

「ドルス。お前、犬好きだったのか？」

「主人の言うことなんでも聞くからな。よしよしよし、いいこだな。特別にお前の好物をやるぞ」

とたん、しつぽの回転が速くなった。わっかりやすい。
若い大工さんはポケットから何かを取り出したけど、こつちからは見えない。

「美味そうに飴食べるなあ、こいつ。よっぽど腹空かしてたんだな」
そりゃ、しつぽが高速回転するわー。甘い塊だもん。

「アガサ！」

神経が逆立ったような女の人の声に、ビクッと小さい肩が揺れた。走ってくるのは、たぶんお母さんかな。うん、目がつり上がって、おかんむり状態。もふもふをめっちゃ睨んでる。

でも、もふもふの視界は全力で飴に注がれている。それが、お母さん的には気に入らないらしい。あわわ、もふもふ。せめてケーキの件は謝れ。

「元いた場所につ、連れて行きなさいと言ったでしょう！」

「小さいのに可哀想だよ！」

「言うこと聞きなさい！　うちには犬を二匹飼う余裕はないんだから。また拾ってきて、この子は」

「拾ってなんかないっ。こいつだけだよ！」

親子の、特にお母さんの迫力に野郎どもの口が全く開かない。なんて奴らだ。でも、気持ちは分かるぞ。ボスと違う迫力を感じる。一つ言ったら、百返ってきてそうな怖さがある。

もふもふ……どうやら、君の前にもう一匹のもふもふがいるらしい。

確かに、もふもふ二匹は厳しいかも。とくに、こやつはボス並に問題児だから。

「な、なあ、落ち着けよ。犬一匹で、そんなに怒ること——」

瞬間、厳つい大工さんの頭に雷が落ちた。

こりゃダメだ。大工さん全員使えなくなってしまった。

「いつから嘘つくようになったのっ。この前はオス犬を拾って、今度はメス犬っ。同じような犬でも許さないわよ！」

「何度言ったら分かるんだよっ。おれはこいつ以外、拾ってきてないよ！」

親子の会話が微妙に噛み合っていない。

変だなって思っていたら、ちょうどクラインと小さく目があつた。

「お母さんに嘘をつくの？ もう一匹も隠していると思うけど、絶対に動物は許さないからね。その犬を元の場所に戻すまで、夕飯抜きよ。それでもいいの？」

「よろしいでしょうか？」

クラインが親子の間に入っていった。

おっ、言葉が丁寧だ。

「なんですか、あなた？ うちの息子になにか？」

さすがお母さん。女神様を前にしても、見惚れるどころか眉を上げ警戒してる。

「道に迷って困っていたところを、この子に助けて頂きまして。是非ともお母様にも、お礼を述べようと、私がこの子にお願いしたのです」

お母さんの顔がぼかーんとする。
私だってぼかーん、だ。

「友人と待ち合わせをしたのですが、この辺りは初めてで道に迷ってしまい、息子さんのおかげで本当に助かりました。ありがとうございます」

「そ、そうなんですか。あ、いえ、なんと申し上げればよいのか、ご迷惑おかけしませんでしたか？」

「いいえ、ご迷惑などかけていません。言葉も丁寧に、とてもすばらしい息子さんです。お母様の教育が良かったのでしょう」

さすが騎士団長。ほめ殺しで、この場を収めた。

しかし、その笑顔は反則だぞ。お母さんだけじゃなく、大工さんたちも顔を赤くしてる。当然、私もだけど。

こいつ分かって使っているな。

「ところで、この白い犬の他にも別の犬がいるのですか？」

「そうなんです。他に同じ犬がもう一匹……この子ったら、勝手に犬を二匹連れてきて」

「こいつだけしか連れてきてない！ 信じてよ！」

「こんな綺麗な人の前で、そんな嘘をつく。まったく……」

お母さんの口調が柔らかくなっている。気持ち落ち着いたみたい。

クラインは少し屈んで、アガサ君と視線を合わせた。

「アガサ君だったね。ずっと、この犬と一緒にだったんだね？ この犬はオスなのかな？」

「拾ったときは……でも……」

「でも？」

信じて貰えないと思っているのか、アガサ君の口が急に堅くなった。

何も言わず俯く彼に、クラインが小さく「大丈夫だから」と囁いた声が聞こえる。

ゆっくりと顔を上げて。

「気づいたらメスになってた」

何もない真っ平らの地表に立っていた私たちに、真っ青の空から一本の細い糸が降りてきたような、そんな瞬間だった。

追う影 1

「いいの？」

「ああ、こいつとは妙な縁を感じる」

クラインは嬉しそうに、もふもふの小さい前足の下に両手を添えて抱き上げた。

あの後、アガサ君もお母さんも互いの主張を譲り合うことなく意地を張り続け、オスがメスになったとかで周囲にいた大工さんたちが、哀れんだ目でアガサ君を見るから可哀想で、可哀想で。

とどめのお母さんの言葉が、

「そんな気持ち悪い犬っ、捨ててらっしゃい！」

さすがにアガサ君も限界が来ちゃったみたい。泣いてしまった。泣きたいのはこっちも同じ。その言葉、知らないとはいえクラインにも言っているのと同じだから。

私はそんなこと思っていないぞーと伝えるように、そつとクラインの手を握った。顔は恥ずかしくて見れなかったけど。手を握るだけでも恥ずかしいのに、顔なんてとんでもございません。

で、どうなったのかというと――クラインが、もふもふを引き取ると言い出した。

もふもふの正体はボスだぞ。大変なんだぞ。食べ物のためなら平気で襲撃しちゃうよ。こつそり耳打ちしたけど、クライン本人は構わないと引き取る気満々。

まあ、お互い甘いもの好き、元男同士だから他人……犬だから他

犬？ とは思えなかったんだろうなあ。

アガサ君は驚いて、すぐるような目で、もふもふをクラインへとバトンタッチ。少し寂しそうな顔をしていたけど、いつでももふもふに会いに来てもいいと承諾を得て大満足。

今はちよい無理なので、後日散歩に来るという約束をして親子と別れた。

「約束しちゃったけど、いいの？」

「構わない。こいつも嬉しいだろう、なあ」

大変な状況なのに、クラインはいたってのんびりしているような気がする。昨日はせっぱ詰まった様子で「助けてくれ」とか言っていたくせに……なに、この余裕？ 私、余裕全然ないよ？ 押しつぶされる一歩手前だよ。

くそう……本気で医者を呼んでこようかしら。こいつの頭の中、見てみたい。

「それにしても、この子も呪薬飲んだのね。どこでピンクマンとあったのかな？」

「お前、ヤツと会った場所を覚えてくれないか？」

しっぱ振って、きゃんきゃん吠えるもふもふ。

「教えているが、俺にはわからん。残念だな」

本気で残念がつてる……っ！

二十八にもなって、それはねーだろ騎士団長さんよ。真面目な顔して、もふもふに戯れてるだけじゃん。

子供に高い高いとあやすように、クラインにしっぱがあったら全

力で回転している真っ最中だわ。もしかして隠れ犬好き？ 私も犬好きだからいいけど。

「犬、好きだった？」

「ああ」

私の知らないクラインの一面を見て嬉しい反面、少し悔しい。私は子供のクラインしか知らない。

騎士になるために頑張った彼、騎士になったばかりの彼、騎士団長としての彼。

今まで何をしていたのか、何一つわからない初恋の人と一緒に歩く日が来るなんて……考えたことはあっても、それが本当に来るとは思わなかった。

クラインも私のこと、何一つ知らないしね。

王都にいたころの私、王都から逃げたときの私、薬屋でのんびりお茶を飲んでふて寝する私とかね……まあ、王都から逃げたのは知っていたみたいけど。手紙が来たし……でも、あれはハインズ様が出したものだから知らなかったのかな？

ゆっくり話す時間がなかったから知らないのも当然だけど、何があったのかは知りたいじゃない。

昔と今は違う。好きな食べ物が違ってくるように、王都に来て何に驚いたとか、騎士になったときどんな気持ちだったのか、騎士団長として何が変わったのか。楽しいことも、辛いことも、たくさんあったでしょう？

女の姿が女神様なら元の姿に戻ったときは、ものすごく美男子なんだろっね。そりゃ当然モテモテウハウハだよな！

今までどこの誰とつきあったとか、そんな話も我慢して聞いてあげる。面白くはねえけどな！

だから、クライン——私の知らないクラインが知りたい。

クラインがもし、クラインの知らない私が知りたいなら教えてあげる。

約束を守れなかった理由も全部……だから、この僅かな時間だけでもいいから教えて。

元の姿に戻れたら、私は自分の家に帰らないといけなから。

「ねえ、ク——」

「エレン」

急にクラインが立ち止まった。私の心を読んじやったの！？　タ
イミング良すぎで困るから！

一瞬心臓が止まって、お祖母ちゃんの後ろ姿見えちゃったよ！

クラインは黙って動かない。

あれ？　なんか顔が怖いんだ、け……ど……余計なこと聞くな、
知るなみたいな……そんな感じがしら、クラインさん。

切ねえ……初恋相手のこと何も知るなってか。

グレてしまうぞ、このやろー。

顔が滝になるぞ、ばかやろー。

心は洪水だ、どちくしょー。

「これから一言も何も喋るな」

はい？　喋ったかと思えば、そのお言葉はあまりにも酷い仰りよ
うだと思わなああああああ！？

もふもふを片手で抱き直し、私は肩に担がれた。私は土嚢かー！
って、なにになににいいい！？

急に走り出して人通りのない暗い路地裏に入る。

どどどど、どうなってるの!?　ねえ、なんばしよつとー!
ククク、クラ、クライン!　ほ、本当は馬つ、お馬さんでしょ!
ばったんばったん跳ねるシーソーでしょおおお!

速い。とにかく速い。

見た目女神様なんだけど、人間じゃないっつーか。女神様は人間
じゃないっつーか。足癖悪い女神様は、どんどん奥へ走る。

さすが騎士団長。おいかけてこしても絶対に捕まらないね。

大丈夫かな?　この場所詳しくないから、迷子になっても知らない
よ。構わず奥に行くし、はあ……一体どうしたのよ、クライン。

ひゅん、と。今なにか光ったものが顔すれすれに横切ったような
——ナンダアレハ?　思わず目が飛び出した。

一瞬だけど、見てしまった。

壁に突き刺さった銀色に光る短剣を。

「なななな、何アレー!?!」

「喋るなっ、舌を噛む!」

勝手に出るんだい!

走っては飛び跳ねて、飛び跳ねては走って、クラインってば容赦
ない!　胃液が逆流しちゃうよ。

尋常じゃない風の音が上からも横からも聞こえてくる。あっちこ
っちから短剣が来るんですけどおおおお!

器用に壁を走って、ジャンプ——見事着地。クラインの方がサ
ルだよお。

この際サルでもいいっ。逃げてくれ!　次々に光りが見えるから、
もう怖くて目が開けられない。

「……誘われたな」

急に立ち止まり、クラインが舌打ちした。

それを聞いて嫌な予感しつつ、おそろおそろ目を開けてみれば。

「げげっ！ 行き止まり！ わわわっ、どどど、どうするの！？」

みっともないのはわかってるけど、自然と体がおぼれたアヒル踊りになってしまう。

「エレンは動くな。俺がいるから大丈夫」

うんうんうんうんうんうんうん、怖いから何度も頷いた。

地面に降ろされ、もふもふを逃がさないよう、ぎゅっと抱きしめる。

嫌な風の音が聞こえた——と思ったら、いつの間にかクラインは短剣を握っていた、顔のすぐ横で。私の目も飛び出た。

女神様の綺麗な顔を狙うように投げつけられた短剣を、クラインは簡単に受け止めていた。

ふらぁ……意識が飛びそう。ダメダメダメ！ 意識しっかり！ 意識飛んじゃダメ！ 意識ファイトー！

また風の音が聞こえた。それ以上にクラインが出す金属音が大きく周囲に響いて、とても怖い。

鳴りやまない風の音、弾く金属音。ざくざくと地面に突き刺さる短剣。

悪い夢をみている。

だって、こんなの、私、知らない、見たことがない……怖い！

クラインの言葉が私の意識を繋いでいるから、なんとか立っている。

どれだけ投げつけられたのか分からない短剣を、クラインははじき返して器用に掴み取った。そのままお返しといわんばかりに投げ返した。

ぴたりと攻撃が止まった。

やった……の？

不安と恐怖に体が麻痺する。今すぐにもクラインにしがみつきたい。

でも、彼は戦っている。絶対に邪魔はできない。

「隠れてないで、出てきたらどうだ——ドルス」

クラインの声が怖い。

低くて怒っているようにも聞こえるけど、何か違う。

声以上に、クラインが怖い。

今まで暴れた時と、空気が全然違う。

クラインだけど、クラインじゃない。

この人は誰？

こつりと足音が聞こえ、私の意識が戻った。

建物の影から、ゆっくりと誰かの姿が見える。一人だけ……でも、暗くてよく見えない。

暗い影の中を動く、黒い影のように、影はゆっくりと太陽の光に出てきた。

「あ……なんで？」

さつき、もふもふを可愛がってくれた若い大工さん。どうなってるの！？

そつえばクライン、名前呼んだよね？

「し、知ってる人？」

「知らないが、おそらく知っている」

どっちだよ！ こんな時もツツコませたいのか！？ ああん？

「いつ気づいた？」

さつきの明るい笑顔はどこへやら。大工さんの顔が人形になっている。

表情が全く動かない。とても不気味で、お化けを見てるような気になる。

お化けじゃないのに……生きているって感じさせない、生気がないように見えるから、そう思ってしまうのかも。

「この犬」

はっ——クラインが呟いて、気づいた。すっかり忘れてた！

もふもふ、無事かあああ——……こんな時も暢気な顔をして、

このやろつ。満腹感溢れる至福の顔で寝てんじゃねえよ！

私も今すぐ寝たいよ！

「お前、初めて見るな。犬の好物なら、真っ先になにをくれてやるんだ？」

大好物って、もふもふは大好きな飴を一心不乱に——あ！ もふもふは甘いものが好きだけど、他の犬は違う。

あるとき、トレーの上に大量の肉祭りパレードがあって、大工さんはもふもふの好物を知らないから、普通は肉の一つや二つ………てことは？

「お前、見ていたな」

クラインが言い終えると同時に、大工さんが走った。

光る短剣を握りしめて、殺す気満々でこっちに向かってくる。おぼれるアヒル踊りの私を気にせず、クラインも走り出した。

ど素人の私の目には、二人の戦いはよく分からない。攻撃をかわしているんだろってわかるけど、正直動きが速くてさっぱり見えない。

あまりにも強くて、あまりにも体が柔らかくて。戦っているのに、なぜか踊っているようにしか見えない。

跳んだり、走ったり、キンキンと金属音がけたたましくうるさい。一段と高い音がした。

クラインの短剣が地面に落ちたのを見た瞬間、体中の血が凍っていく。

殺される——っ！

嫌だっ……クライ——い、いん？ あ、あれ？ 大工さんが倒れている。

クラインの右手には短剣があった。でも、さっきの短剣はちゃんと地面に落ちている。

よく見たら、短剣の形が違う。大工さんが持っていたものに似て

いるような……もしかして奪った？

大工さんが肘を伸ばしたときかな？　一瞬だけ妙な動きをしていた気がする。気がするだけ。はつきりとは分らない。

ねえ、本当に殺したの？

いつの間にか、地面に座り込んでいた。手が震えている。

クラインは振り向かない。当然のように、大工さんを見ていた。今、彼がどんな表情をしているのか想像したくない。

クラインは騎士だから、みんなを守る義務と責任がある。大工さんが悪い。突然、短剣なんか投げつけるから。

でも、私の目の前にいる人は誰？

私の知らないクラインがいる。

私の知っているクラインは、ハインズ様から生まれたとか言っちゃうアホの子で、突然呪薬なんか飲んで女になって、どんな事を言われても真っ直ぐ前を見る。

私は、私の知らないクラインが知りたかった。

私が知りたかった、私の知らないクラインが目の前にいる。だけど、今のクラインを知るには、あまりにも怖い。

心から——クラインじゃない——と思ってしまった。

「エレン！」

クラインが叫ぶ。

一瞬だけ、私の知っているクラインが戻った。

なんだろう？ 細い糸が二本、空中に浮いている——ってあれ？
今さっき私、あの場所に座っていたよね！？ んで、クラインと
結構距離が離れてたよね！？

クラインに抱き上げられちゃってるんだけどおおお！？ しか
もお姫様だっこ！ えええええ、なんで？ どやって！？

「怪我はないな？」

「う、うん？ ないよ」

ほっとした息が聞こえた。よく見れば、クラインの汗がひどい。
呼吸も荒く、苦しそうに肩が動いている。

クラインの方が、どこか怪我しているんじゃないの？

私に怪我はないけど、なんでそんなことを言っただろう？

さっきいた場所を見える。何も変わったところはない。

ただねー。ちょうど真後ろの壁にね、金色の輪っかが壁に突き刺
さっているの。ほら、大道芸の人が、よくジャグリングに使う輪っ
かがあるじゃない。

なんかねー、高さが私の顔を狙ったような位置にあるのよねー…

…こっ、輪っかがキラキラ鋭く光ってさー……。

意識飛ばしていいかなあ。

クラインは例のごとく、眉間に三本の皺を寄せて前を見ていた。

「気配は感じなかった。やはり、お前が動いたのか」

かたかた、と音が鳴った。操り人形を動かすときの音に似ている。
真っ直ぐの棒が起きあがるように、大工さんは体を伸ばしたまま
不自然に立った。まるで人形と同じ動き。人間ではあり得ない、裏

返った関節がくねくね曲がる。本当にお化けだったの！？

奇妙な踊りをした後、ぴたりと動きが止まり……ぱんっ、と破裂した。胃液が逆流寸前だ、ばかやろっ。

紙吹雪とか降って、えぐいものじゃなくて良かったーとか、そんなんじゃないー！ もう、さっきからなんなのさ！

大工さんが破裂しちゃって、今は誰もいない。

ちりん、と建物の影から鈴がなった。もう勘弁してようー！

鈴の音が大きくなる。徐々に近づいている。

ちりん、鈴の音が止まった。

「あれって……」

赤、黄、青、白、緑。ぶかぶかの服に水玉模様。二つに分かれたとんがり帽子の先には鈴が二つ。

顔は雲のように真っ白に、目の周りは空色で大きく縁られている。泣いているような目と、笑っている口が歪な気持ち悪さを感じさせた。

「宮廷道化師」

クラインの声に道化師は胸に手を当て、これから芸を披露させるような、無音の一礼をした。

鈴の音だけは、ちりと小さく耳に入ってきた。

追う影 2

「全然知らない！ 何なのっ、宮廷道化師って!？」

十三年王都にいたけど、そんなうさんくさいヤバそうな人、聞いたことも見たこともない！

広場にいる道化師なら何度も見たことはある。でも人に向けて短剣を投げたり、危険な輪っかなんて使わないし、子供やお年寄りに優しくて愛嬌たっぷりの人気者なんだからー！

かたかた変な音を出したりしないし、ぱんって破裂して紙吹雪になったりしない！ 道化師っつーのはいつも笑顔にこにこ、あんな気味の悪いお化けじゃないんだぞー！ うわーん、絶対夢に出てくるー！ なんてことをしゃがるんだ、このやろっつ。警備兵よりも恐ろしいボスに言いつけてやるっ。

「俺も初めて見る」

「知ってて言ったんじゃないの!？」

なんてこったい、当てずっぽうかよっ。

「こいつは表に出たことがない」

「楽しそうな五色の水玉模様で目の前にいるじゃないのっ」

夜でもなく真っ昼間に堂々と、これが表に出たと言わずなんとい
うの!？

「話だけは聞いていた」

クラインの声が小さい。

怖い顔なんだけど、道化師にひどく困惑している。

「まさか……が……」

小さすぎて聞こえない。なんて言ったの？

「レオナード卿め、本気が」

てっ、鉄物ジジイの差し金かあああ！ あのくそ鉄隠れMジジイめー！ 夜の女神様に言いつけてやるからなー、覚えてろー！ くそーくそーくそー、鉄物ジジイは嫌いだー。だいつ嫌いだー。クラインも悔しそうだ。

だよね、鉄物ジジイの顔面に、みなぎる力の拳十発浴びせないと気が済まないぞ、ゴルア！

「本気で反逆者として、処分する気か」

「……何って言った、今？」

私に縁のない言葉が二つ、出てきたよね。出てきたよなっ、黙ってないで言えええ！ 嘘だと言って、お願い！

「宮廷道化師は王都の表には出せない事情があった場合のみ、秘密裏に動く暗殺者」

「あんっ、あん、あああ……ん……」

声が色気のない喘ぎ声になってしまった。わざとじゃない、あまりのことに言葉にもならない。

「ヤツが現れたということは、俺たちは王都の裏になった」

ほら、見てごらん。王都の裏が仲良くしようって手招きしているよ……って、いやああああっ！ 逝きたくなーい！

いくら禁止された呪薬を使用したからって、これはないないない。酷すぎるぞ、鉄物ーっ！

ギギツ……。

ぞわぞわと髪の毛が逆立ちする。体中に鳥肌が立った。

周囲にはドア一つ、窓もない。なのにドアのこすれる音が聞こえた。

私の頭も、ぎぎぎぎっ、と油が切れた人形になり、音のする方へ無理矢理振り向かせる。

一礼をしたまま器用に顔を上げて、道化師が真っ直ぐ私たちを見ている。泣いているのか、笑っているのか、はっきりしない顔が本当に気味が悪い。使われていない古い城や、長い間放置された館に忘れられた人形のお化けそのものだ。

「かの父は――」

「しゃべった!?」

広場にいる道化師の皆さんは一言も喋らない。それが当然だと思っていたから、びっくりし過ぎて心臓が痛い。このまま心臓が止まるかと思った！ ストレスでハゲたらどう責任取ってくれるんだ、育毛剤は難しいんだぞ！

「娘の眩い光が淡いけむりとなることを嘆き、暗闇のかの地へ娘を連れて帰ることを望んだ」

喋るならせめて、はつきり喋って欲しいよ。か細い老人の声みたいに、こう言っちゃ悪いけど死ぬ間際の最後の声と同じだ。遺言を聞いているようで、すごく聞き取りにくい。

「たとえ生命の源が川となり大地へ流れようと、娘よ、かの地へ帰ろう。かの父が娘の光を欲しているだろう」

芝居めいた台詞が、よけい何を言っているのか聞き取りにくくて分らない。

でも、ものすごく嫌なことを言っていることだけは分かる！

「地下で大人しくしろ、か」

鉄物ジジイっ、ぶつとばーす！ 拳にみなぎる力がどんどん集まってくるぞ！

今なら、夜の女王様とボスのお仕置きが待っているんだぜ、このやろーっ。

特にボスの踊り子衣装の破壊力はギリギリ過ぎて、すごいんだから！

ちくしょう、私は鉄物ジジイがどんな人なのか全く、これっぽっちも知らない。王都一の堅物、怖い熊のおっさん、それだけしか分からない。

クラインの言う、鉄物ジジイの本気……まさか本当に……私たちが王都の反逆者なの？

クラインに確かめようとしたけど、出来なかった。表情が私の知らない彼になって、道化師を見ている。

道化師の拳が前につきだしていた。軽く振って、ぱつと手を開くと、指と指の間に赤いボールが挟まっている。両手を左右に振ってはボールが星の形になったり、ウサギさんになったり、なんて器用な……。

唐突なマジックショーに見入ってしまい、次の瞬間――背筋がぞつとした。可愛いハートから短剣に変わって、思いっきり投げつけてきた！

「なんですとー！？」

お前は悪魔かー！

私を抱いたまま、クラインは短剣をかわす。あぶねー……って、今度は輪つかー！？ 着地を狙うなんて卑怯千万つ、音がないから気づかなかった。左右から交差するように輪つかが来る！

どどど、どーするのーおおお——って、ぱいつと真上に投げられた。ひぎゃああああ！ なにすんのおおおああ……ナイスキヤッチ。

「投げるならっ、前もって言って！ もふもふ落つことしちゃうでしょー！」

「すまない」

謝らなくてもいい、ものすごく危険な状況なのは分かってる。

輪つかよけてくれて良かった……けど、顔面が滝だー。我慢できないん。

ひつく……今度はステックを向けて、先っぽに白い鳩が止まっている。もう、白いポツポちゃんも悪魔に見える。だって目が死んでるもん。小さい口を開けて……なんか光った。

突然、クラインの首が横にかしげた。

なんだろうなーって思ったらね、後ろの壁に針が刺さってるの。
一本じゃないよ、四、五本ぐらいの裁縫針。んでね、どろりとした
緑の液体がついてるの。

……吐血していい？ コレって明らかに、毒針でしょー！

「鉄物ジジイっ、本気で殺す気！？」

「腕の一本や二本は切り落としても良いと言われたかもしれないな」

アホー！ 失血多量で死んでしまっわー！

死んだ目のまま、白い鳩は翼を大きくひらいた。口の中が光る前に、クラインが素早く反応した。

毒針とクラインの追いかっこ。足跡のように、クラインが走った後ろの壁には毒針の長い道が作られている。

蟻の行列ならぬ、毒針の行列。緑の液体がキモイ……。

「わっ！」

急に体がガクンと前に倒れそうになり、クラインが踏ん張ってくれたおかげで地面に落ちなくて助かったけど、ひいひい！ いっ、クラインの首にスカーフを巻き付けたのよ！

赤とか黄色とか色とりどりのスカーフが結ばれて、一つのロープになっている。薄いのに、なんで破れたりしないの！？ 意志を持ってクラインの首を強く締め付けて、冗談じゃないっ！ 窒息どころか骨が折れてしまう！

「かつ……はっ……」

クラインの口から言葉にならない悲鳴がもれたのを聞いたら、勝手に手が動いた。

スカーフを外そうとした手を止められ、触るなど怒られた。なん
で怒るのよっ、死んじやいたいの！ バカー！

「お、降ろす、ぞっ」

痛てっ！ 降ろしてから言っな！ 尻が痛い……もふもふは、よ
う寝てますな、こやつ。

クラインは――ああ、道化師に引っ張られてる。

どどど、どうしよう！？ どうしよう！？ たたた、短剣発見っ

！

「クラインっ！」

うまく受け取ってくれますよーにっ！ 良かった、受け取ってく
れた。力が抜ける……。

クラインは直ぐさまスカーフを切った。そのままバランスを崩し
た道化師に向かって走る。

白い鳩の足下から長い剣が出てきた。なにそのミラクルステッキ
！？ 大道芸だからってふざけんなー！

けたたましい金属音が続く。

赤い火花が顔の側で弾いても、クラインは気にすることなく道化
師と戦う。

いつの間にか、クラインの両手は短剣を握りしめていた。

気づいたら道化師のステッキは、反対側にも剣が飛び出している。

道化師が突然大きく下がって、ラッパを取り出した。

また飛び道具なのか！？ また毒針なのか、卑怯ものー！ って、
クライン何突っ込んでるのー！

パン——音が破裂する。

飛び出したのは紙吹雪と、棒の上に乗った小さいトカゲ。なにそれ？

ぎよろつと、トカゲの目が動いた！ げえ、生きてるの！？

小さな口を開いて、やっぱりコイツも毒針か——って思ったら、巨大な火柱を吐いた。

うぞおおおお！

火吹き竜ならぬ、火吹きトカゲ。横一直線の炎を吐きっぱなし。竜もトカゲに似てるけど、これはあんまりだ。黒こげになってしま
う！

ククク、クラインは、あああ——がわじでるけど、がみのげが焦
げでる……ひっぐ。

炎の勢いがすごくて近づけない。

クラインは短剣を投げた。一本はラッパに命中、もう一本は道化
師の顔に——かわされた……。

その隙に道化師に近づいて、体制を崩させて、頭を抱えて……私
の意識が一瞬飛んだ。

道化師の顎と額の位置が真横になっている。細い枝のように、い
とも簡単に。

ステッキを握りしめ、道化師は硬直したまま後ろに倒れた。

ぼーっとしていたら、いつの間にかクラインに抱っこされていた。
息が荒い。少し焦げ臭い。綺麗な金色の髪が所々焼けている。勿
体ない。

「逃げるぞ」

うん……声が出ないから、小さく頷いた。

——かたっ。

音がした。

操り人形が動くときの音。木と木がこすれ合う音。かたかたかた、まるで痙攣しているような音。

地面に倒れた道化師の体が小刻みに震えている。

ちりん——鈴の音が二つ重なった。

見なければ良かった。

ホントにホントに、心から見なければ良かった！

顔だけ起こした道化師と目があった！

怖い怖い怖い怖い怖い！

すぐさまクラインが走ってくれたけど、体の震えが止まらない。何かが、こみ上げてくる。とっさに口を手で押さえた。

口の中は苦い味がまんべんなく広がる。

走っても、走っても、どこからか鈴の小さな音が聞こえて、気が狂いそうになる。

「エレン」

クラインが名前を呼んでくれた。

不思議とそれが魔法薬のように、暴れていた私の心を落ち着かせてくれた。

追う影 3

逃げて！ 速く逃げて！

ちりんちりと鈴の音が建物の上から聞こえてくる。真つ昼間なのに、鈴の音は聞こえてくるのに、道化師の姿が見えない。

あんな化け物、二度と見たくない！ 鈴の音がなんでこんなにも怖いによっ！

影も形も見えないのに、さっきから素敵な砂時計が投げられている。目玉がびよーんと飛び出るぞ、コラア！ なんて砂時計があちこちの壁を削ったり、突き刺さったりしてんのよー！

よおーく目をこらして見れば砂時計じゃなくて、おもちゃのコマ。先っぽ同士がくっついて砂時計の形をして、鋭い剣を突きだしたまま、くるくると回転している。これ以上は涙が枯れちゃって目が陥没するぞ！

おもちゃって普通、怪我しないように工夫されているよね！ がしがし壁が怪我しているんだけど、どゆこと？ ねえ、どゆことー！？

クラインはウサギさん状態で跳びまくりだ。

私は胃液がシェイクされまくりで、吐きそ……色々と吐いたら楽になるんだけど、真下のもふもふの毛玉が酷いことになる。我慢しなければ……うぶっ。

知らない路地裏は出口のない迷路のように、ずっと同じ景色が広がっている。現実なのか、夢なのか、わからなくなる。

クラインの手が離さないと、触れたところから体全部に伝わって、

強く抱きしめてくれた。命綱の手に安心する。

走って、走って、突然目の前に緑の塊がいくつか降ってきた。

ゲコツ。

ぶうううううっ！ 胃液を吹きだすところだったぞ！ カエルが空から降ってくるアホなことがあったたまるかー！

いやー！ なんか合唱してるしー！ 案の定、口開いてるよー！ 後ろから鈴の音が、前からカエルの合唱が。ににに、逃げ道、曲がり道っ、どこにもない！ クライイイイイインッ！

いやーっ、気持ち悪いから止まってええええ、いやあだあああ！

やっぱり、口から何かを飛ばしてきた！ クラインは何かをちゃんと見ているようで、器用によけている。

でも、全っ然止まる気ねーなっ！ 逆に速くなっているよ！
べちゃべちゃと潰れた音がする。

壁や地面に、べとついた透明の粘液があちこちに散乱して……え？ ……これって、だ、えき……？ いちばん嫌がらせ度が酷いわー！

ゲコツ。

自信満々に飛ばしてくんじゃねー！

えぐっ……えぐっ……地獄の嫌がらせを無事通過できました。でも、心の傷は半端ないです。ひっぐ……今まで、たくさんのカエルを解剖して来ました。お金がないときは食べてました。近所の猫にもあげました。鶏肉といって、スケベジジイに売りました。その罰でしょうか？ カエル、怖いー！

すんすん……道が真っ直ぐと左に分かれてる。どっちに行こ——ッ！？

ゲコツ。

ひっ——ッ！！

左の曲がり道いっぱい横一列、この先には通せねえぜゲロ口軍団がずらーっと並んで待ち伏せていた！

隙間無く乱れなく、緑の壁が一斉にこっちを見る。

ぎゃああああ、尋常じゃない鳥肌が——！

ゲコツ。

ぱかつて口開いてるよおお、ほああああああ。顎が、がくがく震える。

透明の石つぶてが襲ってくる。べちゃべちゃべちゃ、潰れた音がクラインの背後で、どんどん重なって大きくなっていく。

怖い怖い怖い、緑の塊が怖い。

大粒の雨みたいに壁に潰れて広がって……ぞつとした。壁中、唾液だらけ。

がくんと、クラインの動きが急に止まった。

「何っ！？」

クラインが叫んで足元を見ると……ぎゃあつ、ばつちり唾液踏んでる！ 乾きが速いつ。これって超即効性の強力接着剤！？ 宮廷魔術師並みの技術じゃない！ わーっ、壁も真っ白にかぴかぴに乾いてる——！

頭上から鈴の音が鳴って、ぱいつと乱暴に投げ捨てられた。

ああん、心の命綱が——って、そんなこと言ってる場合じゃない！
クラインは！？

道化師の攻撃をうまくかわしてくれて助かった。よ、よかった！
……でも、裸足になってしまった。怪我したらどうしよう、綺麗な足なのにつ！

そ、それにしても真横の頭が嫌だ。不気味どころじゃない。だって人間じゃない！ 骨が折れる音をならして無理矢理治した！
なに？ 今度はステッキの代わりに赤い手投げこん棒？ 両手でくるくる回すと、あーら不思議。とげとげ極悪こん棒に大変身！
……じゃないわー！

「エレンっ、走れ」

無茶を仰るな！

「クラインはどうするのっ！？」

「こいつを潰すっ」

だから、無茶を仰るな！

「そいつ人間じゃないのよっ！」

「走れっ」

それ以外許さない勢いだ。

どうしよう、どうしよう。またおぼれるアヒル踊りをしてしまう。
腕の中、もふもふの音が踊りを止める。

「エレンっ！」

強く名前を呼ばれて……ううゝゝっ、もっっ！

「先に戻ってるからっ、絶対に！ 絶対に帰ってきてよ！ 約束破ったら、ぶつとばすからー！」

もふもふを抱きしめて走った。

後ろで、めきいって板が割れる音が聞こえて、ちらつと振り返ると足癖悪い女神様の足が道化師の顔面に入っていた。

……は、早く夜の女神様のところに帰ろう。

はあ、はあ……どうしよう、道が分からない。

ボスのいる地区とは反対側だから、何がなにやらさっぱり。ずっと、同じ道を走っている気がする。

汗がべとついて気持ち悪い。

鈴の音も、カエルの鳴き声も聞こえてこない。

「クライン……」

足が止まりそうになる。でも、クラインは走れって言った。

視界が滲んできた。泣いてる暇があれば走れっ。

クラインは大丈夫だから。

返事はしなかったけど、頷いてくれた。ちゃんと帰ってくる。だから、私は走れ。

太陽の位置がさっきに比べ、大分傾いている。路地裏の暗さが濃

くなっている。

青空なのに、なんでここは、こんなにも暗いの？

せめて広い通りに出れば場所が確認できるのに！ 誰もいないの

！？

「はあ……はあ……」

喉が痛い。熱くて痛い。唾液も出ない。たまに出る唾液を飲み込んだら、喉に痛みが走った。

分からなくなってきた。なんで走っているんだろう——走る理由が薄れていく気がする。

きつと頭に酸素が行ってないから、朦朧としてくるんだ。

せめて、誰か居たら……道を知っている人。

笑い声が聞こえた。右の曲がり道から人の笑い声がある。一人じゃない。助かった——その人たちに聞けば、この暗い迷路から出られる。

自然と走りがしつかりしてくる。

もう少しだから、がんばれ。もうちょい、あと数歩——これで助かる……には、ほど遠いみたい。

ぎろりと睨んでくる飢えた猛獣というか、山賊というか、海賊と
いうか。ゴロツキじゃねえかよおおおお！ おわた……。

真っ昼間からお酒片手に、いち、にい、さん、しい……四人で談
笑中。テーブル代わりの酒樽の上には、カードとコイン。家の中で
やれよ、家の中でっ！

あわわわ、ヤ・バ・い。

「よお、迷子かい？」

ニヤリと笑われた。人の良い笑みじゃない。悪意たっぷりのいやらしさ。

「お、お構いなく……」

逃げ……られないっ！ ひーっ、腕捕まれたー！ もふもふ、すまぬうううう。

「離してっ！」

「つれねえこと言っなよ、なあ」

乱暴に振り回しても離してくれない。なんて馬鹿力なの！ そんな、お酒臭い息で話しかけるな！

離せ、はーなーせー！ 思い切り噛みついたら、頬にヤケドをしたような熱い痛みが走った。

ゴロツキから離れたのはいいけど、口が切れた。血の味がする。くそー、女の顔を叩きやがって。

もふもふが興奮して酷く騒いでるって、もふもふーっ！？ あんた顔が狼になってるっ！ つぶらな瞳はどこへやったー？

果敢にもゴロツキの腕を噛んで、やるときはやるのねっ、もふもふ！ 今の今まで、よだれ垂らしてぐーすか寝てたのに、凜々しすぎて別犬だよー！

「はいはい、ねえちゃんはこちら」

「いたっ……！ 触らないでっ！」

別の男に腕を後ろにねじられて、無理矢理立たされた。だーかーらー、息が臭いつてんのー！ とりゃあー！ おもくそ

足を踏みつけてやったぞ、ふふんーだ。

今のうちに……って、自由になったら、今度は別の男が前に立ちふさがる！ うおおおお、男四人は卑怯すぎる！ どうしようっ！

もふもふの悲鳴がした。壁にぶつかって倒れてるっ！

「もふもふっ！」

ダメっ、まだ子犬のもふもふに何かあったら命に関わる。だから、ダメ！ もふもふっ、そんな怖い顔しないでっ！

男の足が後ろに上がる。考える前に体が動いていた。

「やめてっ！」

男の体にしがみついた。離そうと暴れても、離しやるもんかつ。

離れたら、もふもふに酷いことをするから絶対に離さないっ！

もふもふ、騒ぐなっ！ 黙って、隠れるなりしてよー！

頭を強く押さえられ、首の骨が押しつぶされる。強い圧迫に手の力が抜けそう。でも離さない。

突然、その圧迫が消えた。

「女ア！」

男が叫んだ瞬間、空気が変わった。

振り上げる拳はとても大きい。まるで石の塊のような、恐ろしい凶器が襲ってくる。

殺される――。

がしゃん。

突然、男の拳が落ちた。

拳だけじゃない。男自身が、力無く地面に倒れた。ずぶぬれになつて倒れたまま動かない。

雨でも降ったの？ でも空は雲一つないし、それにこの雨……うわっ、お酒臭い！ 強いアルコールだけど、これ果実酒？ ほんのり甘い香りがする。

えっと……何が起こつたの？

倒れた男の指が小刻みに動いている。ちっ、しぶとい。

周囲にはビンの破片が散らばって、私の服にも細かい破片がついている。

誰かが酒瓶を投げた。でも、誰が？

「何しやがるっ！」

男たちの声が荒い。

誰かは私を庇ってくれていた。ううん、守ってくれている。

私の前に立つて、酒瓶を持って……酒瓶を、ちょうど真ん中あたりで割つたみたいでね……注ぎ口を掴んで、鋭く割れた所を武器にしちゃってるってゆーか……殺る気満々！？

黒髪の男の人だけど体つきは、ちよつと頼りない感が……で、でも、後ろ姿だし、もしかしたら相手を黙らせるような顔かもしれないし、鉄物ジジイみたいに顔で瞬殺とか。

「女の子一人にさあ、ひでえことして。最低のクソ野郎には恥つてものを知らねえのかよ」

オウツ、口調は荒つばいけど少し高めの声色だ。瞬殺はきつと女

の子限定。だだだ、大丈夫かな！？

ちりん――。

全ての時間が止まった。

意識も、心臓も、呼吸も、何もかも止まった。

ちりん――。

体が冷えて凍っていく。

嘘だ嘘だ嘘だ。そんなの……嘘だ。

かたかたかた、操り人形の音が近づいている。こちらへ歩いてくる。

鈴の音に黒髪の人も、男たちも声を出さず、音の方へ意識が流れていた。

あんなにも走って燃えていた体が、氷水の中にいるように冷たい。寒い。震えが止まらない。

嫌だ。

だって、約束……。

だってだってだって、クラインはちゃんと約束して――……ッ！

走ってきた道の壁から突然、顔が突き出た。不自然過ぎる真横の頭、陥没した顔が覗くように、じっと私たちを見つめていた。

追う影 4

悲鳴が殺された。

時間が死んだみたいだ。誰も声を出さず、あれを見ている。なんで、ここにいろの？

クラインは？

クラインはどこ？

呼吸が出来なくて、苦しくて。見たくもないのに、取り憑かれたように見てしまう。

泣いていた目が、笑っていた口が全部消えて、顔の真ん中は大きな金槌で強く殴られたみたいに潰れている。顔じゃない顔が、じーっと見つめて……。

もう嫌だ。

ちりん、ちりん——二つの鈴が小さく揺れて、道化師が姿を現した。

ゆっくり……ゆっくり……操り人形の音を出して、一步、また一步と近づく。いっそ、このまま気を失ってしまえばいいのに。そして次に目が覚めたとき夢で良かったって、笑ってほんと胸をなで下ろせるのに！

でも、夢じゃない。

醜い化け物が目の前に立っている。

真横の頭、陥没した顔。ぶかぶかの派手な服は左半分を肩口から大きく切り裂かれていた。肌がむき出しになって、かろうじて残された右半分は肩で支えられている。

むき出しになった肌は人間の肌をしていなかった。雲の白さでもない。

人間じゃない！

鉄と木が混じり合った、つぎはぎの体。体に浮かび上がっている張り巡らされた黒い線は、人間の血管と同じなんだと思う。

なんだろう？ 血管の中に小さな細かい青い光が見える。真ん中の黒い塊から流れているように見えるけど……たぶん、あれが心臓なんだ。

黒い鉄の塊は、青と黄色の光が蛍のように光って消えての繰り返し動いている。なんだか人間の鼓動に似てる。

本物の人形が動いている。

「ひっ！」

私の腕をねじった男が腰を抜かしたまま、化け物が近づく前に後ずさりをした。

化け物は歩きながら、何かを確かめるように男たちの顔を覗き見る。

半分に折れたステッキの先には動物がいるけど、頭がないから何の動物なのか分からない。動物虐待反対っ！ 足下には長い剣がついてるし、いい加減大道芸は止める！ この先、広場に行っても楽しめないじゃない！ どうしてくれるんだ！

化け物は男たちの顔を見るだけで、何かをしようという雰囲気はなかった。

あのへこんだ顔に目があるの？ 完全に潰れているのに。

死んでいた空気が動いたのがわかる。でも、みんな怖くてまともに動けない。

私を守ってくれている男の人も、割れた酒瓶を持ったまま動けずにいる。ごめんなさい、助けようとしてくれたのに巻き込んでしまつて、ごめんなさい。

謝りたいのに、声が出ない。

化け物が声を殺している。

酷い酷い、化け物が——憎い。

いつの間にか口の中に血が広がっていた。知らないうちに唇を噛んでいたみたい。

だって悔しい。化け物が。絶対に許せない。化け物も、クラインも。

あのバカ——ぶつとばすつて言つたでしょー！

むかああああ、あつたまに來たつ！ 戻ってきたら、本気でぶつ飛ばしてやるから！

化け物の膝が屈んだまま、頭だけ起こした。陥没しているのに、ぎよろつと私を見る。

また骨を折つて、頭を元に戻した。にやろつ、一度見ればなんとか慣れるんだ、ばかやろー。鳥肌全開だ、このやろー。

もふもふだつて怒つてゐるんだからー！

「こんつつつ、バカアアッ！」

腹の底から、ありったけ叫んだ。

鋭い風の音が一瞬だけ聞こえて——化け物の体が飛び込むように前に浮いた。

受け身を取らないまま地面に倒れ、背中には……ぎゃーっ！とげとげ極悪こん棒が突き刺さってるー！ なにごとー！？ って、こんなことするのは一人しかいないに決まっているでしょ！ 食われてなかったんだよ！ 何に食われるのかわからないけど、良かったー……顔が滝になる……ぐすつ。

目の前から金色の髪が見える。怪我してなくて良かった。

元気に走って、ジャンプして、化け物に向かってダイブ。って、ちよつと待てええええ！

ドゴンッ。

大きな落石が起こった。

崖もない建物に囲まれた狭い路地裏で、なぜにそんな音が！？ すつこい大きな音だったから、思わず目と耳を塞いじやった。

おそろおそーる目を開けてみると、あわわわっ。地面に穴が空いてる！ もぐらが「こんちは！」って顔出すような穴じゃない。狭い道のと真ん中、化け物が倒れていた場所に大きな陥没穴が出来ている。

女神様を見たゴロツキどもが一斉に逃げ出した。

うん、逃げた気持ちがよく分かる。だって……顔がメドゥーサ様を通り越して、悪魔人の顔になってる。もうね、お前は誰だよっ

てレベルの域を越えているのね。眉間の皺が一本追加されちゃって四本になって、怖ええええええええ！

こめかみの血管がいつぱい浮いちゃっているんだけど、クлайイ
イイイイン！

この陥没穴を作ったのはあんたかい！ まさか、その足癖悪い
 足でやつちやったの！？ 嘘でしょ！

恐ろしい金色の悪魔人様は、真上から落ちてくるステッキを器用に受け取って、ただひたすら化け物を見ている。

おっとろしい顔で……あわわっ。

化け物は、さっきの蹴りをとっさにかわしたのね。あり得ない腕の曲げ方で、背中の極悪こん棒を取った。

……正直、逃げたい、逃げよう、逃げ切れない。うわーん、足が動かないーい！

黒髪の人っ、気にしないで逃げちゃった方がいいよ！ 動けないのは分かるけどね、ここは絶対危ないと思うの！ まじで危ないの！

だって、クライン——私のこと見てない！ 眼中にない部外者扱いされてる！ あれは絶対、化け物以外何も見ちゃいない目だ。

うおおお、ものすごく空気が重苦しい、押しつぶされる。

化け物対悪魔人様、どっちも人間じゃございませーん！ うわーん！

飛び出したのは二人同時。ぶつかった金属音が、建物の真上にも響いたと思う。びりびりと頭を揺さぶられて、耳を押さえた。

クラインの動きが今までと違う。見てて、ワケが分からん。すごく速くなって、すごい力持ちになって、蹴り一つで壁を壊しちゃった……誰が弁償するの？

金属同士がぶつかる音ではなく、金属板を二枚合わせた狭い隙間の中、金属玉がゴムのように反射している。それぐらい化け物とクラインの攻撃には隙間がない。

視界が真っ白に消えた大雨と同じ、金属同士の激しさが周囲の音を消した。

スパツ——極悪こん棒が真っ二つになった。

化け物はバランスを崩したまま、クラインは黒い心臓を狙って剣を突き刺したんだけど。ガツンと剣が弾かれた……なんで？

あれ？ あれれれーっ、鍋の蓋みたいに心臓に鉄の蓋がされてるっ！ ナンダソレー！ きさまーっ、それでも化け物がーって、化け物が……ば、化け物なんだけど、許せーん！

破れた服の中から化け物は長い風船を取り出して、破裂と一緒にカードがクラインを襲った。よけないで、そのまま突っ込んだじゃった。

カードを剣で切り落としたり、顔を守った腕に刺さったり……って、なんでよけないの！？ 今までは、よけてたでしょ！ めんどくさくなつたの！？

今度は大きなスカーフが出てきた。手の中に入れて、もこもことスカーフが盛り上がる。えっと、緑の塊みたいな気持ち悪い系とか出しちゃう？ もう私、緑の塊ダメ。声聞くだけで鳥肌が立つ。

気にせずクラインは剣を振りかざし、黒くて太い鉈にぶつかった……ナタアアアアアア！？ お肉屋さんで使う頑丈なヤツじゃない！ どっから出したー！

ひーっ！ もう、ワケがわかんねえぞ、こんちくしょう！

「おいっ、逃げるぞっ」

肩を掴まれて、黒髪の人が出た。あ……すっかり忘れてた。
い、いましたね、そういえば。

そだね、逃げなきゃ。でも、どこに逃げれば――。

ドガガガ――ッ！

クラインは化け物のお腹に蹴りを入れたまま、建物の壁を突き破って中に入った。

ばらばらと瓦礫が崩れ落ちる。茶色い煙の中は見れないけど、とーっても悲惨な状況になっていると思うの。

ほら、皿が割れる音とか、家具がバキバキ破壊されている音が聞こえるじゃない。椅子が外に放り投げ出されて、今度はぬいぐるみが来た。うさぎさん、くまさん……三角の木馬……ごめん、一瞬思考が停止した。とにかく、いろんな小物がばいばい外へ投げ出されている。

なんだろう……内緒にしていた浮気や、隠していた借金がバレた夫婦喧嘩だね、これ。

「きゃあああああ！」

「いやー、変態よおおお！」

絹を裂く声にはほど遠い、地響きに近い低い声が建物の中から聞こえた。

あれ？　なんか、おかしくない？　声と言葉がちぐはぐというか……。

「いやーっ！　誰かー！」

わらわらわら、巣を煙であぶされ出てきた蜂のように人が逃げて

……なんぞこれ？ 淡いピンクのドレスを着た、厚化粧の髭が出てきた。

えー！？ ここつて、そんなとこ！？ こんなにいっぱい化け物がいちゃうの！？

一目散にピンクのドレス軍団は、ばらばらに逃げていく。怖いと言いながら、内股で走り去っていく姿は強烈だ。非常時にも捨てない女心にあっばれと言っべきか……せめて髭を剃れ。なんで、みんな髭剃らないの？ おかしいでしょ。

さっきまでの恐怖が、さーっとピンクの髭軍団に持って行かれた。淡いピンクだったけど、ピンク野郎がいる確率はたぶんない。系統が違う気がする。

夫婦喧嘩は建物の上まで範囲を広げて、窓がぱりーんと割れた。わわっ、危ない！

上の方でも野太い悲鳴が聞こえてくる。まだピンクの髭が存在してるの？

「今のうちにっ」

黒髪の人が手を掴んで、返事を聞かず引つ張られた。

もふもふもついてきているし……クラインが心配だけど、そのまま残っても巻き込まれるだけで、余計に危ない。

大人しく黒髪の人に引つ張られるまま、ぼこぼこに破壊された場所から急ぎ逃げた。

追う影 5

黒髪の人に引つ張られるまま、ずいぶん走った気がする。夫婦喧嘩の破壊音が聞こえてこないもの。

クライン……弁償のこと考えて破壊してるよね？ 反逆者になったから、開き直って悪魔人になったとかじゃないよね？
ますます首と体の間が危ないじゃない！

警備兵に捕まっても言い訳できないよ……建物壊しちゃって器物損壊、ピンクの髭軍団まで巻き込んで運が悪ければ殺人罪。良くても未遂。化け物から身を守るための正当防衛だけど、過剰防衛というか、暴走防衛というか……ぼこぼこに破壊した責任は化け物と、その半分はクラインにもあるんだからー！

騒ぎが大きくなったら、警備兵も異変に気づいて調べ出すに決まってる。この辺は路地裏の奥だから、まだ気づかれていないけど時間の問題よね。そのうち鉄物ジジイの耳に入って鉄物火山の大噴火あれ以上、黒くなったらどーすんの。炭だよ、炭。
はぁ……なんで、こんなことになったんだろ。

鉄物ジジイはクラインのこと、何とも思っていないんだ。

私の知らないクラインはすごく怖い。プツンして悪魔人になったクラインの怖さは尋常じゃない。

だけど、アガサ君にはすごく優しくかった！ もふもふを抱き上げて、嬉しそうに喜んでいた！ 抱きしめて、助けてくれたときのクラインは私の知っているクラインだった！

どうしてクラインが反逆者扱いされなきゃいけないの？

大人しくしろって言われても、何もしないでただ黙って待つなんて出来るわけがない！

今まで生きた彼の全てが消えてしまいかもしれないのに！

辛いことも、悲しいことも耐え抜いて、守ってきた騎士の手を国王様は簡単に手放すの？

王都を守る剣を国王様は無惨に折ろうとしている。

私はクラインを助けたい。呪いから助けたい。好きだから助けたい。

だけど、臆病な私が小さく囁いてくる。

頭の中がぐるぐるかき混ぜられ、魔法薬が失敗したときと同じ色になる。

「っ……はっ……」

黒髪の方は、どこまで走るんだろう。

こんな奥深くまで……知っている配達地区と違うから、二度と明るい通りに出られなかったらどうしよう——不安になる。

誰一人会うことなく、怖がっているのか。建物から誰も出てこない……ピンクの髭ばかりだったら、それはそれで困る。出来たらピンクの髭以外で！

ああ、ボスの地区はまだマトモだったのね。あっちはボスが人外だもん。

休みなく、ずっと走ってばかり。喉が、からからに乾いた。水が欲しい。

走りすぎて足がふらふらしてる。小さな石ころにも簡単につまづきそう——って！

「うわっ！」

「おっと」

石ころじゃなく、自分の足につまずいちゃった。力入らなくて黒髪の人胸にダイブ。ぎゃあ、恥ずかしいいい！ わざとじゃないんだ！

黒髪の人が心配そうな声で、

「大丈夫かよ？」

「はい、大丈夫……」

あらやだ、黒髪の王子様？ 本当に瞬殺しちゃう顔だったの！？ ひええええ、鉄物ジジイと対極の位置の存在だわ。

鉄物ジジイ、少しは見習ってよ。顔の骨格からすでにアウトだ。鉄物ジジイ終わってるよ。ジジイダメ、ジジイ終了。あとでボコってやるっ。覚えてろよ、鉄物ジジイ……この恨み、はらしてやるぜ、こんちくしょー。

絶対、夜の女王様のお仕置きと、ボスの踊りを堪能してもらおうから！ 後で泣きついてきたって知らねーぞ！

それにしても、すんごく肌が白くてきめ細かいのね、王子様。うん、十八、十九ぐらいかなあ。

中性的な顔立ちなんだけど、ちょいキツめの目はやっぱり男性だね。輪郭は顎から上まですっきりして、余計なお肉さんがない。こ……柔らかみのあるような、ふっくら感がない。男だから丸みがないのは当然か。

うんうん、男のくせにまつげ長いし、髪の毛もさらさらして気持ちよさそうで……あれ？ 心が激しく波うって渦を巻いている。

最近のやろう共は、いったい何を食っているんだ？ 教えてくれよう！

私、女なのに、この見てくれの差はないんじゃないの！ しくしく……。

恥ずかしいので直ぐさま彼から離れる。

身長は私より高いけど、男にしては少し低い。腰細せえな……ウヤマスイ……。

ねえ、私の尻肉をもらってくれね？ 胸は絶壁なのに、尻は尖ってるの。神様、これはあんまりだわ。どうせなら逆が良かった……くすん。

黒髪黒目の王子様は、

「つたくよ、ざけんじゃねえぞ。くそが」

とても口が荒い。空耳？ まさか腹話術とかじゃないよね？ どうか本体でもいたりする？

昨日の夜、寝る前に耳掃除したよ。もしかして掃除足りない？

「あんたさあ、何考えてんのか知らねえけど。ここらへん、王都でも一、二を争うクソの溜まり場だぜ。犯されて、廻されて、売られても、誰も何も言わねえぞ、ここのクソどもはよ」

幻聴かと思っちゃうほど、黒髪王子の言葉は顔に似合わず突き抜けている。見てくれは天使、喋れば悪魔。極端な王子様だな。優しい声色でクソはないと思うの。せめて、く、くく……クズ？ とか？ ……あんまり変わらないか。

「さっきの化け物ども、あんたの知り合いか？」
「違います」

キツパリと否定した。

化け物ども……クライン込みだよな。ごめん、クライン。ここでは赤の他人ってことに！ 大丈夫かな、クライン……他の騎士団長も、あーなっちゃうものなの？ 鉄物ジジイも戦ったら、暴走ジジイに変身するわけ？ えええええ、鉄物はアレでいいよ。暴走は夜だけにしとけ。

そんなことより、クライン。早く正気に戻ってこーい！ 化け物を押していたから、やられることはないと思うけどー、けどー……もうっ、心配なものは心配なの！ バカー！

「おいっ！」

「うはいっ！」

うおっ、耳元の近くに王子様の顔がつ。いつの間に？

「疲れてるみてえだな。何回呼んでも気づきもしねえ」

「あ、すみません……」

色々とありまして、精神的に緑の壁が予想以上の効果で……うおおおお、思い出したら鳥肌が出てきた。緑の塊が、まともに見れないかもしれない。あれはトラウマになる。

「あーあ、思いっきり殴られちゃったな。クチントコ腫れてる。しようがねえ、手当してやるよ」

「大丈夫ですので、お構いなく。自分で手当しますから」

これ以上、黒髪王子に迷惑をかけられられれれっ、あれ！？ おおーいっ、なに手握ってんの！？ んで、なんで問答無用で引っ張っちゃうの！？

はっ！ そそそ、そういえば危ない酒瓶持ってたし、黒髪王子様の本性はゴロ……。

ぎゃあああああつ、見てくれに騙されたー！ 走りすぎて力が出ないーい！ 振りほどけなーい！

「もう少し先に店があるからよ」

店？ なんの？ こころへんの店ってさあ、絶対にヤバさ百パーセントだよな？ いやあああああ！

「なに棒っ切れみたいに立ってんだよ。これだから女はめんどくせえな。さっさと行くぞ、クソオヤジも待ってるしよ。あのクソったれども、クソオヤジの酒を台無しにしちまったじゃねえか。どうしてくれやがるクソ共め」

引ーきーずーらーれーるー。

いーやーだー。

うーらーれーるー。

お祖母ちゃん、売られちゃうよー！

もふもふ、見てないで助けてー。

クライイイイイン！

黒髪王子の力に勝てず、もふもふは助けられず……ああつ、地獄の入り口が目の前に——って。

「魔法薬材料屋ハナモゲ……？」

ここの人、鼻がもげたりするの？

「お店って、ここ？」

「ああ。その椅子に座って、これでも飲んで待つてな」

黒髪王子はかび臭い店の奥に行ってしまった。ぽつーん……しよ
うがない、ありがたく水を頂きましょう。

店の前の椅子に座って水を飲む。い……生きてるってすばらしい
……唇にしてみる……でも生き返るわ！。

しかし、これって憩いの場そのものだよねえ。おお、専用ベンチ
まである。

この陰気くさい、かび臭い狭い隙間に建てられた暗い雰囲気のお店。
うん、ボスの店そのままだ。

ねえ、ボスって分裂できるの？ 一人、二人は余裕で分裂できち
やったりして、まっさかね。

「なんじゃい、客か？」

うおおおおお、酒くせー！

後ろから酒の塊そのものな臭いに、鼻がもげる！ ああ、だから
ハナモゲなのか——って違う！

「だ、誰！？ つ……あーっ！」

思わず指さした。

だってだってだってっ！ その白髪交じりの三つ編み！ やる気
のない半分目と赤っ鼻とチョビ髭っ！ 加齢臭を越えた強烈な酒臭
っ！

なななな、何で酔っぱらいが、ここにいる！？

「なんだ、パナツツエの板切れか。つまらんのう」
「誰が板切れかつ、誰が！」

板切れで悪かったなっ！ 垂れないからいいじゃん、ちくしょー！
太陽がまだ顔を出している時間から、とつくに出来上がってしまった酔っぱらい。もうね、足が完璧にイってるのよね、あっちこっちと危なっかしい。

空の酒瓶片手にベンチに座って、ゲップするなああああ！ う
があああ、ハナモゲるっ、ハナモゲるっ！
ももも、もしかして、

「この店、リンさんの……？」
「そうじゃ。ワシの、ワシだけの、誰でもないワシ専用の店じゃ。
にしし、いいぞう。なんせ、憎たらしい甘ったるいアップルパイ
がない。それだけで、こっちは天国地獄じゃよ」

どっちだよ、この酔っぱらいオヤジ。

「パナツツエめ……ワシよりもアップルパイを選びよった……ワシ
は、ワシは……ミートパイが食いたかったんじゃあ……うつつ」

あーあ、泣き出した。めんどくさいなあ、この元旦那。
突然ボスから「離婚したよ」って爪を切りながら言うから、冗談
だと思って最初はスルーしてたのよね。サボるボスの代わりに、こ
っちは忙しかったし。本当に離婚したと気づいたのは、店中に染み
ついていた酒の臭いがすっかり消えた頃。

ホント酷かった。あの臭いのおかげで、どれだけ魔法薬の調合に
苦勞させられたか。何度、断酒禁酒を進めても首を縦に振ってくれ
ず、せめて飲む量を減らせと言えば、

「板切れが、板切れと呼べなくなるのと同じようなもんじゃ」

この酔っぱらいに天罰が落ちようと、私は絶対に助けねえと心に固く誓ったものだ。

まさか、あんなくだらない理由で離婚していたなんて……おっさん、ボスより年上でしょ。そこは我慢したら良かったのに。

主食が酒だから、体からにじみ出る酒の臭いが半端なくクサイ。汗の臭いも酒。人間の体の半分は水分だけど、酔っぱらいの場合は水分じゃなく酒分。この人も人間じゃないね。

見た目はボスと対極で不健康そのもの。顔は常時出来上がったまま。素面になった酔っぱらいなんて見たことない。

なんでボスはこのな酔っぱらいと結婚したんだろう。魔物の考えることはわかんないな！

離婚後、姿を見なかったから、きっと王都から出て行ったんだろうな！って思っていたのに、まさかの二号店を出していたとは……。これ、二号店でしょ。名前が違っただけで全部同じだもん。

「クソオヤジ、そこにいたのかよ。邪魔だ、地面にでも寝てやがれ」

黒髪王子、遠慮も容赦もないね。本当に蹴り落としちゃった。

ところでね、黒髪王子の言うクソオヤジってね、まさかね。そんな馬鹿なね。そげな、あり得ないこと起こっちゃうものなの？ いくら生命の神秘とはいえさあ、これって生命の珍秘じゃない？ 馬鹿な馬鹿な馬鹿な。

ボス+酔っぱらい＝黒髪王子。

いやいやいやいやいやいやいやいや。

誰が信じてたまるか、そんな神様の大奇跡。

でも、口の悪さは……いやいやいやいやいや……しかし……
いやいやいやいやいやいや。

「おい、ここに座んなよ。手当してやつからよ」

座るも何も、むりやり座らせてますよ、王子様。ああ、この強引なところがボスに似て……いやいやいやいやいや。

「なんじゃ、板切れ怪我したのか？　ほうほう、板切れでも襲われるもんなんじゃああああががががっ！」

ちょうど良い位置にチヨビ髭があったから、思い切り引っ張ってやった。

「板切れ、じつとしてろ。手当できねえだろ」

「板切れじゃないです。エレンといいます。今度、その言葉いいやがったら、いくらその酔っぱらいの息子でも遠慮無く目をつぶしますからね」

私はマジだからな。顔がいいからって、図に乗るんじゃないぞ。
黒髪王子はちよつと引きつつて領いてくれた。

「これだから、パナツツエの板切れは短気でいかん」

問答無用、消毒液で目を消毒してやる。わはは、悶えるがいい。

「おいっ、い——……」

酔っぱらいから、黒髪王子に狙いを定める。

「いいから、それ寄越せよ。それから俺はクソオヤジの息子でもねえからな。この店の従業員。見習いだよ」

消毒液をぶんどられた。

なんだ、従業員か。良かった。神様の奇跡で、そうそう身近に起こるもんじゃないしね。

「見習いつて、魔法薬ざいつつう！」

傷口が染みるゝつ。ちよつと手当が乱暴だぞ。自分でやった方がマシだった。

最低限の薬は常備してるもん……つて、勝手に軟膏をぐりぐり塗られて終了された。

「のう、パナツツエは元気にしてるのか？」

元気そのもの太陽の人つて、誰よりも知ってるくせに。体調不良の言葉と縁がなく、風邪も引かない。

……あの肉厚のせいかな……。

「パナツツエは寂しそうにしてなかったか？ たえば、ワシがいなくて食がなくなつたとか、な？ どうなんじゃ？」

「余裕でアップルパイ三皿以上食べてたし、寂しそうな感じはしなかったなあ」

「アップル……また、アップルパイ……ワシはアップルパイ以下なのか……うつつ……あれほどミートパイと言つたのに……」

ボス、離婚して正解だと思う。

「うつぜえ」。泣くなら向こうで泣いてきやがれ」

黒髪王子様、代弁ありがとうございます。

「あんた、クソオヤジの嫁さんとの魔法薬剤師か？　なんだ、俺が手当する必要はなかったんだな」

「そんなことないですよ。手当、ありがとうございます」

見習いだから手当が少し……どころじゃないけどねっ！　雑だったのは仕方がない。気持ちの問題よ、気持ちの問題。

ゴロツキから助けてくれたのは、本当にすごく感謝してる。

「あのお礼も、まだ言ってますでしたね。えっと……あの名前を聞いても？」

「ああ、俺はムメイ。気にすんじゃないよ、あいつらはクソだからな。クソの一人が消えても、ここらへんのクソは変わらねえよ」

なにかしら、このデジャブ。昨日、誰かさんも同じようなこと言ってたかった？

「あの時、ムメイさんが助けてくれたから、これぐらいの傷で済んだんです。本当にありがとうございます」

頭を下げたら、ムメイさんは照れくさそうに手を振った。見た目はいいんだよね、見た目は。

「クソオヤジ、酒はクソ退治に使っちゃったからねえぞ。今日は大人しく、クソして寝ろ」

「なんじゃとー！　ワシの命の水がー！」

見た目以外が非常に惜しい！

あつ、そうだ。ここも魔法薬材料専門店ならピンク野郎の情報があるかも。可能性はものすごく低そうだけど、聞いてみる価値はあるよね。

「ねえ、リンさん」

「なんじゃい、棒切れ」

くらえ、必殺消毒薬。

「板切れとは言つとらんじゃろっ！ やめんかつ！」

私は誓ったんだ。酔っぱらいには情けは必要無しと。

「あのね、リンさん——え？」

目の前に突然、陥没した白い板が視界全部を遮った。

板はゴキンと音を鳴らして、ドアノブを回すようにゆっくりと縦に回る。

えっと、声が出ない。

卵と同じ形をした丸い板。大きいヒビと細かなヒビが板中に広がって、ぐにやりと曲がった空色は泣いていた目を縁取ったもの。

笑っていた口は大きく波うつていた。

はあ、はあ、はあ、はあ……。

指先の神経まで集中して、刺激しないように立ち上がる。もう、鈴の音はしないんだ。

音もなく、テーブルの上に降ってきた化け物は片腕を無くして、
ゆっくりと陥没した顔が私からムメイさんに動いた。

空下の閃光 1

ごくん――。

目の前に化け物がいる。

建物の上から飛び降りたんだ。周囲に人影はなかったから。

リンさんとムメイさんは、ぽかんと口を開けている。間抜けっぽい変な顔。だけど笑えない。私も同じ顔をしてるってわかるから。嫌でも変な顔になる。

怖かった鈴は無くなっていた。

陥没した顔は、テーブルの上で叩いた卵にそっくり。髪の毛はあってもいいのにね、すっきりし過ぎてる。変だなんて思うけど、顔が潰れているから髪の毛があったら……逆に怖いから、今で十分です。

今も十分すぎるほど怖いのよ！ テーブルの上にしゃがんだまま、曲がりくねった目で真っ直ぐ見つめてくるし、やーめーてー！。

立ち上がる私を不思議そうに、首から小さく軋む音をならして顔を傾げた。犬や猫がよくやる仕草だけどね、可愛さは圧倒的にわんことにゃんこ！ 化け物に可愛さを求めるのは無理無理無理、絶対に無理！ 顔が割れた卵だもん！ 本物の卵だったら、絶対に黄身が見えているよ！

割れた卵が、ゆっくりムメイさんへ動く。

三步、後ろに下がれた。それ以上は足が、がくがく震えて動かない。根性で地面には座らねえぞ！ 座ったら絶対に立てないから！ 化け物の上着は全部はぎ取られていた。鉄と木が混じった上半身。

大事な内臓部分は鉄で出来ていて、ぼこんと大きくへこんでいる。

思いつき蹴っていたもんね。

クライン……どこで迷子になっているのかな？ 生きてる、よね？ うん、絶対に生きてる！ もうっ、あのバカバカバカバカ、おたんこなすっ。

大きなへこみ以外に削られたような斬り傷と、細かい刃こぼれみたいな傷がたくさんある。だけど、血が一滴も流れていない。どうして？

心臓の光は動いて、浮き出た黒い血管には青い光が流れている。青い光が傷口から流れ出てもいいのに出てこない。代わりに傷口からパチパチと、油がはねる音が聞こえた。

左肩から同じ音が聞こえる。こっちは現れたときからずっと、小さな火花が肩口で散っている。

青い血液が火花？ なんだそれ？ 意味が分からん。

引きちぎられた肩口から、折れた骨が顔を出している。黒い血管がぶらぶら、だらしなく飛び出して……もし、本当に人間だったら……うわああああ、想像しちゃったー！ 私のどあほー！ 頭から追いつ出したいつ！ けど、手が動かない！ 頭殴りたーい！ 手が動かねー！

火花が顔の近くではねているのに、化け物は気にせずスルー。

人形だから痛みを感じないんだ。体がぼろぼろになっても痛みを感じないんじゃない、しつこく襲ってくるよね。いつまで追いかける気なの？ こっちは、もう限界突破してんのよ。

ムメイさんの顔が引きつっちゃってる。それでも、化け物を真っ向から睨んでいるのはすごい。綺麗な顔して怖いもの知らず……て

いつか、無茶無謀。ああ、心配だわ。

「なんじゃ、こやつ？」

「見てわかんねえのかよ、クソオヤジ」

そうだそうだ。見ても何者かはわかんないけど、でも見たら何かはわかるでしょ。

酔っぱらいは眠たそうな目で、チョビ髭を撫でる。こんなときも夢心地でうらやましい！ 半分、まだ夢の中にいるんじゃないの。

なに？ 急に化け物の腕が上に——っ！ 鉈がムメイさんを狙ってる！

逃げて！ 叫びたいのに声が出ない！ 逃げてっ、逃げてっ！ 動いて、ムメイさん！

「逃げて！」

ムメイさんの金縛りがとけた。だけど、間に合わない——っ。

「ムメイさんっ！」

「下がっつれ」

投げられた酒瓶が鉈にぶつかって粉々になる。化け物の動きが鈍くなった。

ムメイさんが後ろに下がるよりも、化け物がムメイさんを襲うよりも、リンさんはもっと速かった。

「ほいさっ」

ふらふらしていた危ない足取りが嘘みたいに力強い。

大岩と大岩がぶつかつたような、ものすごい衝撃に化け物が吹っ飛んだ。私の目も飛んだぞ。

ただの拳でやっちゃったの!? 両拳を突きだただけで、あんな音が出ちゃうものなの!? その前に、リンさんがやったの!? いやいやいやいやいや! うそうそうそつ! ただの酔っぱらいオヤジじゃない!? アップルパイで離婚した人だよ!

「ふむ、幽霊の類か。しかし、幽霊は実態がないはずじゃが……なんとまあ、タフじゃな。この幽霊は」

ギギギッ、って体中が軋んでいるのに、まだ動くんた。細かい木の破片が地面に落ちてても、陥没した顔はリンさんを見ている。

「おい、クソオヤジっ!」

リンさんは振り向かない。
猫背の背筋を真っ直ぐ伸ばし、後ろに腕を組んで、両足をそろえる。

「ムメイは、まな板の傍にいておれ」
「誰がまな板かー!」

こんな時も、それを言うか! 一度も、この酔っぱらいに名前を呼ばれたことないぞ!

「ばかやろうつ! その化け物はめちゃくちやアホみてえに強いんだぞ! あと一匹、化け物がいたしよ!」

ホントにね、どこまで迷子になっているんだろうね!

「なに、すでに死に体じゃ。なんとかなるじゃろ」

「そんな余裕、あのクソ化け物には通じないってば！ 散々、ボロクソぼっこぼこにやられても、しつこく追ってくるのよ！」

ああ、もう！ ムメイさんの癖うつっちゃったじゃない！

リンさん、人の話を聞えええ！ 無視された……あのクソオヤジめ……。

本気で化け物と戦うの？

ゆつくりと右腕を前に伸ばしているんだけど。肘を少し曲げてね、手のひらを上にして構えなんかとっちゃって——ちよつと、ちよつと、ちよつと！ 危ないから、本当に危ないのよ！

ムメイさんつ、止めて——って、うわあああ！ 化け物がリンさんに——！

左腕を引きちぎられて、ぼろぼろの体で走れるものなの！？ — 応、弱っているけど、相手は化け物だもの！ 変な大道芸を使ってくる危険なヤツで、悪魔人が手こずっているのよ！ 酔っぱらいのリンさんじゃ、危ないっつーの！ 分かっているのつ、このクソオヤジ——！

わーっ、もうダメだー！

リンさんの頭上に鉈が——これ以上見ていられない！

うわーん、ボスになんて言えばいいの——！

「危ねえ！」

「ぐふっ！」

力一杯、後ろ首を締め付け……引っ張られた。

また、お祖母ちゃんの後ろ姿が見えちゃったよ。何をすんじゃーい——って、今……光るものが降ってきた。もーちよいで、鼻をかすめるところで……っ！ あばばばばっ！ ぴょーんと、ムメイさんにしがみついた。

鉈が降ってきた！ ざっくり深々と地面に刺さってる！ ななな、なんでー！？

うそ……リンさんが、化け物をぼこぼこにしてる。

ごしごしごし、目を擦ったら夢だったとか？ ……夢じゃない。化け物の攻撃をリンさんは器用に手と足で受け流してる。んで、隙を見てぼこってる。

ま・じ・で？

誰、この人。

さっき地面で泣いて拗ねていた酔っぱらいと同一人物？ んな、バカな。

化け物の動きがぎこちない。チャンス！ と思ったら、リンさんの体が急にふらついた。足が危なっかしく、あっちふらふら。こっちふらふら。

……クソオヤジ、酔ってねえだろうな、オイ。

なに、そのお酒が飲みたいよーと言わんばかりの手つきは。エア杯のつもり？ この期に及んで酒か、酔っぱらいオヤジ！

「ワシはのう、酔えば酔うほど強くなるんじや。うひゃひゃひゃひゃ。さあ、遠慮せんとこんか。足あり幽霊」

酔えば酔うほど号泣の間違いなんじゃ……。

ぐるんと、卵の顔が回った。大丈夫、もう平気。あれは顔じゃない、アレハ卵。鳥さんの尻から出てくる白いピーだから！

化け物の拳が大きな振り子になっている。ふらふらの足で、よく当たらないもんだ。当たりそうで当たらない。頼もしいのに、とーつてもイライラする！ 家に帰ったら、絶対に確実に生える育毛剤を作ってやるぞ！

酔っぱらいオヤジはくねくね踊って、のらりくらりと化け物から逃げている。

戦う気がないように見せかけて、ここぞって時に懐に入り急所を殴ったり、蹴ったり。生身の人間……男が悶絶しちゃうところも容赦しないのね。

化け物の足が上がる一瞬の隙に、かささと股下をくぐる。あんたはゴキブリか。

地面に伏せたまま器用に化け物の背中を蹴り、素早く足首を掴んで逆さまにした。

完全に遊んでる……すごい。

「ほい、ほいほい。うりゃ！」

へこんだお腹を力強く蹴り飛ばした。

「うひゃひゃ！ どうじゃ、先祖代々伝わる武術の味は？ 結構うまいじゃろ、ん？ うひゃひゃひゃひゃ！」

「リンさーんっ、ただの酔っぱらいクソオヤジじゃなかったんですね！ 初めて酔っぱらう以外のこと出来るクソオヤジって知りませんでした！ すごいー！」

「やるじゃねえか、クソオヤジ！　どうしようもねえクソオヤジじゃなかったんだな、クソオヤジ！」

「クソクソと、褒めているのか、貶されているのか、さっぱりわからん……」

褒めているんだよ、酔っぱらい様！　今日ほど頼もしいと思ったことないもん。普段がダメ過ぎて頼もしいどころか、なんで生きるの？　って、白い目で見てたのに。

これで化け物は動かない——わけないか……んんっもうおおおおお！　いい加減にしろー！

「なんじゃい、こやつ？　幽霊ではなく化け物か？」

幽霊も化け物も似たようなもんじゃないの？

リンさんは、さっきので立てないと思っていたんだ。

あの光っている黒い心臓を壊さないと、たぶん止まらない。

「リンさんっ、胸の黒い塊をねらっ……」

化け物がリンさんに襲いかかった。まだ言い終わってない！

ふらふらした足で、大きく振り下ろす手を簡単にかわす。

ごきん——骨が折れた。

リンさんのじゃない。

化け物の肘が折れてる！　雑巾を絞るように逆に向いて、リンさんの胸ぐらを掴んだ！　やばい！

「リンさんっ！」

「クソオヤジ！」

がつちり服を掴んでる。助けに行った方がいい？ 行かない方がいい？ どーしょー！ おぼれるアヒルになるよー。

リンさんの体がふわつと浮いた。体を丸め、化け物の肩を蹴る。掴んだ手は離れなかったけど、服が破れたおかげで助かった……ふああああ、魂が抜けそう。

化け物が地面に倒れた。リンさん、今のうちに逃げて！ なんて、化け物の腕にしがみついちやうのよー、このクソオヤジー！

「クソオヤジのヤロー。折れた腕を、さらにへし折る気だな」

マジでーすかーい。

ぐるぐる絞った雑巾つてさあ、絞りすぎると破れちゃうよね……

骨がつきだしちゃう？ リンさんつては怖ええええ！

割れた卵の顔を膝裏で押さえつけ、暴れる化け物のお腹を蹴って絶対に起こさない。顔を押さえられただけでも、窒息しちゃうよ。普通の人はね！

うわー、雑巾の肘が逆の方へ曲がりそう。

ボキン――。

骨が折れた。リンさんが折ったの？ ……違うつ、化け物の手首が回ってる！

手のひらをリンさんに向けて、指が曲がった。リンさんは素早く離れた。

「こやつ……本物の化け物かつ！」

だから、そうなんだってば！ って、りり、リンさんっ！ 化け物が思いっきり蹴っ飛ばした！

リンさん、リンさん！ どうしよ、どうしよ！ 駆け寄りた
いけど、化け物が――……爪が長く伸びて、五本の剣になってる！
なんだってええええ！ うわああああ、こっちに来たー！

「逃げるぞつ、まな板！」

「だから、まな板じゃねえとつ！」

あああああ、足が動かない！

「このクソ化け物っ！」

ムメイさんは鉈を拾い、化け物に投げた。ひよい、って軽くよけ
られた。ぎゃああああ！ もうダメー！

私を守るよう、ムメイさんに抱かれたまま、五本の剣が目の前で
振り下ろされる。

黒い布が化け物の動きを止めてくれた。布が腕を縛り、体全体に
巻きついてる。布はどこから……リンさん！ リンさんが止めてく
れたんだ！ 無事だああああ、よかったあ……。――。

上着がだらしなく広がってる。腰帯を使って、間髪化け物を止
めてくれたんだ。ありがとう、リンさん……ぐすつ。

ギギギツ、間近で軋む体が怖くて怖くて、顔が滝になる。

前へ、前へ、化け物が少しずつ動く。

リンさんも少しずつ、引きずられるように前に動く。
ぼろぼろの壊れかけた体のどこに、こんな力があるの？

リンさんが駆け寄ってくる姿が見えた。あれ？ 腰帯は？ 鉈を
刺して止めている。

きゃー、びりびり破れてるよー！ ちょっとちょっとー！ 化け

物が動いて――！

「はいやつ！」

リンさんが飛んだ。

勢いよく体を回転させて化け物の顔を蹴り――寸前で止められた――！ 化け物は腕の腰帯を引きちぎって、リンさんの足を掴んだまま大きく振り上げた。

そのまま背中から地面に叩きつけるんだ。そんなことをしたら背骨が折れちゃう！ やめて！

リンさんはとっさに化け物の膝に手を置いて、空いている足で腕を蹴った。黒い靴がすぽんと抜ける。

どうにか逃れたけど、もうね、もうね。ムメイさんに、しがみつかないと立てない。踏ん張る力もない。地面にだけは座りたくない！

私たちから化け物を離すために、リンさんは戦っている。

顔は苦しそうに地面を転がって、化け物の足をがしがし蹴る。化け物はバランスを崩した姿勢で、五本の剣がリンさんを襲う。

リンさんはくると回り、杯型の拳で思いつきり黒い心臓を殴った！

光が消えた。

「はあ……はあ……」

リンさんの荒い息づかいが聞こえる。

化け物は立ったまま、動かない。

ムメイさんの服を強く掴む。光が消えているのに、止まっている

のに、大丈夫って安心できない。
分らない。

怖い。

怖い、怖い、油断できない。

止まっているけど、もしかしたら、ただ気を失って……また起きるんじゃないかって――！

「リンさんっ！」

もぎ取られた肩傷から、大きな火花が弾いた。黒い心臓が動いた。五本の剣が、リンさんに振り下ろされる！

リンさんはすぐ後ろに飛んだ。

だけど肩から腰までざっくり、赤い血が出てる！ かわせなかったんだ！ どうしよう、どうしよう！ リンさん、もう限界みたいだ！ 背中を丸めて、膝が震えてる！ 助けなきゃ！

「クソオヤジっ！」

ムメイさんが走り出した。化け物も走り出した。足取りはさつきより遅いけど、ほんとにどうしよう！ つか、来るな――！

「こんちくしょー！」

みなぎる力の限り、持っていた消毒液を投げつけた。

卵顔に命中。当然、ダメージゼロ。中身が全部化け物の体にかかっただけ。こんちくしょー！

化け物は止まらない。ムメイさんも止まらない。リンさんは動けない。

腕が大きく弓なりに反り返り、鋭い剣がリンさんを襲う――瞬間、

化け物の体から荒れた炎が吹き出た。

ギリギリ、ムメイさんが飛び込んで助かった。良かった……。

炎が体に巻き付いた腰帯を吸収している。ものすごい勢いで、炎が化け物を飲み込んでいる。こっちまで熱い。

これでおしまい…… ってことには、ならないよね。こいつ、タフ過ぎるもん！

「おいっ、クソオヤジ！ どうした！？ しつかりしやがれ！」

ムメイさんが焦ってる。リンさんっ、倒れたまま動こうとしない！ まさか、さっきの怪我で動けないの！？

駆け寄ったら、うわっ！すごい汗まみれ。顔が死人になってる。青白い唇や硬直した指が震えて、うつろな目で空を見ている。

ヤ・バ・イ。これは危険。

「……さ……酒が切れた……酒、酒酒酒……」

殴っていいか、てめえ。

体の半分が酒分で出来た酔っぱらいは、これだから！ 酒なんてないわよ！ 胸はどうなの、胸は！？

……深くない。皮が切れたぐらいで、全然イケル。心配させやがって、この酔っぱらいクソオヤジ！

とりあえずリンさんは大丈夫。問題は炎を抱えたまま、ぐるぐると回っている化け物だ。周囲が歪んで見える。

痛みは感じなくても、熱さは感じているみたい。潰れた音をした声が、炎に負けず叫んでいるもの。

「逃げるぞっ」

「酒……さけえ……」

二人でリンさんを抱えて逃げた。これで何度目なのよ！ もおおお！ 牛になるぞー、もおおおおお！

空下の閃光 2

持っていた消毒液で助かった。アルコールを含んでいたから引火したんだ。

突然、火が出るからびっくりしたけど、時間稼ぎにはなる。あれで止まってくれたら万々歳だけどなあ。それにしても……。

「重い……！」

酔っぱらい重い！ 鼻風船ふくらましてんじやねえよ！

ムメイさんと私で酔っぱらいの両脇を抱えて逃走中。鼻風船潰してもリンさん全然、起きない。直ぐさま新しい鼻風船が出てきてねー、こりゃダメだ。

「化け物は来てねえみてえだな」

今はね。でも安心しちゃダメ、油断大敵。上から飛び降りて急に現れたりするから、いつぽつと出てくるのかわからない。何回、こっちの心臓を止めたと思っているの、あの化け物。出てくるなら、前もって宣言しろー！ ねえ、もふもふ……って！

「あああああああああっ！」

白い毛玉の姿がどこにもないっ！ うそっ！

「大声で叫ぶなっ！ 化け物に見つかっ……」

「もふもふがない！」

「化け物どころじゃないよ！ もふもふが、もふもふがないのよ！」

[illegible]

「ムメイさん、戻ろう！」

「はあ！？なに言ってるっ！」

「だって、もふもふがないのよ！ もふもふを探さなきゃ、化け物に殺されたら——」

犬の聲が聞こえた。

後ろからだ。すごく興奮して、吠えてる。

もふもふ！ …… 違う、もふもふじゃない。毛玉が灰色。もふもふ……ごめん。アップルパイ食べさせるから出てきてよう。

「おい……」

犬を見たムメイさんの顔が引きつっている。

十字路の真ん中で、犬が激しく吠えているね。私たちが走ってき
た道を見て総毛立っている。

ものすんごく嫌な予感。

ムメイさん、何も言わなくていい。言いたいことは目で分かるから。

逃げるぞ！——って、ちよつと待った！

「もふもふがつ！」

「犬は後で探せつ。死んだら、それどころじゃねえ！ こっちはク

ソオヤジが重いんだ。クソつたれ、どっかにゴミ捨て場ねえかよ！」

それは少しリンさんが可哀想だぞ。

悩んでる間に来た道が、夕日のように赤くなって犬が逃げ出した。

「死にてえのかっ！」

ごめん、もふもふ！ 絶対、探すから！

逃げたのはいいけど、どこに逃げればいいの？ 逃げても、逃げても、しつこく追いかけてくる。

ぼろぼろの体が燃えているのに、そうまでして裏の人間を殺したいんだ。

ムメイさんとリンさんは関係ない。化け物が狙っているのは、私――。

クラインは捕まったの？ …… 捕まってなんかない。今頃、必死で化け物を探しているから大丈夫。

クラインに会いたい。

もふもふがないよ、クライン。

ごめん、ごめんね、もふもふ。

ごめんなさい。

はあ、はあ…… 走っても、後ろから夕日色が迫ってくる。

このままじゃ追いつかれる。

「ムメイさんっ、リンさんをお願い！」

「ふざけんなよ、洗濯板っ！」

いいかげん板から離れてくれね？ こんな時じゃなかったら、頭

かち割ってるぞ。

「化け物が狙ってるのは私だからっ。ムメイさんはリンさん連れ
て、どこかに隠れて！」

「冗談じゃねえ！ 化け物は俺を殺そうとしやがったんだぞ！ ク
ソオヤジも殺されかけたんだ！」

それはそうだけど……でも……気のせいだったのかな？

「クソッ、しつけえぜ。おいっ、クソオヤジ！ 起きろっ、いつま
で寝てやがる！」

耳元で叫んでもダメ。この様子だと、明日まで絶対起きないね。
やっぱい。足がふらついてきた。人を抱えて走っているから、余
計キツイ。呼吸も苦しい。

「こっちだっ」

ムメイさんが細道に引っ張った。

青色の三角旗が見える。旗にはドレスを着たピンク色の豚がウイ
ンクして……ねえ、この辺りは、そんなんばつかしかないの？

ムメイさんは旗の真下に止まった。うん、ドアの側に大きな樽が
あるね。まさかね。ぱかって蓋を開けちゃったけど、いや、そん
なまっさかと思うけどね……マジデ？

「つつこむぞ」

マジか！ ちょおおおい、ああああ、頭から突っ込んだじゃった。
蓋をして、重りを乗せて——って。

「ちょっと！ それじゃ、リンさんが出られないじゃない！」
「いい！」

いい、じゃねー！ めちゃくちゃだー！

「後で出してくれるっ。早く逃げるぞ！」
「出してくれるって誰ぐわああああ！」

思いつきり腕を引つ張られた。肩が外れたら、どーしてくれるの
！ 人の話も聞いてよー！

ばちっ……ばちっ……。

油がはねる音が聞こえる。

顔が蒼白になっちゃうから、困っちゃうわー……って、ひいひい
い！ 壁から黒い手が生えてる！

「ムムム、ムメイー！ きき、きたああああ！」

もう呼び捨てでいいよね！？ いいよね！

ムメイに手を掴まれたまま、走る。このあたりはムメイの庭なん
だから、大丈夫だね！ ちょちよいのちよいで、秘密の抜け道と
かいっぱい知っているもんね。右行つて、左行つて、交互に曲がり
道ばかり走っているんだから、任せても――。

「あつ、クソっ！ 行き止まった！」

「ふっざけんなー！ 知つてて走つてたんじゃないの！ おまえも
アホの子かーい！」

あばばばっ！ ドアもねえ、窓もねえ、逃げ道ねえ。ちょちよち

よちよつ、言葉にもならんわー！

突然、股下から黒い頭が生えた——って。

「どエロ！」

みなぎる力の拳全開だ、ばかやろー！

よりもよつて、股下から「こんにちは！」たあ、いい度胸じゃないの。年下だからって許せると思ってるのか、ああん？

乙女の股下をなんだと思ってるやがるんだ、このエロ王子！

「なんで殴る！」

「どエロ行為したからじゃない！」

「ばかやろうつ！ あれ見ろ、あれ！」

指が示すのは、ハ・シ・ゴ。

建物にハシゴがくつついてる！ 神様、ありがとー！ これで道が開けるー！

「で、どうやって、ハシゴに登るの？」

人間一人の高さは軽く越えてるところに、ハシゴがあるのよ。引張れば、ハシゴが下りる仕組みになっているけど、まず届かない。一瞬で天国に登り、地獄に堕ちるのも一瞬でした。うわーん！
って。

「怒エロ！」

みなぎる力の拳フルパワーだぞ、ゴルァ！

股下から、また黒い頭が生えた。いい加減にしろよ、てめえ！

「届かねえから、肩車でハシゴを下ろそうとただけじゃねえか！」
「そんなこと、前もって言わんかい！ 急に股下から頭生えたら、殴るだけじゃすまねえぞ！」

こいつの頭も外科手術が必要だ。あーもー。どいつもこいつも。

「時間がねえんだよ！」

「分かってる！ でも、ムメイは大丈夫なの？ ペしゃって潰れたりしないよね？」

「潰れるほどデブなのかよ、寸胴鍋」

「これか、この口かつ。いっそ針と糸で縫ってやろうか、ああん？」

口の両端をつねる指にも、みなぎる力が入るってもんだ。

「やめほつ！ 早く乗れ！」

しゃがみこむムメイの肩に跨って乗っかる。準備オツケー。

「うおおおおっしゃー！」

威勢のいいかけ声は嫌いじゃないよ。

でもね、乙女心はフクザツなの。

私、そんなに重い？ クラインは軽々と土嚢扱いしてくれたよ。

よたよたと安定感のない肩車。こりゃ、早くハシゴを下ろさないと、ムメイが潰れる。二度目のチャンスはない。

「もうちよい、右！ 行き過ぎつ、左に寄って！ 誰が、後ろに寄れと言った！」

しつかりせんかい！

「よしっ、つかんどわああああ！」

ハシゴもろとも潰れた。

痛い……ム、ムメイは、大丈夫なの！？

「ムメイ！ ちょっと、ムメイってば！ 鼻血垂らして、気絶してる場合じゃないのよ！」

べしべしべしべし。みなぎる力の張り手で、起きろー！

「てめえが気絶させたんだろぅがよ！」

「失敬な！ 起こしてやったじゃない！」

ばちっ――。

小さな一瞬の音に、ビクツと体が硬直する。

「聞こえた？」

「ああ……」

ヤバイっ、揉めてる暇なんてない！ 速く逃げないと！

ムメイは私を先に登らせた。ハシゴは二階の外廊下に繋がって、ドアがある。ラッキー！

「ムメイっ、早く！」

肩車の疲れが残っている。辛そうにハシゴを登って、ああああ、デブでごめん！ 次は痩せてくるから！

ムメイの手を掴んで、引つ張り上げた。

ばちん——！

はつきりと、音がはじけた。

あわわわ…… ななな、なにあれ……？ 真っ黒い炭が歩いている。体に赤い火を、ところどころにくつつけて、真っ黒の丸い頭がゆつくりと上を向いた。いやあああああ！ 見えちゃうの！？ それでも見えちゃうの！？

黒い足跡が、カタツムリの足跡にそっくり。うほあああ、こつちに歩いてくる！

「中に入れ！」

急いで建物の中につ……ん？ 鍵が入って、いる、よ……うわー！ 開けるー！ 開けてちょうだい！

ドンドン叩いても、ドアが開かない。ピンチ！

ムメイが思いつき窓を殴った。

「ムメイっ、血が！」

「いいから、こつから入れ」

内鍵を外して窓を開けたら、問答無用で尻を押され、頭からダイブ。

さっきの股下も、酔っぱらいの時もそうだけど、頭から突っ込むの好きね。

うー……埃っばい。けほっ、けほっ。テーブルやベッドがあるけど、ずっと長い間放置されていたのね。つもりに積もった埃と蜘蛛の巣だらけ。

「化け物が来んぞ！」

腕を掴まれ、勢いつけてドアに突進。壊しちゃったけど、いいよね。

廊下も埃っぽい！ えっと、右？ 左？ どっち？

「こっちだ！」

ムメイが叫ぶ。ん、暗くて見えにくいけど、左の奥にうつすら階段が見える。

……ハシゴから音が聞こえた。いやあああつ、早く先に行けっつーの！

ドタドタドタ、走るたびに埃が舞って喉が痛い。髪の毛に蜘蛛の巣が絡まる。大蜘蛛発見しちゃったけど、化け物の方が怖いわよ！ こっちは大人しいだけ可愛いわ！

階段は下へ続いていて、ちょうど良かった！ 外に出られる！ 建物の隙間から漏れる光を頼りに、階段を下りた。右、真ん中、左、どっち？ それぞれ奥にドアがある。なんだよ、それ！ ゲームじゃないんだぞー！ こっちは命の瀬戸際なんだぞー！ えっーと、えっーと……左に階段があったらから。

「まん……」

「左だ！」

走っちゃったー！ ムメイ、待って！

左奥のドアを開けると、木箱が山積みになされた小部屋。その奥にもドアがあつて、突き進めば青空の出口が――。

「クソっ、外れかよ！」

「ぶつとばすぞ！」

周囲全て木箱に包囲されているじゃない！ こいつ、運最悪！

「戻って、真ん中のドアに行こう！」

ここにいたら、マッズイ！ 逃げ場ないもん！

早く出て、さっきの廊下に——あ、黒い炭が目の前に。

ボタン——見なかったことにしよう……階段下りてきたあああああ！

「どけっ！」

ムメイがドアの前に、大きな木箱を山積みし始めた。あれ？ ムメイって力持ち、なわけない。これ空箱じゃない！

「出口を探すぞ！」

「ででで、出口って、奥は倉庫じゃないかー！」

ああああ、文句言っても始まらない。とにかく出口を探せー！
周囲全部木箱です！ 天井ギリギリ木箱です！

ちよい待て。この部屋、さっきの小部屋に比べて明るくない？
隙間隙間隙間……あ。

「まままま、窓だー！」

木箱の隙間から、赤茶色の煉瓦が見える。

隣からドンドン、ドアを叩く音がした。急いで、この木箱をどかさなきゃ。空箱だからだいじょ……ぶ、じゃない！ なんだこれ！

？ 重い！

こんな重いものは男子諸君に任せた——って、エロ王子一人！
だめだ、こりゃ。クラインなら、蹴り一つで木っ端みじんにしてくれるのに。

ええい、私のみなぎる力を見せてくれる！

「うおおおおりゃ！」

ぜーはーぜーはー。出口確保した、わ。乱暴に木箱を落としたから、中身が全部出ちゃったけど、何が入っていたの？ あんな重いもの。

ん？ んんんん？ ころころころと、木箱から転がった丸い茶色の物体。ドアに止まって、ある一点がこつちを向く。真っ直ぐぴよんと飛び出た、一本のひも。これって導火線だよね……。

ごろんごろん、出るわ出るわ。木箱から大量の……。

「ばばばばばばばば、爆薬！？」

まさか、この木箱全部！？ ここは、なんなの！？ 鉄物ジジイに恨みを持っているヤツの仕業！？ 恨みなら、私もそうだけど、これはやりすぎでしょー！

ここに爆薬があるってことは、今から来る歩く炭は、まだ燃えているわけで……ぎゃあああああ！

「ムメイ、早く外に！」

がしゃん。

盛大に窓が割れた。ムメイが木箱の蓋を使って、窓を割った。少し高い位置に窓があるけど、なんとかよじ登れそう。

早く外に……。小さい尻を押して、ムメイを外に出す。羨ましく

なんか、ないやい！

「掴まれ！」

ムメイが手を伸ばした時、ドアが大きく開いた！

来た……炭が来た……来ちゃったよおおお！

ぱちん、ぱちんって弾いてる。火がまだ全部消えていない。顎が震える。足が動かない。

「エレンっ！」

強く呼ばれたおかげで、金縛りがとけた。

ムメイの手を握り、壁を蹴りながら、窓から外へ出る。

「うひゃ！」

あと、もうちょいなのにつ、足を掴まれた！ 離せ！ はーなー
せー！

「あっち行つて！」

運良く、足が黒い顔に命中して手が離れた。ものすごく弱っているんだ。偶然あたった足にバランスを崩して倒れた。

倒れた床には転がる茶色の丸い物体。

いいっ！？

「離れろっ！」

思いつき腕を引っ張られ、ムメイの胸の中に抱かれる。

巨大雷が間近で落ちた——爆発が起きた。

空下の閃光 3

黄色い光が見えた。その次に赤や青、緑の光が弾け広がったのが見えて、爆発した――。

なんだろう？ ふわふわと、真っ暗の中を漂っている。地面がない。ただ浮いているだけ。変なの。

徐々に暗闇が色付いて、ぼんやりだけど自分の手が見えた。ふいに襲った焼け焦げた臭いがノドを刺激する。激しい咳に目が覚めた。

背中に重みを感じる。顔に黒髪が触れてくすぐつたい。

「ムメイ！ やだっ、しっかりして！」

庇ってくれたんだ！ 私の上にのしかかったまま、ぴくりとも動かない。

「ムメイっ！ ムメイってば！」

まさか、死んじゃったとか……いやいやいやいや！

ひっくり返して、心臓を確かめる。うん、動いてる。気を失っているだけ……よ、よがっただあゝ……ぐすっ。

急いで手当したいけど、今はこの酷い惨状から離れるべきよね。

あーあ、建物に大きな穴が空いちやってる。黒と茶色の二種類の煙が、もくもくと空に向かっていた。

中はまだ燃えている。熱いし、焦げ臭い。あと、ほこりっぽい。破片もいっぱい飛び散って、うわっ！ もう少し上に倒れていたら、

煉瓦の塊にぶつかっていた。危なかった……。

爆弾じゃなくて打ち上げ花火だったのね。 ってことは、ここは花火倉庫か。 びっくりさせやがって、にやろう。

たぶん舞踏会に使うための花火だと思う。 派手に打ち上げるのが好きだもんね、王都の人は。

今の爆発で人が集まってくる。

その前に、ここから離れないと……え？

瓦礫が崩れたただけだね？ ほら。

今、上の瓦礫が落ちたじゃない。 うん、落ちた。 落ちた音。 きつと、気のせい——……うそっ！

「ムメイっ！ ねえ、起きてよ！ ムメイ！」

強く揺さぶっているのに起きない。 マジで！？ ムメイっ！

お願いだから起きてよー！

見ちゃったのよ！ 見えちゃったんだよー！

煙の向こうでね、黒い影が動いたの！ 嘘でしょ。 なんて動くの？ なんて動けちゃったり出来るの！？ 爆発したんだよ！

早く逃げないと。

ムメイの腕を肩にまわして、出来る限り速く歩いた。

本当は走りたい。 でも足は限界だし、気絶しているムメイを担いで一歩一歩、歩くのがやっと。

離れたい。

早く離れたい。

足が言うことを聞いてくれない。

ムメイが重い。

「うわっ！」

足がもつれた。ごめん、ムメイ。あんたを下敷きにしちゃった。わざとじゃないんだよー、そこは理解しておくれ。

ちくしょー。足が、がくがく震えてる。私だけなら、なんとか歩けるけど……。

逃げるなら、ムメイも一緒だっ！ ばかやろーこのやろー。

かたかたかた……。

後ろから操り人形の音が聞こえた。

心臓が、ぎゅつと鷲掴みにされて痛い。

振り向きたくない。

音が気になって、振り向いてしまう。

声が出ない。

全身真っ黒の塊が立っていた。

お腹が破けた麻袋みたいに丸くえぐられて、なくなっている。

お得意の手品かと思った。向こう側の景色が見えるから。

焼け焦げた黒い足はぼろぼろに、むき出しになった骨が気持ち悪いほど白く浮きだっている。

目の前に化け物がいる。

黒い心臓の光は弱く、でも動いている。

ごっくん、右肘から下が落ちた。

銀色の剣が肘から生えていた。

「はー……はー……」

呼吸するので精一杯。

体が動かない。

指が動かない。

足が動かない。

顔をそむけることも、目を閉じることも出来ない。

尖った剣先が真上で光った。

クライン――。

後ろから突風が吹いて、真っ黒の塊が空に浮かんでる。
なんで？

急に金色の風が吹いたんだよね。光の風みたいに綺麗で、ほら。
今も目の前で、金色が靡いているじゃない。

……え”っ!？

「クライン！」

顔は見えないけど、あの後ろ姿は間違いない！

涙腺崩壊寸前だ、バカっ。

なんで洋服が変わってるのよ！ 両肩の肌むき出し！ スカートの裾が短すぎ！ 体のライン出まくってるじゃない！

「うわっ！ なに！？ って、もふもふー！」

白い毛玉を抱きしめ、ぽっこりお腹に顔を埋めた。無事だったんだねー！ 涙腺崩壊だー！ ばっきやるー！

手に触れたのは、この可愛い舌か。お腹があったかーい。やわらかーい。気持ちいいーい。

和んでいる場合じゃない。化け物は、どうなった！？

黒い塊が地面に落ちた。

化け物が空に浮かんでいたけど、それってクラインがやったんだよね。全然、見えなかった。

化け物は動く。まだ動いてくる。

ぼろぼろになって、体中は焼けこげて。

化け物の……彼なりの執念で動いているように見えた。

そうだ。彼が追っているのは『反逆者』なんだ。

彼は今、王都を必死で守ろうとしている。

誰も知らないところで、誰も気づかないように。

化け物の姿で。

道化師の姿で。

息をひそむように。

そうやって、今までずっと王都を守ってきた。

彼にとって、私たちが王都を脅かす化け物なんだよ。

起きあがる彼に、クラインが走る。

分からなくなってきた。

頭がごちゃごちゃになる。

だって、どっちも王都を守る剣なのに――。

鉄物ジジイ……あんたのせいだ。

あんたが反逆者にしなければ、クラインも、彼も、戦わずにすんだのに！

なんで？ 王都を守る者同士じゃないの！

なにが王都の裏よ。なにが反逆者よ。

クラインは反逆者なんかじゃないわよ、クソジジイ！

あんたの理由なんかクソ食らえよ！ 絶対に反逆者にさせてたまるか！ バカアアアア！

パンツ――。

長い美脚が舞い上がって、黒い顔がなくなった。

風船が破裂しちゃったみたいに、頭が木っ端みじん。ひええええええ！

クラインは止まらない。

腕を掴んで、引きちぎった。ぶちい……って、ぶちいって！ 音がすんごく生々しかった！

クライン……それ以上はやめようよ。

彼は戦えない。動いているけど、戦えないんだよ。

元のクラインに戻ってよ。

「クライン――！」

化け物の動きが止まった。

黒い心臓に、引きちぎった剣が突き刺さっている。

クラインが刺した。

根本の肘まで突き刺してゐる。

ゆっくりと、地面になだれこむように宮廷道化師は倒れた。

彼は起きなかった。

もう、我慢の限界だ。

「エレ……っ——あぐあ！」

突撃ダイブだ、こんちくしょー！

ふらふらだから、力の加減なんてできねーぞ、ばかやろー！
心配させて、このやろー！

会いたかったんだからー！

抱きしめる腕に、みなぎる力が入る。そうでもしないと、力が抜けて地面に倒れるから。

「ひっ……ぐ……あい……へへへ、へ、れん」

…… ああん？ ヘレンって誰だ？

彼女か？ 恋人か？ 婚約者か？ 面白くねーよって、クラインの口から魂が出ちゃってるー！ ちょちょちょ、待てー！ 昇天するなー！

「クラインっ！ クラインってば、しっかりしてー！」

しつかりせんかーい！

揺さぶれば揺さぶるほど、魂が離れて——待て待て待て待てつ、どこに行く！ 巻いて巻いて巻いて、押し込んで押し込んで押し込んで。

「怪我したの！？ どこ！？ 大丈夫？ ねえ、大丈夫なのー！？」
「おおおおお、落ち着け……とと、とりあ、え、ず……て……手を……離して、くれ」

はい、ばんざーい。

クラインの顔が真っ青、息も絶え絶え、うつかりするとポツクリ逝きそう。それは困る！

思わず、触れそうになつて。

「き……筋肉、痛が……がが……」

ポツクリやがった！ クライイイイイン！

ぐぬぬぬつ。

力仕事って、普通はさっ、男がっ、してくれるっ、ものじゃ、ないの！ ぜはー……軽く限界突破。動けなーい。

お美しい野郎ども二人の首根っこを引きずって、細道に隠れるので精一杯。くそう……ハナモゲ二号店に戻りたいのに、道がさっぱりわかんない。ムメイは起きないし……起きてもねえ……頼りがいがあるのか、ないのか、さっぱりわからん。

ただね、こいつと一緒に逃げると、ろくな事にならないのはわかった。

なんで逃げる方向全部、行き止まりなの？ 変なところで道が開けちゃったり、運がいいのか、悪いのか。ギャンブルは控えるよう、あとで注意しよう。心配で放っておけないもの。

それからね。引きずるたびに、あんあん声を出す野郎をなんとかしなくちゃ、頭がおかしくなりそうだわ。

「はうつん！」

もふもふに顔を舐められたぐらいで、色っぽい声を出さないでくんね。顔も少し赤いから勘違いする。

筋肉痛による発熱だけど……なんだ、その艶っぽさと、エロっぽさ。くそう、初恋相手に負けてる……しくしくしく。

「あうつ！」

「もふもふ。心配なのはわかるけど、クラインにさわっちゃダメ」

私のダメージが大きすぎるから。

「クライン、起きられそう？」

エロい悲鳴をあげながら、クラインは体を起こした。

ごめん、私が悪かった。もうね、聞いている方が恥ずかしい。つられて私まで顔が赤くなる。ああ、もう！　なんだよ、こいつはよーっ！

「はい、これ。解熱と鎮痛作用の他に、筋肉と関節の炎症を抑えてくれるの。お祖母ちゃん直伝の薬だから、効き目早いよ」

丸薬にしているから粉末よりは飲みやすい。ただ……ものすつごくマズい。作っている段階で、もはや泥。子供の頃によく遊んだ、どろんこ玉の色にそっくり。薬じゃなく、泥を作っている気分になる。いい感じの泥具合が、またねえ……。

見た目もヤバいけど、臭いもヤバい。人によつては、肥料？　とか思っちゃうんじゃないかなーと心配なのよね。

風邪をこじらせたときに一回だけ。お祖母ちゃんから無理矢理飲まされた、あの恐怖は、ぜーったい忘れない。

正直……しょーじき！　フンコロガシのアレだと思った！　そのまんまなのよ！　色といい、形といい、臭いといい！

あまりのショックに風邪が完治しても、しばらくベッドから出なかったわよ。クラインのお嫁さんになれないとかで、泣い、て……

——この話はパス！　本人を前にして恥ずかしいわ！　いやー、いやー！　思い出したら、頭が沸騰する！　早く飲め！

「うつ……」

ずいとい差し出したら、クラインの顔が引きつった。赤と青が混ざって綺麗な紫にー……って、それ死人色じゃん。飲む前から死ぬ。気持ちは分かるけどね。

でも、私がお祖母ちゃんから飲まされたアレは、これよりも酷かったんだぞ。

もふもふが顔をしかめて離れているけど、お祖母ちゃんのモノだったら、もふもふいないよ。

改良に改良を重ねた結果。ドーにか、ここまで臭いが抑えられたの。これ以上は効果が薄れちゃうから無理だった。

マズい分だけ効き目は即効性。マズいくせに、とても胃に優しい。目と鼻と口にも優しかったら、完璧だったのに……。

だから人気はいまいち……ない。見た目だけで、死ぬ！とか言われて。やっぱり見た目と味が、あと二オイ。くさっ！

クラインも、そう思っているだろうなあ。黙ったままだもん。

うーん、まさかこうなるとは思わなかったから、こつちも準備不足なんだよね。他の薬も一応あるけど、今の泥……じゃねえ、目の前の薬と比べたら、だいぶ劣ってしまう。

クラインの症状を見るかぎり、どろ……あー、もう！めんどくさい、もう泥玉ね。フンコロガシ玉よりはいいじゃん！この泥玉が一番いいの。

でも、さすがに水なしじゃ、キツイよね。

「水、貰ってこようか」

探せば、きつと……たぶんマトモな、ピンクの髭の一人や二人には会えるでしょ。ゴロツキには会わないように、祈るしかないけど。腰を浮かしかけたところを、クラインに止められた。

手首を掴まれて、ぱくつと手のひらの丸薬を飲み込んで——ポツクリやがった。

だから、水を貰ってこようとしたのに。

貴重な材料を使っているんだから、吐き出さないでよ！　じたばたして、陸に打ち上げられた魚か。ええい、騎士団長が情けない！　腕を伸ばして、なんか言ってる。小さくて聞こえない。なんて言っているの？

耳を近づけると、

「み……み、み……」

はいはい、ちょっと待っておれ。

空下の閃光 5

戻るつもりはなかったんだけど、さっきの爆発で人が集まってい
ると思うの。一つ一つのドアを叩くより、人が集まった所に行った
方が早いよね。この人たちは殻に閉じこもったカタツムリだし。
間違ったドアを叩いて、ゴロツキ参上！ なーんてことになったら
大変。

あれだけ派手に花火が爆発したんだから、警備兵も来ているよね
え……バレないように、こっそり恵んでもらおう。

水もそうなんだけど、彼……宮廷道化師はどうなったのかな……。
あのまま見捨ててしまったから。

王都の表には出せないこと——騎士団長が反逆者になったって騒
いだら、クラインについてきた部下や残念さん……ああ、カレンち
やんだっけ……黙っていられないもんね。王都の人たちにも不安や
動揺が広がって、国王様への不信がきつと出てくる。同盟国に囲ま
れているから余計にね。

私が生まれてから一度も戦争は起こっていない。国境付近で小さ
な争いはあっても、火種が大きくなる前には消えているもの。

私と同世代、その下の世代、そして子供たちは戦争を知らない。
戦いを経験したこともない。さっきが初めて。

とても、とても怖かった。

私たちがいるそばで、さっきと同じことがたくさんあったんじゃ
ないかって、今は思っている。

クラインは驚いていたけど、たぶん知っていた。みんなが笑って

いる横で、気づかれず静かに消えていく人がいることを知っていた。ぞつと寒気がする。

でも、王都を守るために必要としていることなら……私にはそれが悪いことなのか、正しいことなのか、判断できない。

この平和が当たり前のように、なにこともない日常がどんなに幸せか。

あんな戦いの後だから、どうしようもなく心が締め付けられる。

平和な日常の裏には宮廷道化師が潜んでいる。

突然、短剣を投げつけてきたから悪人だと思ったけど、そうじゃない。お化け人形だけどね、そこらへんのゴロツキと全然違うもの。いろいろと酷い目にあわされたなあ。毒針が飛んできたり、火を吐いたり、横一列のゲロ口軍団がいたり……いつやああああ！
思い出したら鳥肌がー！
うつうつ……で、でも！ それは彼の、王都に対する思いから来た行動だと思うの！

クラインや鉄物ジジイと同じものを彼は持っていた。

王都を守る信念と忠誠の剣。

ぼろぼろに燃えて真っ黒の姿になってまで、しつこく追って来てあれが、ただ命令を受けたからって、どうしても思えない。

彼は必死で王都を守ろうとした。

王都を脅かす私たちを恐れていた。だから、最後の最後まで諦めず、殺そつと……。

「はあ……」

これは私の勝手な思いだから、彼の気持ちはわからない。ただ、

命令に従っていただけかもしれないし。

でも首を傾げて、私やゴロツキたちを不思議そうにじっと見る姿は、もふもふに似ているような気がする。

ゴロツキを襲ったもふもふと、同じかもね……ゴロツキか……そう見えたのかな……やだなあ。

彼は……みんなは彼を、どう思ったのかなあ……。

足先に硬いものが、ぶつかった。

半分黒く焼けこげた木箱の破片。爆発場所はもう少し先の、右を曲がったところなのに……建物にぶつかって飛んできたんだ。

いやだな。

思ってしまった。

わかったから、足が前に進まない。

あの場所にいる彼を見た人たちは、たぶん私と同じことを思っている。

私にとっての王都はすぐ賑やかで、いつもどこかで必ず笑い声や音楽が聞こえてくる。酷い場所もあるけど、そんな場所にも優しい人はちゃんというもの。

王都は私の夢がある場所で、夢が消えた場所。クラインが命を賭けて守るもの。

王都の人たちは安心して暮らしている。

そこには騎士や宮廷道化師がいて——いろいろなものから守っていたんだよね。

誰も知らないところで彼は守って、誰も知らないまま彼は消えて……。

消える――？

たくさん酷い目にあつて、怖い思いもいっぱいしたのに、それが夢やまぼろしで片づけられてしまうの？

大きな爆発も、ただの事故扱いにされるんだ。

そんなのはなかったって誰かが言えば、なかったことになる。

誰か――そんなの決まつてる。

だつたらつ、彼の最後の最後まで、見て、知つてやろつじやないの！

せめて、私だけでも「彼はいたんだ！」って言つてやる！ なかつたことにされてたまるか、ばかやろーこのやろー。

魔法薬剤師はなあ、根に持つヤツが多いんだから！　こんちくしよー！

吹っ切れたら足が動いてくれた。

ざわざわ騒ぐ声が聞こえる。たくさんの人が集まっている。あつ、警備兵が横切つた。あちやゝ、やつぱり来てたか。

建物の影に隠れて、そつと覗くと……。

はつぐわああああ！　ななな、なに！？　あのピンクの壁！？

ピンクだけじゃないつ。赤に、黄色に、オレンジに、暖色系ばかり。しかも、ごつついわー！

おおおおお、どどど、どーしよ。あいつらに、水をくださいつて言うの！？　ええええええ、何の罰ゲームなのよ。

ひいひいひい、なんで全員、髭を剃らないのよ！　おかしいでしょ！　毛深すぎつ、ドレスから胸毛見えてるー！　いやああああ！

彼の姿が見えねえ！　ピンクの壁に突っ込んでいく勇氣もねえ！

どーしょおおおお！

神様ーっ、我に勇氣をおおおお、与えたも――。

「そこで何してんだい？」

「うひゃい！」

突然、後ろから声をかけられたから、一瞬だけ胸が飛びだした。びっくりしたー……あ、元に戻った……がくん。

清掃員のおじちゃんだ、良かったー。ゴロツキやピンクの髭だったら、どうしようかと思った。

小柄で人当たりよさそうな雰囲気だけど、私を見る目はうさんくさげ。上から下を、じろじろ行ったり来たり。あー……ですよね。

「あんた、この辺の人じゃないね。ひどい格好だ。危ない奴らに追われているのかい？ ここも危ないよ。あっちにいる派手なドレスの連中は、皆このゴロツキ共さ。あいつら、おかしくなっちゃまってね。まあ、元からおかしかった連中だけどさ」

だから体がごつくて毛深いのか。たしかにおかしいね。誰も、そのおかしさに気づかないところが、おかしい。一人ぐらい気づいてもいいんじゃないの？

「あんた迷子かい？ だったら、この細道を真っ直ぐ行つて薔薇の三角旗があるから、それを右に曲がって歩けば広場に繋がる道に出られるよ。あいつらが気づかないうちに、早く行つたほうがいい」

「ありがとうございます。でも、連れが気分を悪くして水を欲しがって。水が貰えるような場所はないですか？」

おじちゃんは渋い顔になった。

安全に水だけを貰える場所ってないよね、やっぱし。
クライン、水は諦めるしか……。

「果実酒なら持っているよ。アルコールは低いから飲みやすいと思うがね。これでいいなら持っていきな」

「おお、おじ様ー！ 清掃員のおじ様ー！ ありがとうございます
すー！ お酒でも、お酢でも、この際なんでも構いません！

何度も頭を下げて、お礼を言つて、ありがたく！ ありがたく、
果実酒を頂きました。果実酒、ゲットだぜー！ …… って。

「あの、そのバケツなんですけど」
「ああ、これかい」

地面に置かれた、くたびれたバケツさん。
大切に使われているバケツなんだろうけどね、その中身がすごく
気になる。

「道にゴミが散乱していてね。ゴミ捨てに行くところなんだよ」

土や木くずや紙くずやら、そんなのがいっぱい。だけど見覚えの
あるものを発見しちゃった。

ぼろぼろに破れ、片方を失ったとんがり帽子。先つちよには例の
鈴ですよ、例の鈴。

「すみません。できれば、これも頂きたいのですが」
「鈴が欲しいのかい？」

頷いたら変な子と言われた。私もそう思っけど、そこはまあ、苦
笑いで誤魔化しておく。

おじ様は丁寧に鈴を外して渡してくれた。

「じゃあ、私は行くけど。早く、この場所から離れるんだよ」
「本当にありがとうございます」

頭を下げて、もう一度、爆発場所を覗く。

うーん、無理。あの暖色軍団に突っ込む勇気が出てこないわー。
彼がどうなったのか、気にはなるけど……もらった鈴を空にかざした。

大切にしていたんだ。きちんと手入れをされて、綺麗に光っている。

とっても怖かったんだよ。

殺されるとか、死んじゃうとか、何回も思ってたんだから。

大変な目にもあったし、助けてくれた友人が酷い目にもあって、大切な人が守ってくれた。

この鈴の音が、どれだけ私を泣かせたのか、わかっているの？

絶対に忘れない。

忘れてやるもんか。

ずっと、ずっと、私がお祖母ちゃんになってもね、意地でも覚えてやるんだから。

覚悟しなさい。

誰にも気づかれず、誰かに捨てられたとしても、ちゃんと私の手のひらにいる。

鈴は、あるとき助けてくれた光の風と同じ色をして、きらきら光っていた。

さてと、クラインがポツクリ逝っちゃう前に戻らないと、私がめんどくさい。

鈴は落とさないように服の中に入れてこ。胸は……不自然か。ちえ、せめてあと一個あったらなあ……くそう、さんざん板呼ばわりされたから、なんでもいいやって気分になる。
はあ……。

急いで戻ったら案の定、逝っちゃってた。めんどくせえ！

空下の閃光 6

顔色はまだ良くないけど、さっきよりだいぶマシになった。

薬が効いてきて良かった、良かった。これでエロい声を聞かなくて済む。泥玉持ってて本当に助かったー。あのエロ声は危険すぎるもの。

熱はどうか？ 額に手を当てて……うん、下がってる。こっちも、だいじょー……。

「ぶひゃあ!？」

なななななっ、なにごとー!? アーッ! だだだだ、だきっ、だきしめっ! 抱きしめられているんですけどー!

うひよああああ、むむむ、むにえ! むむむむ、むによお!

いいいい、いたっ! い、板に顔が当たっているんですけどおおおお!

そこは板切れですから! ゴシゴシ洗濯しちゃう場所ですよー! つか、堂々とっ、えええ、エ、エロ行為をするんじゃない! 離れ……っ。

「すまない」

はい? 真面目な声で、どエロ行為を許せると思って——ぶほあ! ぐるしい! ギギギ、ギブっ! ギーブ!

「……誓いを破った……」

「ち、誓い? あ……」

——俺の騎士生命を賭けて誓う——エレンは絶対に俺が守る。

あれか……ごめん、すっかり忘れてた。もうね、それどころじゃなかったというか……あれ？ 謝る必要ないんじゃない？

「なんで謝るの？」

クラインが顔を上げた。もぞつとして、くすぐったーい。

はーなーれーてーくれんかのう。血液が沸騰して、全身から赤い湯気がでるぞ、こらっ。

がっちりホルドされて、逃げられない。もふもふは捕まえなかったくせに！ うわーん！ 誰か、女神様の馬鹿力をなんとかしてー！

「唇が切れている」

「へ？ ああ、これ？ 大丈夫よ。薬も塗ったから、すぐに治るわ。これぐらい何でもない」

だというのに、女神様の表情は暗い。

「宮廷道化師にやられたのか？」

うーん、どーしたもんやら。とりあえず、笑顔につこにつこで、誤魔化そう。

なんかねー……正直に話したら、飛んでいきそうな雰囲気なのよね。悪魔人降臨！ みたいなー。

ただでさえ、鉄物ジジイに反逆者扱いされているんだ。本物の犯罪者になったら困る！ って、ぐはあ！ またか！

ちょおおおおい！ 板が陥没したら、どーすんの！？ 再生不

可能なのよ！ 私を再起不能にさせる気！？ やめるおおお！

「……今の俺には、どうしてもエレンが必要なんだ……」
「クライン……」

私が必要だなんて、きゅんとする胸が今、壮絶にヤバいことになっ
っているのに気づいて。

だからああああ、締め付けるなあああ！ 痛いつ！ 胸が痛い
！ いいいい、今、ミシツ……っていった……言っただ、オイイ
イ！

「俺が考えていた以上の危険に、エレンを巻き込んだ……いや、分
かっていた……守る自信はあった……それなのに誓いを破った……
騎士として恥ずべき行為をした……エレンを……傷つけた……」

参ったなあ。

一番悪いのは鉄物ジジイであって、クラインのせいじゃない。
肩が落ちて、背中が丸くなってる。へこみにへこんでるなあ……
もう、私よりもクラインの方が大変なのに！ しっかりせんかい！
こんなことで肩を落として、どーする！？ いつもみたいにつ、
真っ直ぐ前を見てよ！

「クライン、顔を上げて」

……お預けされた犬か、おまえは。なんだ、その顔は……ったく。

「私は、クラインが誓いを破ったなんて思っていない。ちゃんと守っ
てくれたじゃない。酷い筋肉痛になってまで、私を助けてくれたじ
やないの。クラインが守ってくれたから、私はここにいるの」

あの時も、足をくじいた私を助けてくれたから、今の私がいる。

「子供るとき、クラインに助けられてばかりだった。だから今度は、私がクラインを助ける番。絶対に、元の姿に戻してやるんだから！」

そして、鉄物ジジイをギャフンと言わしてやる！

みーてーいーろー。この恨み、みなぎる拳に込めてやるから。右拳？ 左拳？ 両方だ、ばかやろう。

クラインを反逆者にしてたまるか、あんにやろーめ。

「エレン」

「なにいいい、ぐはあ！」

騎士の誓い、ちゃんと守れええええええ！ お前が破っちゃつてどーすんだつ、あほおおおお！

「俺はエレンが——……」

私が、なに？ 聞こえない…… 口から魂が出ちゃって、何も聞こえません。なんて言ったの？

「サラシでも巻いているのか？」

「ほあたあつ！」

鉄物ジジイに使うはずだった、みなぎる拳を使用した。

てめえが潰しておいて、よくもまあ、言っちゃいけねえ禁句を。

この口かつ、この口か！ 伸ばしてやんぞ、このやろう。

「へれん、いはい」

「痛くしてんの」

嬉しそうな顔をするな、バカ。

空下の閃光 7

頬をつねって遊んでる間に、顔色が元に戻ってる。さすが騎士団長、普通の人より回復が早いじゃない。

さっきは綺麗な紫色だったのにな。

「体は、まだ痛い？」

クラインは手を握っては開いて、握っては開いて、それを何回か繰り返して調子確かめる。

「問題ない」

そりや良かった。泥玉三個分の材料費と、数ヶ月分の生活費は同じなんだから。こんな見た目だけだね、とっても高価な薬なんだぞ。たまに訪れる旅行者が珍しがってお土産に買っていくんだから。おまけもサービスしているし、買ってもらわないと私が困る。

これは、ほら。結婚の手紙に動揺して、間違って持って来ちゃったのよ。常に持って歩くようなモノじゃないし。だって臭いがねえ……慌てて王都に来たから、何を持ってきたのか、さっぱりわからない。あとで確認しよう。

でも、持ってきて良かったー。クラインの回復の早さにはビックリしたけどね、泥玉じゃなかったら、もっと時間がかかったはずだよ。鉄物ジジイに睨まれてなければ、それでも良かったんだけどねえ。

たぶん鉄物ジジイは諦めていない。あの顔だもの。すぐに諦めるような顔に見えないし、夜の女王様と上下関係でしょ。諦める神経は持ってねえだろ……逆に、しつこそうなイメージが……ああ、いやだ、いやだ！

それにしてもさあ……。

「なんなの、その格好？」

改めて見たら、こいつの服装……ギリギリにエロい。お風呂上がりの布一枚のそれ。服じゃないの、布なの。服はどこへ行った？ 大きめの布はあちこち糸が解れて、破り取った跡がある。うーん……もしかして、カーテン？ 生地に厚みがあるし、汚れやシミもあるし。

けしからん胸と揺れない太もものところで、外れないよう固く結んでいる。当然、布の下は危険地帯と見た。

……ねえ、その大きさと、その高い位置を自然のままキープしてんの？ そのけしからん胸は、なにで出来ているの？ 張りぼてじゃねーだろ。

私のは、すでに陥没しちゃってるかもしれないのに！ なんで、ぱちもんが真逆なんだー！

くそう……理想的な形と大きさを持って、うらやましーなつ。このやろつ。

「途中、蛙に邪魔された」

それはそれは、しょうがないね。緑の塊だもんね。やつらの唾液は超強力接着剤だもの。服が破れただけですんで良かったじゃない。クラインの肌、綺麗だもん。傷がついたら、もったいないわよ。

あ、傷っていえば、

「腕の傷はどうなったの!? 見せて!」

平気な顔をしているから、すっかり忘れてた!

宮廷道化師と戦ったとき腕にカードが刺さってたでしょ! もうっ、忘れていた私も悪いけど、なんで言わないの! 結構深く突き刺さっていたんじゃないの!? うりゃ、見せんかい!

「え……?」

なに、この赤ちゃんみたいな肌?

嫉妬を通り過ぎて、怪し過ぎる。なんで傷がないの? 赤い傷跡も、腫れた様子もない。

試しに擦ってみる。

やっぱりない。

嘘嘘嘘、見間違ひなんかじゃない! それじゃ、反対の腕? う

ん、左腕だった。ちゃんと覚えてる。

でも、傷がない——なんで?

一日も経たないで、傷が完治するなんてありえない。

スベスベの白い肌は柔らかくて、羨ましくて、憎たらしいんだけど、それはひとまず置いて。建物を破壊するほど激しい戦いをしていたのに、細かい傷一つもないなんて絶対におかしいよ!

宮廷道化師は傷だらけだったのよ。クラインが無傷だなんてありえない。

ねえ、本当に服だけが破れたの?

見上げたら、目をそらしやがった。こいつ……。

「クライン。私に何を隠し——……」

「アンタたちい、そこで何をしてるのお？」

「こととこととつ、鳥肌ぜんかーい！ 後ろから変なのが来たー！

」
「こくこくこくこく」

ニワトリになるわよ！

ひいひいひい！ なにこの、ナメクジがはい上がるような気持ち悪さつ。背筋に野太い声がまわりついて、いやああああ！

クラインンってば、なんで平然としてんの！？ もふもふの顔を見てよっ、狼になってんのよ！ 敵よ、敵！ 敵が現れたのー！ 相手は、ほらっ！ 凶悪なヒヨウ柄の髭……って、ヒヨウ柄ー！ ？ くくくく、クラインン！ 背中貸して！ つか、盾になれ！

「ナニアレ……ナニアレ……」

怪物だ……人の形をした怪物がいる……。
がたがたがた、震えが止まんない……。

ベビードール？ それ、寝間着じゃないの？ 透けてないから大助かりだけど、それでもすんごい破壊力。ヒヨウ柄のタイツが伐採した大木に見える。

クラインン、よく正視できるね。騎士団長だから、いろんなものを見てきたと思うけどね。だからといって、これはない。見た目だけで人が死んじゃうよ。泥玉といい勝負だわ。

ご、ごつい……筋肉がごつい。

全身日焼けしているから、なおさらごつく見える。あと顔が厳つくて……鉄物が少し混じっているような……いやー！ 想像したー！ ちょっとちょっと、下半身がギリギリにも程があるんじゃないの

！ わざとギリギリにしてんの！？ 見えそう、見えなくて。でも見えそうで——嫌でも目に入るのよー！

ここここっ、こっちくんなー！

「きゃあっ！ ムメイちゃん、じゃないのお！」

ぎゃーっ、ムメイが怪物の胸で潰されるー！ …… って、あれ？ 怪物とムメイ、知り合い？

「いやああああ！ ムメイちゃん、死んじやいやあん！ 死んじやダメえなのお！」

あわわわ。そんなにきつくムメイを締め付けたら……あ、ムメイのやつ。やっと起きたな。腕が大きく暴れて、もがいてる。でも怪物はまったく気づいてない。残念！ 起きるのが遅いよ、ムメイ。あーあ、恐怖の胸筋肉に顔を押しつけられて……ねえ、息、出来ないんじゃない。だって腕が震えて……落ちた。

ごめん、ムメイ。助けるの無理。絶対無理。

「きゃあ！ ムメイちゃん、死んじやったあ！ どうしよあん！？」

ムメイ、せっかく助かったのに……やっぱ、運悪い。

「そうよあん！ 本にあったのお！ 呪いでえ永遠の眠りについた王子様わあ、美しいお姫様の愛のお口づけで、目が覚めるのお！」

待て……待て待て待て。本気でそう思ってたっしやる？ 呪い本人が、それを言っちゃうの？ ムメイ、どこまで運が悪いの！？ ぎゃーっ！ 怪物っ、お前何をしている！？ それ以上顔を近づ

けたら、ムメイが目を開けた瞬間、灰になるわよ！ ややや、

「やめろおおお！」

びくつと怪物が止まった。惨たらしい光景に我慢が出来なくて、つい叫んじゃった。でも、アレを止めねばムメイの命に関わる。

怪物はゆっくりと顔を上げて、

「あんた、なに？」

それは、こっちのセリフでございます。地の底から湧き出る濁声で、睨まないでください。

もふもふも怯えて隠れてるじゃないの！ ゴロツキには問答無用で噛みついていたのに、目の前の怪物には為す術がないってか！？ ぎゃっ、怪物の目が光った！

「アンタたち……ムメイちゃあんの……」

「知らん」

「はいっ、知ってます！」

クラインは少し黙ってて！ 本音がただ漏れすぎて危険なのよ！ 念のため、口を塞いでおこう。がっちり両手で押さえとけば大丈夫でしょ。

ただね、この後ろから乗っかる体勢が思ったより恥ずかしい。私からクラインに抱きついてるように見えるかも。

これは緊急処置。仕方がないの！ 無意識に呟いて怪物が暴れたら、そっちが大変なもの。

クラインが目で訴えているけど、無視だ無視。

「ムメイちゃあんの、なに？」

「友人です！」

「こつ、ここここ、恋人、じゃ、ないのねえん？」

「ただの友人です！ それ以下はあっても、それ以上はありません！」

一瞬、ニワトリの怪物かと思った。怪物がひとたび口を開けば、人間がカチンコチンの石になる有名なおとぎ話があつてね、まさか本当にいたなんて思わなかったわよ。

地獄からはい上がった声に、心臓が石になった。

ん？ なに？ クラインってば急に目を細めて……言いたいことは後で聞くから、まずは怪物退治が先でしょーが。
とりあえず人質を救わねば！

「あの……」

声をかけただけで、槍の視線が返ってきた。

退治無理。退治不可能。ムメイを生け贄に捧げて、このままトンズラしたい。

でもなあ、ムメイにはいっぱい助けられているし、気を失ったのは私のせいだし。怪物の魔の手に、このまま落ちるのは見てて気持ちのいいものじゃない。

くそう、怪物にや負けねえぞ。鉄物に比べれば、ままま、まだ、可愛いじゃないの！

「り、リンさんの店はどこですか！？ ムメイ、具合が悪いから店に戻らな、いと……あーっ！ リンさんのこと、すっかり忘れてたー！」

やべー！ 頭から突っ込んだじゃってるから、あのまま放っておく

と頭に血が上って危ない！　どうしよう！

樽の場所がわからない！　ボオオオオオス！

「リンちゃあんなら、さつき店に連れていったわよおん」

「へ？　樽の中にいたのに、なんで？」

「外でえ寝てたから、連れて行っただのお」

そ、そういえば、ムメイが後で出してくれるって言ったよね。じやあ、あのドレスを着た豚さんの三角旗って、ま・さ・か。

「アンタたちだったのお。アタシのお店の前でえ、リンちゃあんを置いてけぼりにしたのお。もう、大変だったんだからあ。リンちゃあん、臭くて二オイがアタシまでえ、うつっちゃったじゃないのお」

怪物は胸筋肉から香水を取り出して、体全部に吹きつける。

……憎い。

香水が落ちない肉厚が憎い。筋肉だろうとも憎い。盛り上がっている胸が許せねえ。

「ふえれん」

は！　クラインが呆れた眼差しになっている。こんちくしよめ！　お前も同罪じゃー！　その頬つねってやる！

「な、なふえ？」

「八つ当たりよ」

悔しくて、悔しくて、心が洪水を通り越して干ばつした！　酷いっ。みんなよってたかって、酷すぎる！　うわーん！

「ねえ、アンタたちいん」

「ひつく……はい？」

怪物の目が憐れんでいる。ちくしょう、そんな目で見るな。心が砂漠になったら、どーしてくれる。

「よいしょおん」

声はともかく可愛らしいかけ声なのに、ムメイの扱いがすげー雑。土囊担ぎだ。王子様なら、それらしい扱いしてやれ。可哀想に……。

「リンちゃあんのお友達でしょおん。リンちゃあんの店まで案内してあげるわあん」

え？

「いいんですか!？」

「ただし、ムメイちゃあんは、アタシのお王子様だからあ」

「遠慮なく、どうぞ！ ムメイを大切にしてください！」

怪物だけど、いい子じゃない。ムメイ、幸せになるのよ。

「胸のないボウヤよりい、アタシの方があ、いいものねえ」

あ、干ばつにヒビが入った。ものすーごく、大きなヒビ。

このまま素直に怪物について行くか。それとも、握りしめた痴漢撃退特殊調査トウガラシダマで怪物退治といくか。

怪物が暴れたら、クライン。よろしくね！

銀の姫 1

今までの人生の中で、いちばん股関節が痛い。

股関節だけじゃない。足裏が痛い。ふくらはぎが痛い。腿も痛いし、尻も痛い。横っ腹がズキズキする。

明日が怖いなあ、どーしよう。筋肉痛で逝っちゃっているかも。クラインがいるのに、泥玉は絶対イヤ！

なんで……こんな、こんな。

もーふーもーふううふうう。私を殺す気！？

ふらあ……ヤバい、走り過ぎて酸欠だわ。くらくら眩暈がする。

おまけに心臓も痛い。途中の上り坂が地獄だった。

落ち着いて、ゆっくり深呼吸よ。すーはーすーはー。

「エレン、大丈夫か？」

正直、大丈夫じゃない。でも、クラインが優しく背中をさすってくれているから、少しは楽。

ありがとって言いたいの、ごめんね。呼吸だけで今は精一杯なの。一応軽く頷いたけど、通じたかなあ。

あー、背中の上に癒される。

それにしても、あんだけ走ったのに、女神様の顔には汗一粒もございませぬ。お祖母ちゃん、泥玉ってすごいね。今、初めて感動した。ここまで効果が出るなんて。さっきは本当に指一つも動かせなかったのよ。

でも、やっぱり飲みたいとは思わない。

だって……その……ちょっと臭うの。女神様から、その……言えない。

くそう。どうにかして効果はそのままに、臭いだけを抑えるようにしないと。ショックが大き過ぎる。

はひ……水が欲しい。

ハナモゲ二号店に戻る途中、恐れていた事態が発生。

白い小さなボスの可愛い尻尾が突然、全力回転してー、してー……捕まえ損ねた。ていっかね！　なんで、アホの子は目を細めて感心しちゃうのかな！？　捕まえろって言ったよね！　何かあったら、こっちの責任になるんだと、何度言えばわかるの！？

途中、私が盛大にすっ転んだおかげで、もふもふを見失った。ぎやふん。

もふもふ大丈夫かなあ。

ムメイ、無事に生きているといいなあ。

気を失ったムメイを、そのまま怪物に任せただけ、大丈夫だよね？　お願いしたとき、怪物の目が怪しく光ったのを見てしまった……えへ、スルーしちゃった。つつこむ勇気がなくて……。

ムメイ、そのうちいいことがあると思うの。だから、灰になったり、煙になったりしちゃだめよ。

しかし、よりもよって貴族地区で、もふもふを見失うなんて、や・ば・い。何か問題が起こったりしたら……頭を下げただけで収まる場所じゃないんだぞ、もふもふ！

商業地区からの上り坂を、ひたすらまっすぐ。王城を含んだ街並みが見渡せる一等地は、貴族だけが住むことを許された場所。初め

て来るけど、一般の住宅地区とまったく異なる世界だわ。うん、住む世界が違う。住宅地区は騒がしくて、いつも明るい雰囲気なのに、こっちはとーっても静か。小鳥のさえずりが聞こえます。

人は住んでいると思うけど、どこもかしこも敷地が広過ぎて、門から屋敷までの距離が長い。さすが、貴族の住む家。掃除が大変そう。

屋敷の大きさも、ただ大きいだけじゃない。

大きいくとても大きいくでら大きい。

そんなアホみたいな家が、あっちこっち。なんだって無駄に大きい家ばかりなの？ 掃除する人が哀想に思えてくる。

しょうがないか。屋敷の大きさが、そのまま貴族の爵位を表しているもんね。でかい家ほど高位貴族様が住んでいるし。中には変わり者もいるみたいだけど。

でら大きい屋敷で一人暮らしをしている貴族もいるとかー、なんとかー。そーいやボスが、あそこの貴族は独り者だとかなんとかで、ぶつぶつ呟いていたなあ。だいぶ前になるけど、もう結婚したかな？

ふう、胸の痛みが引いてきた。でも、まだ横腹が少し痛い。

「歩けそうか？」

「うーん……もう少し休みたい」

足が震えて、こうして鉄柵を掴まないと立ってられない。場所が場所だから、長居したくないのは分かるんだけど……ああ、足さえ動いてくれたら！ 家に帰ったら、歩き歩き美容健康部に入ろう。奥様方の仲間入りだい。

「無理はするな」

「うん。クラインはそのまま、もふもふを探して」

今頃、どこに突撃しているのやら。想像したくないけど、被害を拡大させるわけにはいかない。というより、被害そのものを出したくない！ 未遂でお願いします！ もふもふ、一生のお願いだから獲物を見つけても、おとなしく、じっとしているのよ！ ……無理なのはわかってはいるけどね！ 神様の奇跡にでも、すがりたいじゃないの！ もふもふ、お願い……くすん。

って、なにをそこで、ぼさーっと突っ立っているの、女神様？

「エレンを、このまま置いていくわけには……」

クラインが戸惑っている。大変な目にあったばかりだしねえ……だからこそ、早くもふもふを見つけないといけないの。

「私なら大丈夫よ。少し休めば歩けるし。ゴロツキの時は焦って混乱して忘れていたけど、ちゃんとそれなりの対策は持っているんだから」

そうっ。トウガラシダマのこと、すっかり忘れてた。あのときこれを投げていれば上手く逃げれたのに……って、ひiiiiiiiiい！ 女神様の眉間に三本皺がー！

「ゴロツキ……」

「きき、きゅ、宮廷道化師のことよー！」

すみません、道化師さん。ごまかさないは無駄な血が流れそう……。

「私のことより、もふもふを探して。こんな場所で、もふもふに何かあったら大変だわ。クライン、お願い」

手を合わせて、見上げる。

もふもふの正体はボスなんだもん。図太い神経は貴族相手でも容赦しない。

単純に何も考えていないだけ、なんだけど……ん？ あれ？ クライン、熱下がってなかった？ 顔が少し赤い。

あ。今、ため息ついたでしょ。

「わかった。エレンはここで待っている。何かあったら呼べ」

「うん。クライン、気をつけてね。無茶しないでね」
「すぐ戻る」

行っちゃった。

うーん、早く夜の女神様のところに戻りたい。布一枚は絶対ヤバい、アブない。

それにしても……顔がほつかほかだよ。女神様つてば、笑顔で頭を撫でて行くんだもの。もう、恥ずかしい。子供じゃないんだから。

子供の頃、よくクラインに頭を撫でられたっけ。

……えへへ。

こらこら、しっかりしろ。軽く頬を叩いて気合注入。

……無理、顔がにやける。えへへ。

「私の一生のお願いなのです！」
「いけません！」

揉めごと？ えーっと、後ろからだ。左の曲がり角から、男女の痴話喧嘩が聞こえる。二人とも必死になって声を荒げて……これは、もしかしくなくても修羅場ってやつかしら？ ちょっと見たい。

足は……うん、動ける。大丈夫。そーっと近づいて覗いてみる。お、お人形さんが動いて喋ってる！？ うっそだー。思わず目をこすった。

クラインが女神様なら、目の前のあの子は妖精か、お姫様だ。

銀色の長い髪は遠くからでも、ふわふわと柔らかいのがわかる。一面の雪景色を銀世界って言うでしょ。まさに、あれ。太陽の光でキラキラ光る、それ。顔立ちは、まだ幼く見えるけど、漂う気品だけで銀姫様って言いたくなる。うん、銀姫様に決定。

肌も真っ白で、こっちは雪じゃなく焼きたてのパン。ほっぺとかふにふに柔らかそう。

貴族っぽい顔なのに、服装が飾りっ気のない地味な紺色ワンピースで、変にちぐはぐ。美少女は何を着ても、美少女なんだけど……もしかして使用人？ まさかねー……でも、貴族の使用人も、容姿で選ばれるって聞くからなあ。

「帰りましょう。このことを知れば、旦那様が心配なさいます」

黒服の男が必死で銀姫様を説得している。後ろ姿だから顔は見えないけど、声は若い。なんだ、恋人同士じゃないのか。残念。

そっか、銀姫様は旦那様のお気に入りか。納得。あんだけ神々しい美少女なら、誰だって傍にいて欲しいと思うもの。

「嫌です」

ぱっさり一刀両断。銀姫様ったら、問答無用で容赦ないです。男

の方がうるたえて、ちょっと可哀想。

あーあ、嫌われちゃってますよ、旦那様。

ぶんぶんと顔を一生懸命、横に振って。ぶんぶんと一生懸命、男の手を振りほどこうとしている。見てる方は、とーっても可愛い。

あ、目が合っ……。

「助けてください！」

「はい！？」

男の手から逃げた銀姫様が、まっすぐこっちに来た！ な、ななな、なあぜ、私の後ろにお隠れになるんでしょうか、銀姫様っ！
ちよつと、押さないで！ なに？ これって盾にされてる？ ひでえええ！

「なんだ、お前は？」

ひー！ 明らかに邪魔って睨んでるー！ まだ若いくせに、なんだよっ、その苦労性の顔！ うっすら額に皺が出来ちゃってるよ！

「この方は私の友人ですっ。私のことを思って、心配して助けに来て下さったのです！」

ちょおおおおおい、銀姫様！？ 可愛い顔して、なに堂々と嘘言っちゃってんの！？ 嘘つきは泥棒の始まりって知ってらっしゃる！？ 美少女だからって、許されると思ってましてえええあああああ、黒服が分裂した！ じゃなくて、別の黒服がもう一人現れた！ あうあうあう、新たな黒服は大きい。もうね、明らかに体鍛えてます、筋肉愛してますって感じで、服がパンパン。さっきから筋肉の遭遇率ハンパない。王都ってさあ、美形率高いけど、筋肉率も高いよね。極端すぎるぞ！

「さあ、帰りましょう」

「嫌ですっ。また、ベッドに縛り付けるのでしょうか！」

はい？ ベッドに縛り付ける？

「旦那様のご命令なのです。我が儘を仰らないでください」

旦那様のご命令……。

「抵抗するならば、力づくでも連れてこいとの仰せです。縄で縛られたまま、帰りたくはないでしょうか？」

「素直に戻っても、どうせ縄で私を縛り付けるくせに！」

縄で縛る……。

おかしいなあ。夜の女王様のお姿が浮かんでくる。最強の三種の神器を装備して、さらに新しい神器を装備した夜のお姿が……あれ？ 新しい神器の装備って、夜の女王様じゃなくて鉄——……ないでーもないっ。想像してないっ！ セーフ！

「もう十分満足したでしょう！ これ以上の無理は許しませんっ、戻りますよ！」

苦労性の口調が荒くなる。

肩に置かれた白い手が、びつくと震えた。

こら、苦労性。銀姫様を怯えさせるとは、それでも男か。

「ちょっと待ってください。彼女の言い分も、きちんと聞いてみてはどうですか？ 黙って聞いていれば、彼女があまりにも可哀想です」

「よそ者が口を出して良い問題ではない。どけ」

たしかによそ者だけど！

「同じ女として、変態ジジイ……じゃなくて、い、いくら仕える主人の命令だからって、彼女が変態趣味に付き合わされるのを、黙ったままでいるのは嫌です。見過ごせません」

「変態ジジイ……ぷっ」

後ろから笑い声、前からは猛烈な怒り。

自分が何を言ったのか、わかっている。おかげで黒服の二人がとーっても怖い。だけど素直にどいてたまるか、このやるー！。

私の手を握り締める、柔らかい手を振りほどけるか、ばかやるー。負けねえぞ、苦労性と筋肉！ こっちはなあ、お前たち以上の怪物と対峙してきたんだ。怪物に比べれば、まだいけそう！ ……かも。

……ちよい、自信がなくなってきた。

「貴様っ、旦那さまを愚弄したな！ どこが変態だ！」

「縄でベッドに縛り付けるなんて、変態以外なにがあるんですか！ 彼女は玩具じゃありません！」

柔らかい手が応えるように、強く握りしめてきた。

「無礼者め！ 手を離せっ！」

「ちよっつつ、痛い！」

苦労性に腕を掴まれた。強く引つ張らないで！ このやるう、銀姫様の手を離してたまるか！ こらー、筋肉！ 銀姫様に乱暴に触

れるなー！　って、いたたた。腕をひねらないで、苦労性！

「いい加減に、やめ——っ……え？」

ふいに腕が軽くなった。あれ？　なんで——……あら、やだ。メドウーサ様、いつからそこにいたの？　相も変わらず、足癖悪すぎだぞ、お前はよおおお！　どうどう、落ち着け！　どうどう！

苦労性、口から涎垂らして気絶してる。ねえ……ちゃんと手加減したよね？　悪魔人化してないから、まだいいんだけどね。それでも、おっとろしいのよ！

一瞬、苦労性の腹部に膝が深々とめり込んでいたような……骨折れてる？　いやいやいやいやいや。さすがのメドウーサ様も、そこら辺は気を使っていますよねー？　生身の人間なんだからっ、その筋肉にも、ちゃんと手加減——。

パン——ッ。

筋肉の顎に蹴りが入っちゃった。あーもう、綺麗に後ろから倒れたじゃない。しばらくの間、目が覚めないよ。どーすんの？　重いから筋肉、運べないよ。このまま放置するの？

「大丈夫か？」

「あ、うん、大丈夫」

頭は大丈夫じゃないけど。ハゲそうで心配になる。ああもう、よけいハゲそうだわ……。

クラインの視線が、銀姫様に移動した。目が大きく開いて、びつくり顔。うんうん、わかるわかる。すごい美少女だもん。ふわふわな銀色の髪に、くりつとした大きな青い目、柔らかそうな白い肌。おとぎ話のお姫様が、ぼんつと飛び出したって思うよね。守りた

いような気持ちにさせられる。私もそうだし。騎士団長なら、私以上にそう思っているはずだよ。

……嫌だな、胸が痛い。理由がわかってるから、余計ズキズキ痛みが大きくなってる。銀姫様が何かをしたってわけじゃないのに。

クラインの手が別の誰かの手を握って、別の誰かに微笑んで頭をなでたら――……私のほか、あほ。そんなの、クラインの自由じゃない。子供じゃないんだから、クラインの思うようにさせればいい。

私は解呪薬を作って、終わったら帰るんだから。お店もあるし、みんなが待っているし。

クラインが誰かを好きになって、誰かと結婚したとしても、私には関係ない。

諦めて逃げたんだもの。クラインの隣に堂々と立っていられる資格なんて、持っていない。

でも、結婚式には呼んでほしいかな。それまでには気持ちも、さっぱりしていると思うし。

……だというのに、

「貴女は……」

「もふもふは見つけたの？」

むりやり視線を、こっちに向けさせた。何やってんの、私。さっぱりどころか、めらめらじゃねえか。

女神様と銀姫様の視線が、恥ずかしいくらい痛く感じる。穴があったら入りたい。

そーゆーことじゃないんだよ、お二方！ もふもふが心配なのは本当だから！ お願い、そんな澄んだ青い目で見ないで！

「ああ、見つけた。ただ、少々やつか――」

「いたぞっ!」

わっ、別の黒服たちがこっちに走ってくる。逃げようっ。あつ、でも、もふもふが。でも、黒服が! どないしろ!?

「こちらですっ!」

クライン共々、銀姫様に引っ張られた。意外に力ありますね。ちよっと、こけそうになった。

「お待ちくださいっ!」

苦労性が震えながら、頑張って起きようとしている。クライン、ちゃんと手加減してくれたのね。悪魔人を見たから、少し心配だったの。

走りながら、クラインが首をかしげた。

「どうして逃げるんだ?」

「あいつら、彼女を変態ジジイのところに連れ戻そうとしているの。戻ったら、縄でベッドに縛り付けるつもりなの! 酷いでしょ!」

そんなのは、鉄物で十分よ! そうよ、鉄物は人間じゃないっ、鉄物で十分!

「変態ジジイ……ベッドに縛る……」

クラインは黙ってしまった。

……ねえ、まさか変な脳内想像をしているんじゃないでしょうね？ 縄で縛られているのはベッドじゃねえだろ。笑顔で聞いてやるから言つてごらん。みなぎる拳一つで許してやる。

ふいに、クラインは真剣な眼差しで、

「エレン、その方は——」

「そこまです」

急に抑揚のない静かな声が聞こえた。ぴたりと銀姫様の足が止まる。つられて私たちも止まる。

目の前に、髪も服も全身真っ黒の男が一人立っていた。さっきの黒服と同じ服装。だけど雰囲気がちよつと違う。まあ、筋肉ばかり見ていたせいで、感覚が麻痺してるのかも。

目の前の人は、背筋を棒のようにぴーんと真っ直ぐ伸ばして、すらりとした細身の体が黒服を綺麗に着こなしている。

格好いい……とても良い男なのはわかる……んだけど、細い銀縁眼鏡の奥が、すんげー怖い。

ハインズ様と同じ細い目をしてる。でも、あの人はそこまで怖くない。

じつと、こっちを見ている目は、なんだか鋭利な刃物を眺めているように思えて、とーっても危ない。

「ヒューリー……」

どうにか聞き取れるぐらいの小さな呟きなのに、眼鏡男は聞き逃さなかった。どんな地獄耳をしているのか、不思議に思うよりも、怖い気持ちの方が大きい。

静かに微笑む顔は優しいのに、どこにも隙がなかったから——。

銀の姫 2

怯えさせないように、にこやかに微笑んでいるけど、銀姫様を見てごらん。体がふるふる震えて可哀想に……追いつめられた子ウサギになっています。

「お戻りください」

「い、いやです……」

「お戻りください」

「もう少し……」

「お戻りください」

「……」

強え。眼鏡強い。銀姫様を押し黙らせた。見た目は優しくそうなのに、苦労性や筋肉がまだマシに思えるから不思議。あの二人は外見が怖い。こっちは雰囲気そのものが怖い。

この人から逃げるのは難しいぞ。銀姫様が無条件で怯えているし、どうしたもんやら……って、ん？ 銀姫様、どうしてそんな潤んだ瞳で見てるのかな？ ……いやいやいやいや、無言のお願いをされても困ります。

でーすーから、祈るように両手を組んでもね……まいったなあ。

もっかい目の前の眼鏡をじっくり見る。

にこにこ笑みを崩さない……ていうか、顔のパーツがぴくりとも動きません。その顔は仮面か？ 仮面じゃねえだろ。

うん。一つだけわかったので銀姫様に、にっこり笑顔。

銀姫様も、つられてにっこり。

どうか、この想い。銀姫様にこっそり届け！。

「無理です」

「お願いしますっ」

届かなかったか……。

お願いされてもですね、アレの雰囲気は獲物をねらう飢えた肉食獣ですよ！ 笑顔にっこにっこだけどね、約一名が妙な感じで反応しちゃってんの。ほら見て、ほら！ あと一本でメドゥーサ様の出来上がりよ！

ただならぬ雰囲気を感じていると思う。私も、あの眼鏡怖いもの。

「彼を乗り越えたら、他は簡単です。頑張りましょう！」

いやいやいやいやいやいや。頑張りましょうって、エライこと仰らないでください。つかね、さっきのどこが簡単だったのか、ちょっとばかり聞いてもいい？ メドゥーサ様がいなかったら、縄で縛り付けられてましたよ。銀姫様はベッドでしょうけど、私は堅くて冷たい牢屋だぞ。

それに、アレを乗り越えるって言うてもねー……やっぱり無理なんじゃ……。

「見つけたぞ！」

ぎゃー！ 黒服団体様、いらっしやいました！ あっ、苦労性復活してる。筋肉はいないや。

あ、ちよっと！ ひえええ、囲まれた！

「ひゅ、ヒューリーさん……」

苦勞性が眼鏡を見たたん、顔を引きたらせた。眼鏡より大きい体が縮こまっている。やーだーな！。

「所用から戻ってきたら、いなくなったと聞いたものですから」

「申し訳ありません」

黒服全員、眼鏡に頭を下げた。同じ服なのに、なんなの？ やっぱり眼鏡別格扱い？ だよ、だよ！

「お嬢様、無関係の方に迷惑をかけてはなりません。帰りましよう」

なんつつつた、眼鏡？ オジヨウサマ？

「お、おお、お嬢様ああああ！？」

それは銀姫様のことですよ！ やややや、やっぱり、お貴族様でいらっしやいましたか！ ははー、平にご容赦を！

あ……あれ？ 銀姫様、急に不安顔になって、私にかしでかしちゃいましたー！？ ひいひい、黒服軍団が睨んでるー！ わわわ、私、銀姫様には何もしてないよ！

「旦那様との約束を破るおつもりですか？」

「それは……」

ねえ、眼鏡……旦那様ってさあ……もしかしくても、もしかして、ですか？

「っ……先に約束を破ったのは、お父様ではありませんか！」

………はっ！ 今、天国の階段を歩いてた。

天国って遠いねー。ずーっと下りても下りても、しっぱの先すら見えなかった。あれ？ 天国の階段って下りるものだったけ？

もうね………もう………駄目だああああ！ オワタ………頭下げて、はいオシマイどころか、まさに終わり！ 最後に（Fin）とかついちゃうじゃない！

お嬢様の前で、堂々とお父様を変態ジジイと言ってしまった。顔の筋肉が麻痺して、唇が引きつる。

「お嬢様、帰りましょう」

苦労性が一步前に出る。

銀姫様はぎゅっと私の体を抱きしめた。思いつきり、力強く、手加減なしで……私、死にます。今日いろんな意味で死んじやいます。

「お嬢様！」

「嫌です！」

ぐぐぐ、ぐるじい……カニになっちゃう。ぶくぶく口から泡が出るんですけどー。誰でもいいから、止めれ。ねえ、隣の女神様！

「いつまでも、そんな素性の知らない輩と一緒にいては……」

銀姫様の突き刺す激しい視線に、苦労性が一步後ろに下がる。うん、私の魂もあと一步だ。

「この方たちは、私の友人です！」

堂々と、自信満々に宣言しちゃってますけどね。友人どころか、今ばったり出会った見ず知らずの人なんですよ！ 名前も知らない

相手に、簡単に友人とか言っちゃ駄目です、銀姫様！

こちら暇な田舎のぐーたら魔法薬剤師です！ 貴族様と友人だなんて、恐れ多くて緊張死するっ。

やべえ、あと半歩で魂が……あ、女神様がようやく気づいてくれた。こちら、私はロールケーキじゃないぞ。まあ、いいんだけど……魂をぐるぐるまいて、押し込む押し込む。助かった。

「お嬢様、嘘は……」

「本当に私の友人なんです！」

苦労性は全然信じてない。そりゃそうだ。バレバレだもん。

銀姫様は眼鏡に振り向いた。

「この方は私の友人です。私の大切な友人なのです、ヒューリー」

信じてください——最後の呟きは声になっていなかった。こぼれ落ちたような、ささやきに似た願い。

必死に銀姫様は私にしがみつく。

えーっと……どうしよう。これじゃ、むやみに銀姫様から離れられない。しかし眼鏡が怖い。

ん？ クラインがじーっと見てる。さっきから銀姫様のことが気になってるよね。何か言いたそう。

……お願いだから、変なことだけは言わないでよ……やっぱり何も言わないで！ とつても不安だから！

「私の使命は、お嬢様をお守りすることです。お嬢様がご友人だと仰っても、信を得ない者を側におくことは許されません」

にこにこ顔の眼鏡は、銀姫様の願いをけっ飛ばした。わかるけど

言い方つてもものがあるでしょう？

眼鏡の言葉に同意した黒服軍団が、じわじわと近づいてくる。

ねえねえねえ、落ち着いて！　なに銀姫様を傷つけようとか、そんなことアリンコもミジンコも思っていない！

あわわわ、前も、横も、後ろも逃げ道がない。

「金髪の女には気をつける。見た目に騙されるな。それからお嬢様には絶対に傷を付けるなよ」

じりじり、じりじり、黒服が迫ってくる。

ぎゅっと銀姫様を抱いた。くそう……女の子一人に屈強な男ばかり集めて、力づくで連れて帰る気満々じゃない。少しは銀姫様の気持ちを聞いてあげてもいいんじゃないの！　こら眼鏡、何をそこでのんびり見てるのよ！

「ちょっと、その人！」

「私、でございますか？」

眼鏡めえ。そのにこにこ顔、もはや許せん！　だんだん、むかつ腹立つてきた！

「あなたはさつき、お嬢様を守ることが使命だと言いましたね？」

「はい」

「信じられない者を側におけないとも言いました」

「そうです」

「なら、彼女の意志は誰が守っているんですか？」

眼鏡は答えなかった。

「信じてくださいと願った言葉を、あなたは聞いたんじゃないんで

すか？」

絶対、聞こえてた！ 答えろー！ んで、銀姫様に謝れー！ して私たちを解放しろー！ じゃないと、もふもふが——どうしてるの、もふもふー！？ あーもうっ、こんなことしている場合じゃないのに！ この眼鏡めっ！

じーっと眼鏡を睨む。

今日は朝から、いろいろすごいものを連続して見てきたんだ。お前のにこにこ仮面顔なんか怖くね、え……うほほっ！？ 眼鏡の目がずっと開いたよ、開いちゃったよ！ 細い目がこっち見てるー！

「お嬢様から離れる！」

黒服の手が伸びる。

触れようとしていたのに、彼は空を飛んでいた。女神様が投げ飛ばした。襲いかかる黒服たちを、ちぎっては投げ、ちぎっては投げ。顔がメドウス様じゃない。いつもなら容赦なくバンバン蹴っていたのに、それが無い。手加減しているんだ。投げても投げても、黒服たちは女神様に突撃する。

「きゃっ」

銀姫様の悲鳴に、体がびくつと跳ねた。なに？ あ、苦労性っ、いつの間に銀姫様の腕を！ このやろー、その手を離せえええ。うりゃ、みなぎる力の頭突きー！

ゴスつと決まった……のはいいけど、痛ったああああ！ 痛い痛い！ 駄目だ、みなぎる頭突きは危険すぎる。苦労性が顎を押さえて悶絶しているけど、私も頭を押さえて悶絶中。

いたたた。たんこぶ出来たらどうしよう。

「大丈夫ですか!？」

「あ、うん。なんとか……」

軟膏をぬっておけば大丈夫でしょ。ぬりぬり、つと。

それにしても黒服さんたち、めげないなあ。なんかね、当初の目的忘れてるっぽい。目的が銀姫様じゃなく、女神様になってる。必死で捕まえようと躍起になって、私たちおいてけぼり。クライン、頑張れ!。

「ごめんなさい」

「はい？」

銀姫様は顔を伏せていた。

「こんなことになって……あの、私、そんなつもりじゃ……」

「友達なんですよ」

「え？」

涙で潤んだ青い目は、ちょうど真上の空と同じ色。信じられない顔で銀姫様は私を見る。

空の目に映る私の顔は笑っていた。ついでに髪の毛ぼっさばさ。

お風呂入りたーい。

「友達が困っていたら助けないとね。出来ることは限られているけど、まずはあの眼鏡をぶん殴らないと」

「眼鏡って……」

じつとこっちを見ているアレですよ、アレ。言いたいことがあるんだったら言いなさいよ。

「人の気持ちを蔑ろにする、あんぽんたんには殴ってやらないと気が済まないわ。あなたは人形じゃない。都合のいいようになんて、とんでもないワガママよ。話す気がないなら、殴ってでも話させてやる。あなたの気持ちを知らずに、むりやり黙らせるなんて許せない。人をなんだと思っているの!？」

そんな細目で睨んでも怖くないぞー! このやろーばかやろー!

「ただ守るという使命に縛られてっ、銀姫様のこと何も守ってないじゃないの!」

「いい加減にしろっ、女ア!」

また、デジャブだ。

苦労性が叫んだ。唇から血を流して、さっきの頭突きで切れたんだ。

大きく振り上げた拳を前にも見たことある。石の塊に似た凶器が襲ってくる。

銀姫様が強く、強く、抱きついた。

黒服たちに体を抑えられていた女神様が、一瞬にしてメドゥーサ様になった。お前はよお……うわぁ、問答無用でげしげし蹴ってる。

クラインが慌てて走ってくる。

でも、ちよっと間に合わないかも――。

とんと、ノックをしたような軽い音が聞こえた。でも、音自体は少し鈍かったような……。

「血を見た程度で己を見失うとは、見かけによらず心が弱い」

苦勞性が拳を振り上げたまま倒れた。彼の後ろには眼鏡が立って
いて——って、んなー！　んなー！　眼鏡ってば、いつ、あっちか
らこっちに移動したの！？　始めの一步って距離じゃねえんだぞ！
うはあ、ちーかいー！

「……彼は？」

心配顔の銀姫様に、眼鏡はにっこり。

「少々眠っているだけでございます」

眠っただけって……苦勞性の目が白い。これって眼鏡がやったん
だよな……ごくり。

クラインが庇うように私たちの前に出ると、眼鏡は突然深々と頭
を下げた。

「申し訳ありません、お嬢様。そしてご友人の方々。数々のご無礼
を致しましたことを、お許してください」

「ヒューリー……」

え、や、急になにこと？

眼鏡が変わりすぎて心地悪い。さっきよりは話を通じてくれそう
な雰囲気だけど、こつちも態度が変わると異じやないかって疑ってし
まう。

「しかし、旦那様との約束は守っていただかないなりません。私
どもはともかく、お嬢様が旦那様に叱られてしまいます。どうか屋
敷にお戻りください」

「でも……」

じつと銀姫様が見つめてくる。

「ご友人の方もご一緒に、客人として屋敷に招かれてはいかがでしょうか？」

なんですと！？

銀姫様の顔が花開いた。笑顔満開なつて嬉しそう。

「ええ、ぜひ！ 当家へ来てください！」

「ありがたい申し出ですけど、私たち用事がありまして……」

暴れる白い野獣を探し、止めねばならぬ強い使命があるのです。

断るそぶりを見せたら、銀姫様の顔から花が消えた。そんな悲しそうな顔で見ないでくれー！

ひー！ 断るに断れない！ どうしようと、クラインに目で訴えかけようとしたら、ヤツは銀姫様をじつと見つめていた。

そんなに銀姫様が気になるのかよう……うつつ。

「僭越ながら、貴女様にお願ひしたいことがあります」

「私に出来ることでしたら、遠慮なく仰ってください！」

握り拳をしたままの強気な銀姫様。あー、可愛い。

「ありがとうございます。実は探している白い子犬が先ほど、とある屋敷に入っていくのを見てしまいました。それで少し困っていたところなのです」

なんですとー！？

もおおお、ふううつ、もおおお、ふううつうつ！ やっち

まったのかああああ！ くっ、血の涙が出そうだ。せめて遺言を書く時間はくれ。

「私たちが正直に話をしても、門前払いにされてしまうでしょう」「その屋敷はどこでしょうか？」

眼鏡が聞いてきた。信じてくれるのはありがたい。でも、私の未来は決まっちゃったか……。

「赤い屋根の大きな屋敷です。正門には羊のレリーフが……」「それは当家の屋敷です！ ちょうど良かった！」

なんですとー！？ 神様あああ、今日から毎日、朝昼夜とお祈りしますううううう！

「お嬢様。失礼ながら、ご友人のお名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「な、名前ですか……」

困り顔の銀姫様が、ちらりと見上げてくる。
わかってますとも。

「エレンと申します。こちらは、ク——」

ラインはまずいよね。えーっと……。

「クラリスです」

そうそう、クラリスクラリス——って誰だよ、クラリスって！

「私はヒューリー・フロストと申します。エレオノーラお嬢様の世話役、バークワース家の執事を勤めさせていただいております」

ん？ バークワース……どっかで聞いたような。

バークワース。

バーク……ワース……。

……。

「ばっ……バークワース!？」

王都宰相様じゃないですかあああああ！

なにナンバー2の家に突撃しちゃってんのっ、もふもふー！

銀の姫 3

……ン……レ、ン……。

「エレンっ」

うおっ！ びっくりした！

急にのぞき込まないでよ、女神様！ 心臓に悪いじゃないの、も
うっ！

ん？ 首をかしげてどうしたの？

「さつきから、ぼうつと空を見ているが、大丈夫か？」

「あー……うん。大丈夫。空を見ていたんじゃないってね」

目の前の正門を見ていたの。頑丈そうな銀色の格子に、一本一本細かく丁寧にバラの彫り物がされて、すごく綺麗。うんうん、職人技に惚れ惚れしちゃう。遠くから見たらバラ園だもん。さすがお金持ちは違うなあ。

だってさあ……巨人でもいんの、この家？ それとも竜を飼っているとか？ バークワース家なら、架空のペットでも普通にいそう。いくらなんでも大きすぎ！ でら大きいを超えた！ でらの次は何になるのよ。でらでら大きい？

クラインが言ってたヒツジは、あれか。

正門の中央上。二頭のヒツジが背中を向かい合わせて、ジャーンプ……なんだけど、すごい違和感を感じる。

ヤギならわかるけど、ヒツジねえ………もしかしたら口を動かして

いるか、横になつて寝ているか、倒されて刈られているか。軽やかさは無縁なイメージしかないわよ。

あのふつかふつか毛って、見た目以上に重いんでしょ。あんなウサギみたいなジャンプは無理でしょー。足が細くて折れちゃうってつかね、クライン。なんでバラよりヒツジなの？ 食い物目線かよ、この食いしんぼう女神様め。恥ずかしい……。

ずっと見上げていたから、首が痛くなってきた。

正門がでらでら大きいから、敷地を取り囲む鉄柵もでら大きい。簡単によじ登れる高さじゃない。ハシゴを持ってきたても、たぶん無理。

鉄柵のてっぺんには、とんがった槍が光っているし……こええ……。

正門の奥には、円形状の中央広場がある。

広場には天使の像があつて、その奥には赤い屋根の屋敷が見えるけど、遠いなあ……あっちまで歩くの、しんどそう。

銀姫様は妙に張り切っていて、ちらりと見れば——うんうん、歩く気満々。

眼鏡……もといヒューリーさんが馬車を呼ぶって言ったのに、どうしても自分の足で歩きたいと言つてねー。本人を前に、あんなことを言つた後だから、銀姫様の気持ちを蔑ろにはできないしー。

だからかな。めが……ヒューリーさん……い、言いにくい。ごめんなさい、眼鏡と呼ばさせていただきます。

眼鏡も、あつさりと銀姫様の気持ちを受け入れたんだよね。

おかげでここに来るまで、私の片腕は銀姫様に占領されちゃった。ぎゅっと抱きしめて可愛いからいいんだけど、正直……歩きにくかった……あと腕が蒸れてる。

離れてくださいって言いたくても、黒服に包囲されている状況じや言えないよねー。眼鏡はともかく、ヤツらは納得できない顔をしていたもの。

ついたらついたで、門の前には新たなごつい黒服が四人。ねえ……見た目だけ、ふつーな人は眼鏡だけなの？ いい加減、筋肉見あきた。

門番だよな。全員それらしく顔つきが濃い。んで、全員正方形顔。顔中傷だらけの人もいるし、私のような小心者は見ただけで素通り決定。目をあわしたくない。変な因縁つけられそうだもん。

「旦那様は、お帰りになられましたか？」

眼鏡の言葉に、傷の人は軽く頭を横に振った。銀姫様のお父さんは、昨日の夜から王城に行ったきり戻ってきてないんだって。

うーん……今は忙しいと思うよ。宰相様なら、なおさらでしょ。舞踏会に、婚約発表。シーヴの王子様が来るかもしれないし、来ないかもしれないし。そのシーヴがうさんくさいし。ピンク野郎は見つからないし、クラインの服装がエロやばいし。

門番どもめ、クラインを見て顔を赤くしてる……八つの視線が胸に一点集中。なにこの敗北感。

大声で、おーとーこーでーすーよー！ と叫びたい。ちくしょー！

うさんくさげに私を見るな、傷の人。首をかしげて「子供？」とか、よけいなお世話だ。このやろーばかやろー！

隣ははりぼてだけど、私のはちゃんとした本物なんだからー！
うわーん！

「ヒューリーさん、この者たちはいったい？」

困惑顔の門番に、眼鏡はにつこり。

「お嬢様のご友人でいらっしやいます、エレン様とクラリス様です」
聞いて門番の顔が、ますます渋くなる。顔が、うつそだーって言うているもの。私も、うつそーと言いたいよ。エレン様と呼ばれる日が来るなんて思いもしなかった。

うわー、鳥肌が立ってきた。
クラインは慣れているからいいけど、私は様なんて慣れてないから、体がかゆくなる。

とても嬉しそうな銀姫様に門番たちは何も言えず……ぶっちゃけ、眼鏡の笑顔が静かに黙らせている。

だってねえ……。

「何か問題でも？」

「ありませんっ」

ほらね。

いそいそと、四人の門番たちは重い正門を開けた。一人でも、二人でも、三人でもだめ。お家に帰るのに、ごつい筋肉が四人も必要だなんて……すごいを通り越して、めんどくさーい。

「参りましょう、お姉様」

「はぁ……」

気軽におっしやいますけどね。ごらんとおりの田舎者なので、足が震えているのですよ。

貴族の中の貴族様。バークワース家の敷地を踏むことが、こんな

にも苦痛だなんて思わなかった。

じーっと、黒服たちや筋肉門番が見ているから、ものすごく心配……ねえ、ほんとにほんとに何もしない？　嘘ついたら、メドウーサ様召喚しちゃうぞ。

あと、さらりとすんごいこと言いましたね、銀姫様。こっちは半ばパニックしているけどね、だからといってスルーはしねえぞ。

「どうしました、エレンお姉様？」

首をかしげる銀姫様をまねて、同じ方向へ首をかしげた。顔はもちろん、にっこり笑顔。

「あの、おねえさまって……？」

なんででしょう？　と聞く前に、しゅーんと銀姫様はしぼんだ。

「ご迷惑でしょうか？」

「ご迷惑もなにも、どーしてしぼんじやうんですかー！？」

きゃー！　ちよっと眼鏡！　その動かない笑顔が怖いっつーの！　おまけに黒服たちの視線が突き刺さって、体中ちくちく痛い！　私、何か悪いことしましたかー！？

「お嬢様。エレン様は一言も、ご迷惑とおっしゃっていません」

そうです。眼鏡の申すとおりです。

「実の姉でもないエレン様が、突然そのように呼ばれて戸惑っているだけでございます。ですから、エレン様」

急に名前を呼ばれて、心臓が飛び跳ねた。

笑顔につこりで見つめてくる。それがねー、なんだか蛇に睨まれているよーな気がするんですが……。

「お嬢様はエレン様を強く慕うあまり、そのようにおっしやいました。エレン様なら、お嬢様のお気持ちを大切になさると、私は信じております」

最後の部分だけ強調したよね。断ったら、ただじゃすまねえぞつて心の声が聞こえた。

やだなあ、眼鏡つてば。顔の筋肉がマヒしちゃうじゃないの。

銀姫様が私のことを好きでいてくれるのは嬉しい。私も銀姫様のこと好きだもの。

でもね、バークワース家のご令嬢という立場が重すぎるのよ！バークワースって聞いただけで、高飛車貴族が頭を下げる威力を持っているのよ！どこかので大きい家がジャマだなぁって呟いただけで、砂地になるとか言われてんの！噂では国王様も宰相様に逆らえないとか……さすがにそれはないよねー。

だから心のどこかで、貴族を信じることができない自分がいる。暇つぶしに遊ばれているんじゃないかって、疑ってしまう。

おもしろい玩具があったら、つい遊んでしまう悪い癖があるもの。

それに会ってすぐに友人で、お姉様って……貴族の常識は庶民の非常識。まさにそのとおりだね。

丘の上の貴族が庶民に頭を下げるなんて、聞いたことも、見たこともない。

こういった場所は苦手で、ただでさえ不慣れなのに下手なことを気づかずに言ったら……考えるだけで恐ろしい。

でも、銀姫様の空の目は綺麗に澄んでいる。みんなから大切にされてきた証拠がその中にある。

疑う必要はないって、自身が自分に言ってくる。

大切にされて。大切にされすぎて……考えてみれば、こんなでらでら大きい屋敷にいて、お父さんが宰相様でしょ。んで、眼鏡を筆頭に厳つい筋肉ばつかりに守られていたら当然、息がつまるよね。

私だったら何回も逃亡しちゃうな。ストレスでハゲそうだもん。

銀姫様は例えるなら、かごの中の小さな鳥ね。

飛びたくても、飛べなくて。本物の空がうらやましかった。だから逃げ出した。

きつと、つかの間の自由が欲しかった。

「あの、お姉様とお呼びしても？」

「はい。喜んで」

可愛らしい笑顔を見せてくれるなら、お姉様もいいんじゃない。眼鏡に気をつければ……不安……ええい、女は度胸！なるようになれ、だ！

「お嬢様。エレン様とクラリス様は、大切な子犬様を捜しにいらしたのです。ですから」

眼鏡よ、もふもふに様はいりません。実物を見たら、がっかりします。そんなご大層な顔じゃありませんから。むしろ、ちよつと馬鹿にされている気がするぞ。

「そ、そうですね！ ヒューリー、お願いします」

眼鏡は頷くと、黒服たちに指示をだした。

筋肉むきむき集団に告げた内容が、もふもふを探せ！　だなんて、本当にごめんなさい。睨まないでください。うちのもふもふは、しつぽが全力回転したら止められないんです。つか、アホの子が掴んでくれたら、こんなことにはならなかったのに。

それはそれで、銀姫様と出会えなかったから複雑なんだけど……え、なに？　もしかして、もふもふに感謝しなくちゃいけない？

「エレンお姉様、行きましょう」

るるるるると鼻歌まじりで引つ張られた。

本当に大丈夫かしら？　ちょー不安。

銀の姫 4

はへー。

敷地の中に入って初めてわかる、このでらでら大きさ。ごめん、でらをもう一個増やしていい？

白い石畳の道が、ずっーと屋敷まで続いている。両側は林になって、家族連れのリスが横切った。可愛いー。

へえ、ちゃんと手入れもされてい——あ……ああ、あれはまさか天使の痕跡！

うそっ、ほんとに！？　いくら何でも凄すぎるっ、超貴重樹じゃないの！

天使が地上に舞い降りると、木が真っ白になる。

まあ、そんな逸話があるから天使の痕跡って呼ばれているけどね、とーぜん天使なんていないわけでして……。ごくたまーに、奇跡的に白い木が地上に現れるの。原因はわからない。環境の変化で突然変異したって説が、今のところいちばんの有力視説ね。

天使の痕跡になった木は、同じ木に比べて脆く枯れやすい。見るだけで奇跡と言われているから、別名願いの木とも呼ばれ——。

大きくなりますように、膨らみますように、立派な山二つになりますように。絶壁から卒業できますように！

よしっ！

だけど初めて見た。うわぁ、感動で胸一杯だよー。

本当に巨人や竜でも出てくるんじゃないの、この家。

んで、舞い降りた天使様は、中庭にいる二人の天使様かな？

双子の天使様だ。髪は短いし、顔はそっくりだし。

一人は椅子に座って、手を上に伸ばしていて。もう一人の天使が立ったまま、伸ばされた手を掴んで正面を見据えている。

天使って、たしか中性だよな。男でもなく、女でもなく。

でも……どこことなく座っている天使は女性に、立っている天使は男性に見える。雰囲気のせいかな。

それにね、二人が持っている花に見覚えがあるの。お祖母ちゃんが大切にしていた花とそっくり。

屋敷の玄関前までくると、馴染みのある声が聞こえた。ヤツですよ、ヤツ。

「きゃん」

コイツ。

嬉しそうにしっぱ振ってさあ、私の命をどれだけ削り取ったか、わかってんの？

あーあ、体が土だらけじゃない。モグラにでもなっちゃったの？

「この子が、エレンお姉様の探している子犬ですか？」

「はい」

あやまれ、もふもふ。銀姫様にあやまるんだ！ ええい、悪気のない無垢な顔をして！ 銀姫様がいなかったら、本当にヤバかったのよ！

「あつ、くらー」

まーた、どつかに走っていった。

まーた、隣の女神様は何もしてくれなかった。もういいよ、おまえ。何かあったら女神様のせいにしてやるから。

今度はすぐに戻ってきた。なにかをくわえている……なに、それ？

「小瓶？」

ちよい貸しなさい。

縦長の小さな瓶。フタがないから、瓶の中にまで土が入っている。てことは、掘り起こしたのか……おまえって子犬様はよおおお！ 貴族様のお屋敷でも、ボスを発揮すんじゃないよう！

まったく……ん？ 瓶から匂いがする。

くんくん。

うん、もふもふのしっぱが全力回転しちゃうわー。この瓶から、甘い焼き菓子の香りがするもん。

香りそのものは強くないんだけど、もふもふの鼻は甘いものだけに優秀すぎるから。意地汚い食い意地根性ってやつ。

それにしても珍しい。焼き菓子の香水なんて初めてだもの。こんな匂いを体につけて喜ぶのは、もふもふぐらいなモンでしょ。蟻が来そうで嫌。

うーん……なんだろう？ 腑に落ちないというか、すつきりしないというか……匂いの材料がわからない。むー、まだまだ勉強不足か。

でも、匂いに違和感があるよーな……混ぜりものっぽいよーな……ああ、もう！ 焼き菓子の匂いがジャマ！

「見つかってよかったですね、エレンお姉様」

「へ？ あ、ええ」

おっと、つい集中しちゃった。

銀姫様には、お礼をいわないとね。

「エレオノーラ様のご厚意に本当に感謝しています。ありがとうございます」

頭を下げたら、すねられた。なんで？

「友人ですから、様はいりません。エレオノーラと呼んでください」

無理です。断固として出来ませえええん！ なにを真顔で、死刑宣告を平気でいっちゃうのかなー？ この銀姫様はよーう！

たしか、宰相様のお嫁さんは王族だったよーな記憶が……。

呼び捨てと同時に不敬罪で牢屋行きでございます！ そんな恐れ多いこと出来ませーん！

「ね、エレンお姉様」

ね、じゃねー！

「ねっ」

とうとう、笑顔押し押し作戦と来やがりましたよ！ 死にたくないー！

「お嬢様」

眼鏡っ、ナイスタイミング！

「そのお話は屋敷の中でいたしましょう」

「ばっきやるー！ 止めるよおおお！ 完全に暴走してるでしょー！」

「そうですね。エレンお姉様、行きましょう」

「屋敷に入るのが怖い怖い怖い。入っても死刑、断っても死刑。どーしろと？」

「いえ、お嬢様。その前に、お二人には行くべき場所がございます」

「やっぱり牢屋でございますかー……」。

「で、これはどーゆー……」

「お二人の体を清めよと、お嬢様のご命令です」

「一分の隙もないメイド長さんが仰いました。」

「場所は巨大お風呂場でございます。お風呂つていえね、三日に一度、近所のお風呂屋さんに行く程度なんだよ。一般家庭にお風呂なんてねーぞ。普通は鳥の行水ですよ。」

「足下からもふもふが吠えると、メイド長さんにはっこりと笑って、」

「むろん、あなた様もでございます」

「おい、自慢げに胸を張るな、もふもふ。贅沢な子犬様めっ。」

「さあ、服をお脱ぎくださいませ！」

手をにぎにぎさせて、メイド長＋メイド集団の目が怪しく光った。
ヤバイ……私はともかく、クラインがやべええええええ！

ちらりと女神様を見れば、どんなに走っても出てこなかった汗が浮き出ている。じりじりと迫るメイド集団に後ずさっていた。さすがの女神様も、手も足も出せないよねえ。

メイド長が一步、前に。

クラインが一步、後ろに。

意外とおもしろい……なんて、ぼけっとしている場合じゃない！

「すみませんっ！」

二人の間に入った。

「彼女は極度の恥ずかしがり屋で、人見知りが酷いんです。気を悪くするかもしれませんが、心許さない相手に裸を見せると緊張のあまり気を失ってしまうんです！」

な
ー
ん
て
ね。

嘘をついてごめんなさい。

本当は……彼は極度の暴れん坊で、足癖が酷すぎるんです。気を悪くすると、心許さない相手にメドゥーサ顔を見せ、恐怖のあまり気絶する人がでるんです——って言えないもの……。

「しかし……」

「お願いします。私たちだけにさせてください」

深々と頭を下げた。変態——！と騒がれては困る——！

「クラリスからも、お願いしなさい」

って、言ってるのに返事なしか、おまえ。
まさかと思うけどね……。

「ねえ、クラリスちゃん。緊張しているのはわかるけど、きよろきよろしない」

自分で名乗っておいて、てめえ、もうボケたか。みなぎる力で頬をつねってやる、このっこのっ。

クラリスちゃんと一緒に頭を下げてお願いすると、しゅしゅ顔でメイド長およびメイド集団は引き下がってくれた。

小さく、メイド長さんの舌打ちが聞こえてね、ものすごく口惜しい顔をしている。何をするつもりだったんでしょ？ うん、知りたくない。

ご大層な大きめの箱を渡され、メイド長さんがようやく、お風呂場から出て行ってくれた。

はぁー……疲れた。

箱は右から順に使えとか、なんとかー。まあいいや、あとで見よう。

そんなことより、

「おっふる、おっふる、おっ、ふ……」

あれ？

そーいえば、なんでクラインがいんの？

なんで顔が真っ赤——……っああああああ！ 全身の血が沸

騰する！ 毛穴という毛穴から、しゅぽーって湯気が出るわよ！

だって、だって、そんなのありえない！ 考えられない！ 信じられない！

「おお、お風呂もおおお！？」

クラインとおおお！？

うそでしょー！

銀の姫 5

広い大理石の浴場に足を踏み入れただけで、心が浮きだつ。床も壁も、すべてが大理石に囲まれ、天井を見上げると女神たちの彫像が楽しそうに踊っていた。

中央には南地方の珍しい植物と一緒に、美の女神が佇んでいる。不思議な形をした葉を後ろに、女神は微笑んでいた。大きな扇状の葉、縦に長い螺旋状の葉、羽状のとなった葉。王都では見ることもない植物が、この大理石の空間に存在している。まるで楽園のように。

優しいミントの香りに包まれて、それだけで十分癒される。

音楽を奏でる小川のせせらぎが心地よい。

美の女神が持つ壺から、お湯が零れ落ちる。それが、みるみる中央の広い浴槽を満たしあふれ出て、床に四方つながつている川へと流れていく。

まるで無限の愛を示すかのように、美しい女神は微笑んで天国へ誘う。

気をゆるめば、今にでも逝ってしまいそうな――……数分前は逝っちゃってました。

告白も何もかもすつとばした、この状況にちよつとだけ、お祖母ちゃんに会いに行っていた。

にこやかに笑いながら、問答無用で追いつ返された……もしかして応援しているの？ 私の気持ちを知っているから、そうなのかな……まあ、いいけどー……けどー……。

でも……でもでもでも！ い、いきなり裸で、おつきあいにはねー
だろおおおお！

恋人でも、なんでもないんだぞう！ 希望はしたいけど、無理！
恥ずかしくて死ぬる！

そんなわけだから、

「この布外したら、みなぎる張り手五十発だからね」
「わかった」

ぎゅーっと目隠し布を強く結んだ。念のために、もう一枚布を重
ねて結ぶ。

くっ……なんだって極上級の天国を前に、こんなややこしいこと
になっているの？

ああ、壺の女神様がこつちにおいでして、優しく微笑んでいら
っしゃるのに！ 落ち着いて、ゆっくり楽しむどころか、満足に己
をさらけ出すことも出来ないなんて……こんなのお風呂じゃないや
い。

お風呂はね、いちばんのストレス発散なんだぞ。疲れもとれるし、
嫌なことも洗い流せるし、女同士の裸のつきあいつてものもあった
し。痴漢を撃退しあった戦友の息はぴったりなんだぞーう！

こいつは見てくれ女だけど、女じゃないもん！ 変態だもん！
中途半端だもん！

「少しキツイ。ゆる」
「だめ」

そんなワガママは許さん。一緒にお風呂に入るとは許している
んだ。それ以外は認めねえ。

「これだと服が脱げない」

フ・ク？ 服と仰いましたか、女神様？ どこに服があるの？

「巻いている布の結び目を外すだけなんだから、見えなくても出来るでしょ。はい、タオル。前は隠してよね」

もうっ、でかい子供じゃないんだから。

一応、クラインの顔近くに手を振ってみる。反応がない。うん、大丈夫ね。それじゃ私も脱いじゃお。うひー、汗でべとべと。

うー……服がすり切れてる。がーん、穴発見……見えない場所だからいいけど、裁縫セット持ってきたっけ？ うーん、記憶にないや。戻ったら、夜の女神様から借りよう。

おおー、さすがバークワース家。タオルがふつかふか。気持ちいい。いい匂い。

このタオル、膝まである。ちょうどいいや、体に巻いてるんるん、おっふる、おっふる、おっふる。

「準備出来たー？」

「ああ」

んじゃ、さっそくおっふるっほおおおおお！？

振り向いたら、白いお山が二つ。

「前を隠せって言ったでしょーが！ なに胸ぼろりしちゃってんのよー！」

私に対する嫌がらせか、ゴルア！

「隠しているぞ」

「胸も隠せつ、胸も！」

「……」

顔を赤くして、なんなのよ。

「胸を隠したら、前が見える」

「アッホー！ そんなちっこいタオルを使っているからでしょ！
これを使え、これ！」

ふかふかロングタオルを女神様の顔に叩きつけた。

信じられんっ！ 本当に自然のまま高い位置をキープしている！
シヨック！

何が悲しくて好きな人の、はりぼてを見なきゃいかんの？ それ
も私よりご立派なはりぼて。

ぐやじい！ 女の誇りが木っ端みじんだよ！ 干ばつした心に大
きな地割れが起こったよ！ 崖崩れだぞ！ このやろーばかやろー！

中身が男だけに無頓着すぎる。

ねえ、野郎ってこんなもんなの？ もうちょっと恥じらいがあつ
てもいいんじゃないの？

……はっ！ もしかして私が女ってこと忘れて、る？ えっ、コ
ゾウ扱い！？ うわああああん！

はりぼてだからって、いい気になるんじゃないぞう！ 絶対に元
に戻してやるからなー！

「できたぞ」

ぐすっ……同じタオルを使っているのに、巻き具合が全然違う。
心がぼこぼこだよ。ネズミにかじられた穴ぼこチーズだよ。

「手だして」

素直に出された手を握りしめると、びくっとクラインの体が少し跳ねた。

「エ、エレン？」

「見えないでしょ。こんなところで転んで怪我をしたら嫌よ。迷惑かけたくないもの」

ゆつくりと歩きながら、近くの椅子にクラインを座らせた。椅子も大理石ですか……ちよっとお尻痛そう。

椅子のそばには、お湯の川が流れている。これは便利ねー。

そーいえば、メイド長さんから箱を渡されたっけ。クラインも渡されていたよね。ちよい待ってて。

箱を取りに戻って、クラインに渡した。

「なんだろうな？」

「さあ。右から順に使えって言っていたけど」

ぱかつて開けてみれば――右から緑、白、青、黄、ピンクの石けん。なんぞや？　こんないらん。

「説明書がある。どれどれ、右から汚れ落とし、美白、潤い、元気、香りと順にかならず使用すること」

五回も洗ったら皮がむける。つか、元氣ってなに？　そんな石けんあるの？

「どうする？」

「緑だけでいい」

「だよーねー。私はどうしようかなー？　そーだ、全部混ぜて使っちゃお」

ここでのお風呂は最初で最後だもん。贅沢しなくちゃもったいない。

「あとは出来るでしょ？」

こくと頷いた。よしよし。それじゃ、私はどこに座ろうかなー。おつ、真後ろにも川が流れて、椅子発見。そっちめざしてレッツゴー！　の前に、肝心なことを忘れてた。

「ねえ、ク——ッ！？」

出るはずの言葉が、喉の奥に押し戻された。

後ろを振り向いたまま、全身の体が硬直する。

解かれたタオルは足の上に置かれて、白い背中がむき出しになっている。

ただの背中なら何も気にすることはなかった
ただの背中じゃないから——。

「なんなの、それはっ！？」

背中の中、拳より少し大きめの丸い珠がある。青白い光が浮かんで、空を駆けめぐる稲妻が入っていた。

丸い珠を囲むように、同じ色の小さな珠が五つ。

珠は綺麗なのに、直接体に埋め込まれているから、見ているだけで痛々しい。

血管が、みみず腫れのように大小浮かんで珠に吸い付いていた。

似ている。

ぷくりと浮かぶ血管も、青白い光も。

「宮廷道化師も、これと同じ光があつた……ねえ、まさか」

クラインは頷いた。

「同じものだろうな。詳しいことはわからん」

こんなことになっているのに気にもしない。興味がない、無関心な口ぶり。

嫌だ。道化師を思い出す。

「わからないのに、なんでこんなことになっているのよ！」

なんで、こんなふうにされているのに平気でいられるの！

「より強い力は時として必要になる。何も出来ずにいるよりは、強い力を得て成し遂げた方がいい」

「だからって……」

「背中の子つが体中の組織を一時的に活性化させる。身体能力が上がり、傷の回復速度も速くなる。腕の傷がないのは、そのせいだ」

悪魔人化は、そのせいなのね。

怖いぐらいに強かったもの。

「ただ意識が軽く飛んでしまうのが、やっかいだな。敵を潰すことだけに意識が持っていかれ、他のことが頭に入っていない」

だろうね、完全にぶつつんしていたから。辺り構わず暴れまくる牛と同じだもの。

「使用後は体に大きな負担が襲ってくる」

「じゃあ、あの酷い筋肉痛は、そのせいなの？」

「ああ。あのまま使用し続ければ筋肉がズタズタだったな。最悪の場合、廃人になるか……まあ、死ぬことはないと思うが」

「ちょっと！ 怖いこと言わないでよ！」

クラインの唇が薄く歪んでいる。

楽しんでいるような小さな笑みが、得体の知れない不気味さに見える……まるで……とっさに唇を強くかみしめた。

その先は思っちゃいけない。考えてもダメ。でないと、クラインを助けられなくなる。

「彼にも扱いが難しいそうだ」

いけない。頭の中が、ちょっと危なかった。
ん？ 彼？

「彼ってだれ？」

「アルフレッド・ロウ——宮廷魔術師の筆頭にあたる人物だ」

「ひー！ ひー！ ひひひひ！ ひー！」

「何か、おかしなことを言ったか？」

不思議そうに首をかしげて、コイツはよ……う！

「おかしくて笑っているんじゃないの！ いや、もう、いろいろとオカシイことだらけで、なにがなにやら困ってんの！」

いっぱい、いっぱい、ツツコミたいところがあるけどね、まずはね！

「なんで、その人に話さなかったの……っ！？ いちばんは、それでしょー！ 宮廷魔術師の頂点とお知り合いなくせに、どうして私なんかに頼んだのよ！ 最初から、その……アルフレッド様だっけ？ その人に頼めば……っ」

クラインは出来ないと言頭を振った。

「変人の巣窟の中で、珍しく話しやすい人物ではあるが、こちらから彼に接触は出来ない」

「どうして？」

「彼は陛下の相談役でもある。彼からの接触がない限りは無理だ。忙しい人でもあるしな。それに――」

目隠しをしたまま、クラインは私に向けて笑った。

「エレンが俺を助けてくれる」

その笑顔に弱いのも、このやろつばかやろつ。

心臓がドキドキする。

体の内側から熱くなっているのがわかる。

「こつちを振り向くな」

頭を掴んで、元の位置に戻した。

目隠しをしているから見えてないけどね……なんか照れるわけですよ。

場所も場所だし、状況も状況だし。お風呂場で、二人きり。しか

毛布の一枚の下は全裸。

クラインに至っては、上半分オープンしちゃってるし………く
ああああ、本当に肌白い。うらやましいな、こんにやろーめ。
みみず腫れした背中では酷いのに、不思議と醜さは感じなかった。
青の光と白い肌が綺麗に調和して、自然と指先が光に吸い寄せら
れる。

……さわっても大丈夫かな？

「クライン、触れてもいい？」

あとほんの少しのところで、聞いてみた。
勝手に触って何かあったら怖いし、大切なものみたいだし。

クラインは頷いてくれた。

そつと青の珠に触れると、光がふわりと反応した。
なんだろう。夜明けの優しい青に似ている。

触れる前は稲妻が中で暴れていたのに、今は穏やかに淡く光って
いた。

指を滑らせると、光に強弱がでてきて面白い。

「エレン」

夢中で遊んでいたら、クラインは気まずそうな声で、

「魔光玉は俺の体の一部になっている。つまり、神経もつながって
いるから……」

「から？」

「その……くすぐりたい」

ほんのり、クラインの頬が赤く色づいた。

「わあ！ ご、ごめんなさいっ！」

ぱつと手を離した。

えーっと、えーっと！ 私、今、なにをしていた？

青い光を触っただけなもの。白い肌には触ってないもの。

ガラスの珠は冷たかったのに、指先は熱い。

ドキドキと心臓が騒いでいる。

ちらりと白い背中を見れば、両肩がゆっくりと上下に動いていた。クラインは何も言ってくれない。

なんか言え、バカ。

気まずいじゃない。

このドキドキがクラインに聞こえたら、どうしよう。

胸に両手をあてた。

これで音が抑えられたらいいのに、胸の高鳴りは激しく波打つ。

ふと、真下に茶色い綿が見えた。

綿っつか、まあ、もふもふなんだけど。そーいや、いたね……。

あ、忘れていたなと恨みがましい目で訴えている……はいはい、

ごめんなさいね。

でも、ちょうど良かった。

「もふもふ、おいで。綺麗に洗ってあげる」

おっと、その前に肝心なことを言わなくちゃ。

「クライン」

名前を呼んだだけで、びくつと体が大きさに跳ねた。
なんで驚く？

「おお、おれ、俺……も……？」

なんでどもる？

「ちよつとでも目隠しを外したり、振り向いたり、そぶりなんかしたら、ぼこぼこにしてあげる」

わかった？ と念を押して言うと、クラインはうなだれながら、こくんと頷いた。最後にため息。

なんなの、こいつはよー。まあいいや、ほつとこ。

反対側の椅子に腰を下ろして、いざ、もふもふを夢の世界へ誘うべし。ふっふっふっ、覚悟しろー。

泡立てた石けんで、もふもふの体を綺麗にー、綺麗にー……って。

「こら、もふもふ暴れるな。ちよつとっ！ こらこらこらっ、足の間に入ってこないでよっ！ ひゃあっ……もう！ そこ舐めるな！ はい、じつとする！」

なんだって落ち着きがないんだ。

むりやり搦んで、小さい背中をこっちに向けさせた。

「そのまま動くんじゃないぞ」

わしわしわし、もふもふの背中が泡で膨らんでいく。

おとなしくされるがままに、うとうとしはじめちゃって、可愛い

！。

「もふもふ、気持ちいい？」

だらけた力無い返事がかえってきた。

声にするのもめんどくさいってか。まあ、いいけどね。

「……まるで拷問だ……」

後ろから、気力無い声もれてきた。

声にするのがめんどくさい。ほっとこ。

まったく、なにが拷問なの？ どこが不満なの？

この先、二度とこんな樂園には入れないわよ。ぜーたくなヤツめ
っ。

ぼそりと、クラインが小さく呟いた。

普通だったら、何を言っているのか分からないけど、ここはお風

呂場です。

小さな声でも響くんです。

アホの子は、

「……犬になりたい……」

だって。

ばっかじゃないの。ねー、もふもふ。

後ろから、ため息声が連続して聞こえてくる。はあはあと変質者
か。イライラする。

断固として無視を決め込んでいたけどね。さすがにね。

「これを使いなさいっ」

三十六回目のため息に、元氣石けんを投げつけてやった。

銀の姫 6

「あゝ……気持ちいい……」

広い浴槽に肩まで浸かって、その気持ちよさにつつらつつらと船をこぐ。

体の疲労が消えていく。このまま眠りたい。

本当に銀姫様様です。感謝しても、感謝しきれないよー。規模が凄すぎるもの。

しかし、

「銀姫様……エレオノーラ様って変わった方ね」

「そうだな」

向かい側に、髪を雑にまとめ上げた女神様が浴槽の縁にもたれて、だらしな〜く座っている。

まあね。気持ちよすぎて、そーなるよね。

ところで、頭の上で寝そべっている子犬様は重くないの？ ヤツは完全に夢の中だ。ぴすぴすと寝息が聞こえてくる。

「エレオノーラ様のこと、知っていたでしょ」

「ああ」

やっぱりね、何か言いたそうな顔をしていたもの。でも、一目惚れじゃなかったのね。ちよつと安心。

「王妃様の誕生祭に一度、王城で挨拶を交わしたことがある。まさ

か、あのような元気の良いご令嬢とは思わなかった。噂は当てにならない」

「エレオノーラ様に噂なんてあるの？」

噂されるほど変人扱いなの？ たしかに変わりすぎだけどね、でも酷い！ とつても良い子なのに！

「病弱で屋敷から滅多に出てこない、おとなしいご令嬢だと、誰もが口をそろえて言う。俺も噂通りの方だと思った。貴族どもの輪に進んで入ることもなく、誰かと楽しく会話をすることもない。人形のように静かに座っていたな」

うーん……想像つかないや。

見た目はお人形さんだけど、中身はぶっ飛んでいるよ。屋敷から脱走した度胸も根性もすごいし。

正門には四人の筋肉がいるのに、どうやって逃げ出したのよ？ 手慣れているみたいだし、一度や二度じゃないわね。

だから眼鏡が傍にいるのかしら。苦労性じゃ、絶対無理。

「そっくりさんだったとか？」

「会ったのは一年前だ。さほど外見に変化はなかった。間違いない」

それじゃ、貴族の誰とも関わり合いたくないってことかな。

貴族の世界は得体が知れないって言うし、人間関係がドロドロに溶けちゃったところじゃないでしょ。だったら、黙っている方が楽だもんね。

それに、外出しないって噂が流れるぐらいだから……もしかして、友達いない？ えっ、友達第一号？ まじで？

すっ飛んだ行動は貴族の必殺技と思っていたのに、あれって友達の距離感が分からなかっただけ？

でも、貴族の必殺技は使っているよね。このお風呂はどうみても必殺技でしょ。

はああああ。幸せ過ぎて、気を抜くと口から魂が出ちゃうよ。クラインも気を抜きすぎて、もれてるもれてる。

「宰相殿のことを考えているのかもしれないな。先代から仕えているご老人だ。そろそろ七十にとどく頃か」

ハイ？

ななじゅうつていったら、お祖母ちゃんの年齢ですよ……まーじーでー。

「お母さんは王族の方だね？」

「いや、その方は流行病で亡くなっている。母君は後妻だが、たしかご令嬢を出産した時に亡くなったと聞く」

そっか……。

見たところ兄弟姉妹がいないようだし、周りは大人ばかりで寂しかったんじゃないかな。

私も、クラインと出会う前は大人ばかりで、結構寂しかった覚えがあるもの。

子供が来ると、より稼ぎのある働き口を求めて、みんな大きな町や王都に引越すんだよね。

だから村には大人が多い。

村にいる子供は家の手伝いをしている子供ばかりだし、その子たちは大きかったし。

年が近い子供はクラインだけ。

クラインが来てからは、よく遊んでもらった。

銀姫様はどうなんだろう？

普通の小さな女の子として、周りは見てくれた？

周囲がどんな目で銀姫様を見ていたのか、容易に想像がつく。

「十五、六ぐらいだよね？」

「今年で十六だそうだ」

「ずいぶんと、エレオノーラ様に詳しいのね」

嫌みじゃなく、純粹にそう思っただけ、なんだけど――。

「宰相殿に『娘と結婚しないか？』と言われた」

……………は？

何あつさり、隣の家のみかん食べた、みたいな軽い言い方してんの？

ちよちよちよっ！ ええええええええええ！？ なに、この爆弾発言は！？

私、どう反応すればいいの！？ こここ、婚約者！？ クラインと銀姫様が婚約しちやってんのおおお！？

え、じゃあ、あの時の妙な見つめあいって……………見つめ愛？
ぶくぶくぶく、溺れちゃう。浴槽で溺死しちゃう。

銀姫様に嫉妬しても次元が違い過ぎて、嫉妬の炎が出てこない。
ぶすぶすと黒い煙が出てくるだけ……………だって見た目も、年齢も、お似合いすぎる。

クライン、元に戻ったら絶対イイ男だと思う。銀姫様は可愛くて、何よりバークワース家のご令嬢でしょ。こんなオイシイ話を蹴ったりなんて、しな……………。

「めんどくさいから、断った」

うそだろー！ 足癖悪い足は、それも蹴っちゃったのー！？
ちよっと期待するじゃないの！

「なんで!？」

「興味がない」

本当に興味ありません口ぶりで言っちゃった。

それって、結婚そのものに興味がないって解釈でいいのかしら？
……しくしくしく……ほっとしたいのに、ほっと出来ない……。

「宰相殿は俺を見るなり、俺の影を踏みながら結婚しろとブツブツ
呟く。正直、うざい爺さんで困っている」

おおーい！ それ呪っているのよ！ 気づけー！
宰相様直々の申し出を断る怖いもの知らずに、まともに考えるの
がアホらしくなってきた。

とにかく、今は結婚する気ないんでしょ。
男はいくつになっても結婚できるからね。クラインなら余裕で相
手から来ちゃうよ。

私は、さすがにねー……。

「結婚か……」

この歳で懂れていいやら、悲しくなるやら。
切実というか、切羽詰まっているというか、崖っぷちというか……
……とつくに崖からダイブしちゃったとでもいうか……遠い目になる
わよ、くそう。

まともな恋愛なんてしたことがない。お付き合いの経験もゼロ！
手をつないで、どこかに行ったこともなければ、告白したことも、

されたこともないわよ！

恋愛の前に、頭の中は宮廷魔術師になることでいっぱい、いっぱい。他のことは何も考えられなかった。

もし、あの約束がなかったら、どうなっていたんだろう？

知らない誰かと、知らない家庭を築いていた？　うーん……　なーんか、想像できないな……。……。

「エレンは――」

目隠しをしたまま、クラインはじつと私を見る。

ねえ、もしかして見えるの？　ざぶざぶと、真っ直ぐこっちに来るんだけどおおお！？　おまえ、見えてんのー！？

アーッ！ ちよつとまってー！ 私、今、素っ裸なんだってばー

!

田舎じゃ、タオルを巻いたまま浴槽に入るのは禁じられているの！ タオル巻いて入ったら、おばちゃんたちにフルボッコ説教されちゃう！ やつらは怖いんだぞ！ その恐怖が身に染みているから——って、ちよい待てえええええ！

そりゃー、クラインの下半身はタオルを巻いているから安全圏でしょうけど……安全圏ってなんだー！？安全圏ねえよ！上はオ
ーブンしちゃっているじゃん！

離れて座っていたし、この際、仕方がないから我慢してただけで、うひい！ 白い山が近づいてくる！

わあ！ 逃げそびれた！ ややや、やべええええ！ 後ろに逃げ場なし！

手を伸ばして、ななな、なにごとであるかー！ 浴槽の縁に両手をついて、私を閉じこめた！

ひい
いい
いい
いい
いい
いい
！
小さいタオルで隠すしかない！
おお
おお
おお

お、お助けー！

「みみみみ、みえてんの！？　なんでこっちにいるの！？」

「見えないが、どこにいるのか気配で分かる。そんなことより……」

ぎゃーす！　顔近いっ！　近いってば！

「結婚の約束をした相手がいるのか？」

「……は？」

「それとも、もう結婚している……のか？」

いやいやいやいやいや、話がぶっ飛びすぎ。

みなぎる力の限り、頭を横に振った。

否定しているのに解放してくれない。不機嫌丸出し、面白くない顔をして……私、何か気を悪くするようなことした？

目隠しは当然でしょ！　それで不機嫌になれたら、私なんか不機嫌どころじゃねえぞ！

「一緒にいた男はなんだ？」

「なんだと言われても……え、あ？　ムメイのこと？」

むすっと、口が山の形になった。

「助けてくれた恩人で友達だけど……」

「それだけか？」

「それ以外なにあるっていうのよ。ムメイは、リンさんとこの見習いで従業員なんだから」

「従業員？」

「パナツツエさんの元旦那の店が、あの場所にあるの。そこの従業員。今日、偶然出会って知ったばかりなんだから」

「恋人ではないんだな？」

「ぶっ！ ばっ。恋人なんか——っ！」

じゃないと言いたかったのに、出来なかった。

もふもふが寝返りをしようとした拍子に、後ろ足から下に滑り落ちた。必死で足を蹴って元の位置に戻ったけど、目隠しがずれちゃって……。

大きく見開いた青い目が下へ——っ！？

「どどどど、どえろおおおお！」

ぱんっ。

小気味よい音と一緒に、もふもふが浴槽に落ちた。

銀の姫 7

しょぼくれる背中を、じーっと睨みつける。

「エロ変態、エロ騎士、エロ団長」

「……すまない」

突き刺す視線つて、きつとこれね。クラインの背中が、だんだんお湯の中に沈んでいくもの。

このやろつ。よくも、どえろ行為をしたな。許さねえ。ヤツも許さねえぞ、どこにいった？

いた。白い毛玉は縁の上に避難していた。あとでお仕置きしてやる。

「痛い……」

ぼそりと、頬を押さえて言いやがりますけどね。みなぎる張り手一発は軽い方なんだから。

「次にどえろ行為をしたら、ぼこぼこの刑だからね！」

「今のは事故だぞっ」

「事故だろうが、故意だろうが、見たんでしょーが！ 見たでしょー！ ばつちし見たんでしょー！」

クラインは必死で頭を斜めに振る。てめえ、どっちだ？ 灰色とでも言いたいのか、ああん？

「ったく、なんでムメイが恋人なのよ。ありえない。問・題・外！」

たしかに見た目王子様だし、危ないところを助けてくれたけどね、中身のがつくり感ハンパないよ。あんな不運男と一緒にになったら、こっちの身が持たない。

年下だから弟みたいない感じがなあ。友達としてなら好きだけど、恋人としてはお断りです！

ちくしょう。目の前のどーしようもない男に惚れているのに！私ってば、どーしようもねーな！

「しかし、思っていたよりはあつたな」

「なにが？」

「エレンのむ——」

「やめてよっ！ 今度ハレンチ発言したら、お金も命も取るわよっ、このやるーばかやるー！」

やっぱり黒じゃないの！ あと一発叩いておけば良かった！

もう、お嫁に行けない！ どーしてくれるんだ、こんちくしょーめ。責任とってくれよ。喜んじゃうぞ、このやるうばかやるう。

結婚に興味がないんでしょ？ 宰相様の申し出を断ったくせに。仮に私が既婚者だとしても、ムメイが恋人だったとしても（絶対に断固としてありえませんが）、なんでそんなことを気にしちゃうのよ？ 不機嫌そうな顔をして……残念な胸が心配で可哀想ってか？ よけいなお世話だ、ばっきやるー。こっちは結婚したくても、できねーんだ。相手がその気ゼロじゃ無理なもの。

はあ……ぶくぶくぶく。鼻ギリギリまで水に沈む。

ゆらゆらと水の中で、青い光が優雅に踊っている。ときどき、白い稲妻が弾けて光った。

えーっと、名前なんて言ったけ？ まま、まこつ……。

「魔光玉って言ったよね。背中の上」

「ああ」

「振り向いたら、問答無用でばここの刑よ」

ぴたりとクラインの動きが止まった。

無意識なんだろうけどね、振り向かれたら私の方が耐えられそうにないの。

目隠しはしていても、私がクラインの顔を見られない。恥ずかしいから。

あー、もう！　なんだって、一緒にお風呂に入ることを許しちゃったの！？　私のバカ！　バカバカバカ！

は、裸を見たのに……　タオルで隠したけど、でもばっちり見られた……　へこむ。

それなのに、反応がいまいち薄すぎじゃね？

いやいやいやいやいや、期待しているわけじゃないよ……　すいません、少しは期待していました。

はああああ。男って、どえろな生き物だと思っていたのになあ……　その姿で突進されたら、みなぎる張り手どころじゃないけどねー。

でもね、でもね。分かってました。分かっていたことでした。引く手あまたのクラインには、全く興味の無い貧相な体でしょうね。モテる男はいいですねー。夜の女神様んトコのお姉ちゃんたちとイイコトしているんですよ。していたから、お世話になっているのよね？　白状しろー！

うっ……　ここは思い切って、私が誘惑すべき？　白い大山脈相手に？　中身は男でも、そっちの気はないっつーの。

「やはり気になるか？」

クラインの声が気まずそうに響く。

「クラインは気にしているの？」

気にしていない様子に見えたのに、内心は嫌なのかな？

「いや……エレンは、この背中を気持ち悪いと思わないのか？」
「思っていない」

だから振り向くな。ええい、もふもふ並に落ち着きがないわね。

「さつきね、触りながら綺麗だなんて見とれていたの。気持ち悪いって思ったら触らないでしょ？」

水の中でぼんやりと、優しい夜明けの青が揺らめいている。

「青ってクラインの色よね、目の色も青だし。少しは痛々しいなっ
て思うよ。でも。どこにも醜いところなんてない。好きな色だもの」
「エレンッ」

勢いよく振り向いたぞ、こいつ！ あ・れ・ほ・ど、

「振り向いたら、ぼこぼこの刑って言ったでしょーが！ ぼこぼこ
になりたいの！？」

「本当に何も見えないぞ。別に構わな……」
「構う！ いいから後ろ向いて！」

こっちに顔を向けられると、見られているような気分になるんだ

から、しょーがないじゃない。

しぶしぶ、クラインは後ろを向いた。

もういいや、考えるのが馬鹿馬鹿しくなってきた。

青い珠が何であれ、それがなかったら、ここで幸せ気分になんか
てなかったもの。

クラインが助けてくれたから……あ、私ってば肝心なことを言っ
てなかった。もうっ。

「振り向かないで、そのまま聞いてね」
「わかった」

小さく息を整えて。

「助けてくれて、ありがとう」

あの時、来てくれなかったら確実に死んでいた。

「お礼を言つのを忘れていたから……その、ごめんね」

怒っているかな？

「怒っていない」

うん………うん？　ちょっと待て。

「心読めるの!？」

「いや。エレンのことだから、そう思ったただけだ。昔から変わって
いない」

がーん！　昔からって……やっぱり、子供あつかい!？

「十六年も経って変わったかと思ったが、あの頃のままだ」

「うわーん！ 子供あつかい決定ー！ なんて変わらなかったの、私ー！？ せめて、見た目が、ボーン・キュ・プリンだったら良かったのに！」

「おめーが、ひどく変わってどーすんのよ。ボボーン・キュ・プリンと変わりすぎだよ。」

「礼なら俺ではなく、あいつに言ったほうがいい」

「もふもふ？」

「あいつがエレンのところへ案内をしてくれた。しっぽが強く回転していたぞ」

「そういえば、果実酒が服についたっけ。」

「そっか、そっか。」

「じゃあ、お仕置きは勘弁してあげる。」

「もふもふ、ありがとね」

手を伸ばして、白い頭を撫でた。可愛いのに。

「あの爆発で位置が把握できた」

「あれねー。もう駄目だーって思っちゃったよ」

「今だから笑っていられるけどね。」

「あの時は本当に終わったとをををを！？ クラインが白く終わってるー！？」

「……………すまない」

しまったあああああああ！ つい、ぼろつと本音が出ちゃって——って、ひiiiiiiii！ 沈みすぎ！ 浮上して、浮上！ 頭のとっぺんまで沈んでどーすんの、オイ！

「ごめんっ！　そこまで深く引きずっていたなんて、思わなかったからっ！」

私のバカ、考えなし。

「エレンが謝ることはない。謝るのは俺だ。すまな……」

「謝らないで。クラインが謝る必要なんてない。クラインが気になるなら、私も気になる。だから、クラインも気にしないで」

気にしなくなるほど、たくさんありがとって言えば伝わるかなあ。

……逆にウザいかも……うーん、言葉より行動で伝える？　感謝のキス？

キスの前に拳で伝えそうだから、これはナシ。軽い挨拶って思えばいいんだけどねー、経験ゼロの私にはレベルが高いのですよ。いい歳して、キスも出来ないってか……この歳になると、臆病になるんだい。

クラインは少し黙って、わかったと頷いてくれた。ちょっと困り顔になっていたけど、もう気にすんじゃないぞ。今度へこんだら、グーパンチだ。

そうそう。

「後で見に行ったら案の定、警備兵がいたんだけどー……やっぱり、鉄物……レオナード様の耳には、もっ……」

「入っているだろうな」

だよねー。

「警備兵にも追いかけられるの？」

のんびり、お風呂に入っている場合じゃない。

でもねー。警備兵なんかよりも、楽園風呂が優先だよねー。

ほんとにほんとに、ほんとうに！ 一生にあるかないかの楽園風呂だもん！ 悔いはあるけど、気持ち「悔いはなし！」と叫んじやう。

「宮廷道化師が動いた以上、表立った動きはないはずだ。ヤツは裏の存在だからな。知らない人間の方が多い」

「それじゃ、別の宮廷道化師が来るの？」

「さあな」

「さあなって……」

「俺は反逆者ではない」

わかってる。

「エレンもだ」

力強い声が静かに響いて、次の言葉は待っても出てこなかった。

お風呂から出ると、待ちかまえていたかのようなメイド長さんがいた。優しい顔をして、目がキラリと光る。狩人の目だ……ごくり。隣の着替え部屋に案内してくれた。

ただ着替えをするためだけの部屋なんだけど……家の寝室の四

倍は広い。どーしよう、この様子だと、トイレにも負けそう。
服は洗濯中だって。あんな、ぼろ雑巾となつた服を洗ってくれる
なんて、ありがとうございます。

「お嬢様の前で、みつともないお姿はお見せできません」

……そーですね。ぐさりと骨身に染みました。

まーね、穴のあいたぼろ服で銀姫様には会えないですよー。隣
の女神様にいたっては、服ですらありませんから。

用意された服を受け取って、やんわりと、丁重に、口惜しい顔の
メイド長さんに少しの間、退室してもらった。

いい人なんだけど、どこか危険よね、メイド長さん。
まあ、いいや。

おつ。ワンピースだ。動きやすそうな服でよかったー。ごてごて
したドレスだったら、どうしようかと思っちゃったよ。

ただねー、色がもふもふカラーなんだよねー。それと腰の黄色い
リボンが、これまたなんとも目立ちまくりで……。

これとそつくりのワンピースを、子供の時に着た覚えがあるよ。
ほーら、例の約束した日のワンピースが目の前に……。

ねえ、マジで？　なんで、ワンピースが成長して戻ってくるの？
かかかか、勘弁してくれー！　うつつ……これしか用意してく
れてない……メイド長さん！　こんだけ部屋が広いんだー！　他
にもあるだろー！　ただでさえ、好きな人に子供あつかいされてい
るのに、こんなのを着たらお菓子を大量に貰っちゃうよー！

クラインに生暖かい目で見つめられたら……って、そこだけなん
で時間が止まつてんの？

どーやら、服装が原因らしい。どれどれ……わーお。これは見事

に、真っ赤に燃えた情熱のドレスだね。そりゃ燃え尽きるわー。

胸元が大きく開いちゃって、夜の女神様だったら平気で着こなすだろうなあ。絶対似合う。

「これ着るの？」

どこぞで夜会でもあるの？

ちらりと女神様を見れば、口が山の形になっていた。

結局、青のロングワンピースで落ち着いた。

落ち着いたつつーか、粘り勝ちつつーか。メイド長さんとの激しい攻防の末、勝ち取った勝利がロングワンピース。

本人はズボンを所望したけど、メイド長さんの一喝で諦めた。

ちなみに私の所望も、にこやかに「お似合いですよ」と軽くけっ飛ばされた。

ひどい。

泣く泣く、白のワンピースに着替えた私に、女神様はにっこり微笑む。

「昔のままだ」

うわああああん！メイド長さんのばかり！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2264x/>

約束の先にあるもの

2011年11月17日17時47分発行